

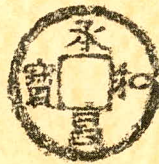
大阪市平野区

長原遺跡発掘調査報告

XI

都市計画道路久宝寺太田線

建設工事に伴う発掘調査報告書



2004 . 3

財団法人 大阪市文化財協会

大阪市平野区

長原遺跡発掘調査報告

XI

都市計画道路久宝寺太田線
建設工事に伴う発掘調査報告書



2004 . 3

財団法人 大阪市文化財協会



古墳時代の土器

大阪市平野区

長原遺跡発掘調査報告

XI

都市計画道路久宝寺太田線
建設工事に伴う発掘調査報告書



2004 . 3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

八尾市の都市計画道路・久宝寺太田線は、長原遺跡の東北地区の東端をかすめるように貫いている。長原遺跡東北地区は、近年、飛躍的に資料が蓄積されている地域である。

今回報告する調査は、いずれも狭小な面積であるにもかかわらず、古墳時代から平安時代にかけて大きな成果を挙げることができた。古墳時代の調査成果で注目すべきは、周囲で見つかっている盛土遺構が検出されたことであり、不明な点が多い盛土の構築目的について治水・灌漑との係わりを示す資料を得ることができた。また、平安時代の溝や土壙からは瓦や土器が多量に出土した。これらは自然堤防上に営まれた集落の一端を示す資料として貴重である。

一連の発掘調査から本報告書の作成にあたっては、八尾市都市整備部をはじめとする関係諸機関、および周辺住民の深い理解と御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。

2004年3月

財団法人 大阪市文化財協会

理事長 脇 田 修

例 言

- 一、本書は財団法人大阪市文化財協会が八尾市都市整備部の委託をうけ、2000年10月から2003年3月まで3個年にわたって平野区長吉六反4丁目で実施した都市計画道路久宝寺太田線建設工事に伴う発掘調査(NG00-30、01-25、02-4、NGは長原遺跡を示す)の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、八尾市の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長京嶋覚の指導のもと、同課村元健一(現研究資料課)、杉本厚典、辻美紀が担当した。調査の面積・期間などは第Ⅰ章第2節に記した。
- 一、本書の作成は研究資料課課長代理松尾信裕の指揮のもと、2003年7月8日～2004年3月25日にかけて研究資料課報告書作成係寺井誠、村元が行った。遺物については寺井が、層序や遺構、まとめについては村元が各調査担当者の作成した完了報告書をもとに執筆を行い、編集した。英文要旨の作成は英国ケンブリッジ大学大学院中西裕見子氏に依頼した。
- 一、出土した木製品・金属製品の保存処理と整理は研究資料課伊藤幸司・鳥居信子が行った。
- 一、動物骨の同定・分析は大阪市立大学安部みき子氏に依頼し、御教示を賜った。
- 一、遺構写真は各現場担当者が撮影し、遺物写真の撮影は楠華堂内田真紀子氏に委託した。
- 一、NG02-4次調査の基準点測量は、国際航業株式会社に委託した。
- 一、出土した木器の分析はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、分析結果は第Ⅲ章第1節に収録した。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、その他の資料はすべて当協会が保管している。
- 一、発掘調査から本書の作成に係る作業には補助員諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表したい。

凡 例

1. 本書で用いた層位学・堆積学的用語については、[趙哲済1995]に準じる。また、地層名は、「長原遺跡東北地区の基本層序」(以下、六反層序と表記。別表)との対比を行い、六反層序に準じた地層名を付している。一例をあげれば、六反10B層に相当する地層は第10b層と表記する。なお、現場地層と六反層序ならびに「長原標準層序」[趙哲済2001]との対比は各報告の層序表内で行なっている。本文中での各層位を述べる際、長原遺跡東北地区については六反層序を用い、表記の際には「RK」を冠し、それ以外の地区については長原層序を用い、表記には「NG」を冠している。
2. 本書における遺構名の表記には、建物はSB、柱穴はSP、土壌はSK、畦畔はSR、溝はSD、自然流路はNR、その他のものはSXをそれぞれ冠している。遺構番号は3ないし4桁の数字で表し、最初の数字は遺構の属する「六反層序」の地層番号を付している。一例をあげれば、RK 7層層準の溝SD01は「SD701」となる。
3. 本書における遺物番号は1からの通し番号を付している。動物骨は、現場での遺物取り上げ番号を用いている。
4. 本書で用いた座標値は世界測地系に基づいている。水準点は大阪市土木局管理の「南-49(大阪市立長吉南小学校内)」をもとに長吉東部土地区画整理事務所が設置したものを利用し、T.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文中では「TP」と略称している。
5. 本書で用いた地層の土色は[小山正忠・竹原秀雄1996]に従った。
6. 本書で用いた土器編年と器種名については、弥生土器は[佐原真1968]に、古墳時代の須恵器は[田辺昭三1981]に、土師器は[辻美紀1999]に従った。飛鳥・奈良時代の土器については[古代の土器研究会1992]に、瓦器碗については[尾上実ほか1995]に従い、製塩土器については[積山洋1993]に従った。
7. 註は各節末に、引用・参考文献と索引は巻末に掲載した。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 長原遺跡の発掘調査	1
第1節 調査の経緯と調査地の位置	1
1) 発掘調査にいたる経緯	1
2) 遺跡の立地と調査地の位置	5
第2節 発掘調査の経過と概要	7
1) 北調査地 (NG00-30)	7
2) 南調査地 (NG01-25・02-4)	7
第Ⅱ章 調査の結果	9
第1節 北調査地 (NG00-30次) の成果	9
1) 層序と各層出土の遺物	9
i) 地層	ii) 各層出土の遺物
2) 奈良時代の遺構と遺物	12
i) 溝	ii) 溝出土の遺物
iii) 動物骨	
3) 平安時代前期の遺構と遺物	19
i) 柱穴	ii) 溝
iii) 土壇	
4) 平安時代後期の遺構と遺物	21
i) 土壇状遺構	ii) 土壇状遺構出土の遺物
iii) 地震の痕跡	iv) 地割れ出土遺物
v) 流路	vi) 流路出土の遺物
5) 鎌倉時代以降の遺構と遺物	32
第2節 南調査地Ⅰ～Ⅲ区 (NG01-25次調査) の成果	33
1) 地層	33
2) 平安時代の遺構	36
i) 第5c層上面検出遺構	ii) 第4biii層上面検出遺構

3) 鎌倉～室町時代の遺構	36
i) 第3b層基底面検出遺構	
ii) 第3a層内検出遺構	
第3節 南調査地Ⅳ～Ⅴ区（NG02－4次調査）の成果	39
1) 地層	39
2) 弥生時代～古墳時代前期の遺構	41
3) 古墳時代中期の遺構と遺物	42
i) 盛土遺構	
ii) 盛土遺構出土の遺物	
iii) 溝	
iv) 溝出土の遺物	
v) 盛土遺構に関する知見	
4) 奈良～平安時代前期の遺構と遺物	49
5) 平安時代中期の遺構と遺物	49
6) 鎌倉時代の遺構と遺物	50
7) 室町時代以降の遺構と遺物	52
第Ⅲ章 調査成果の分析と検討	53
第1節 長原遺跡NG00－30次調査で出土した木製品の樹種	53
1) はじめに	53
2) 試料	53
3) 分析方法	53
4) 結果	53
5) 考察	55
第2節 まとめ	57
1) 縄文時代晩期	57
2) 弥生時代	57
3) 古墳時代	57
4) 古代	59
5) 鎌倉時代以降	61
引用・参考文献	67
あとがき・索引	
英文目次・要旨	

図 版 目 次

- | | | | |
|---|--------------------------|----|------------------------|
| 1 | 北調査地 地層 | 6 | 南調査地第Ⅳ・Ⅴ区 古墳時代遺構 |
| | 上：東壁地層断面(第1～4b層)(北西から) | | 上：Ⅴ区SX704検出状況(北から) |
| | 中：北壁地層断面(第7a～7b層)(南から) | | 中：Ⅳ区SX704検出状況(南から) |
| | 下：深掘りトレンチ地層断面(第7b～10bi層) | | 下：盛土内土器出土状況(北から) |
| | (西から) | 7 | 南調査地第Ⅳ・Ⅴ区 古墳～平安時代遺構 |
| 2 | 北調査地 奈良～平安時代遺構 | | 上：SD704断面(南から) |
| | 上：SD601(北から) | | 中：第5層上面検出遺構(北から) |
| | 中：第5a層上面検出遺構(東から) | | 下：第4ci層上面検出遺構検出状況(北から) |
| | 下：SX4c01(東から) | 8 | 北調査地 飛鳥～奈良時代の遺物(一) |
| 3 | 北調査地 平安～室町時代遺構 | 9 | 北調査地 飛鳥～奈良時代の遺物(二) |
| | 上：杭倒壊状況(南東から) | 10 | 北調査地 飛鳥～平安時代の遺物 |
| | 中：NR4c01断面(南西から) | 11 | 北調査地 平安時代の遺物 |
| | 下：第3b層上面検出遺構(北から) | 12 | 北調査地 製塩土器・瓦 |
| 4 | 南調査地第Ⅰ区 地層・平安時代遺構 | 13 | 北調査地 木製品・動物骨 |
| | 上：Ⅰ区西壁地層断面(北東から) | 14 | 北調査地 平安～鎌倉時代の遺物 |
| | 中：第5c層上面検出遺構(南から) | 15 | 南調査地 弥生～古墳時代の遺物 |
| | 下：SR401検出状況(北から) | 16 | 南調査地 古墳・鎌倉時代の遺物 |
| 5 | 南調査地第Ⅳ・Ⅴ区 地層・弥生時代遺構 | 17 | 木材(一) |
| | 上：Ⅴ区南壁地層断面(北から) | 18 | 木材(二) |
| | 中：Ⅴ区西壁地層断面(東から) | 19 | 木材(三) |
| | 下：第9層上面検出遺構(南から) | 20 | 木材(四) |

挿 図 目 次

図 1	長原遺跡の地区割と周辺の遺跡	1	図23	NR4c01・4c02断面図	29
図 2	調査地周辺の既往の調査	2	図24	NR4c01出土遺物(1)	30
図 3	北調査地の地区割	4	図25	NR4c01出土遺物(2)	31
図 4	南調査地の地区割	4	図26	第3b層上面検出遺構平面図	32
図 5	長原遺跡周辺の地形分類	5	図27	各層・遺構出土遺物	32
図 6	北調査地地層断面図	10	図28	南調査地Ⅰ～Ⅲ区地層断面図	34
図 7	各層出土遺物	12	図29	平安～室町時代の遺構平面図	37
図 8	第7ai層上面検出遺構平・断面図	13	図30	南調査地Ⅳ・Ⅴ区地層断面図	40
図 9	SD601出土土師器	14	図31	弥生時代の遺構平面図	42
図10	SD601出土須恵器・土製品	15	図32	周辺調査地検出の古墳時代盛土遺構	43
図11	SD602出土遺物	16	図33	SX704・705平・断面図	44
図12	第5b層出土遺物	17	図34	SX704・705およびSD703・704出土遺物(1)	46
図13	製塩土器	18	図35	SX704・705およびSD703・704出土遺物(2)	47
図14	第5a層内検出遺構平・断面図	20	図36	平安～室町時代の遺構平面図	50
図15	第5a層内検出遺構出土遺物	21	図37	各層・遺構出土遺物	51
図16	第5a層上面検出遺構平面図	22	図38	盛土遺構および流路想定図	58
図17	SX4c01平・断面図	23	図39	奈良時代末～平安時代初頭の 長原遺跡地形復元図	60
図18	SX4c01内検出杭列平面図	23	図40	六反自然堤防柱状図	61
図19	杭断面図	24			
図20	SX4c01杭	25			
図21	第5a層上面検出遺構出土遺物	27			
図22	第4cii層出土遺物	28			

表 目 次

表 1	長原遺跡東北地区におけるおもな調査	3	表 6	NG01-25次層序表	35
表 2	発掘調査の期間など	7	表 7	NG02-4次層序表	41
表 3	NG00-30次層序表	9	表 8	古墳時代盛土遺構一覧	43
表 4	出土ウマ骨観察表	19	表 9	樹種同定結果	54
表 5	ウマの歯の計測値	19	別表	長原遺跡東北地区の基本層序	64・65

写 真 目 次

写真 1	北調査地調査風景	7	写真 8	SD501断面(東から)	36
写真 2	北調査地深掘りトレンチ	7	写真 9	SR401断面(東から)	36
写真 3	ウマ骨出土状況	18	写真10	甕268出土状況	45
写真 4	杭 6・7 切断部	25	写真11	SX704地層断面	48
写真 5	杭11検出状況	25	写真12	甕247出土状況	48
写真 6	南壁断層	26	写真13	鉈319	49
写真 7	瓦器碗226に見られる粘土板接合法	31	写真14	SX4b01完掘状況(北から)	49

第Ⅰ章 長原遺跡の発掘調査

第1節 調査の経緯と調査地の位置

1) 発掘調査にいたる経緯

八尾市の都市計画道路である久宝寺太田線は北から跡部遺跡・太子堂遺跡を通り、大阪市域に入り、長原遺跡東北地区にかかる南北方向の道路である。長原遺跡東北地区は、1995年以来、大阪市長吉東部地区土地区画整理事業が継続的に行われ、数々の成果をあげている。今回調査の対象となったのは、この東北地区の中でも最も東辺に位置している(図1・2)。

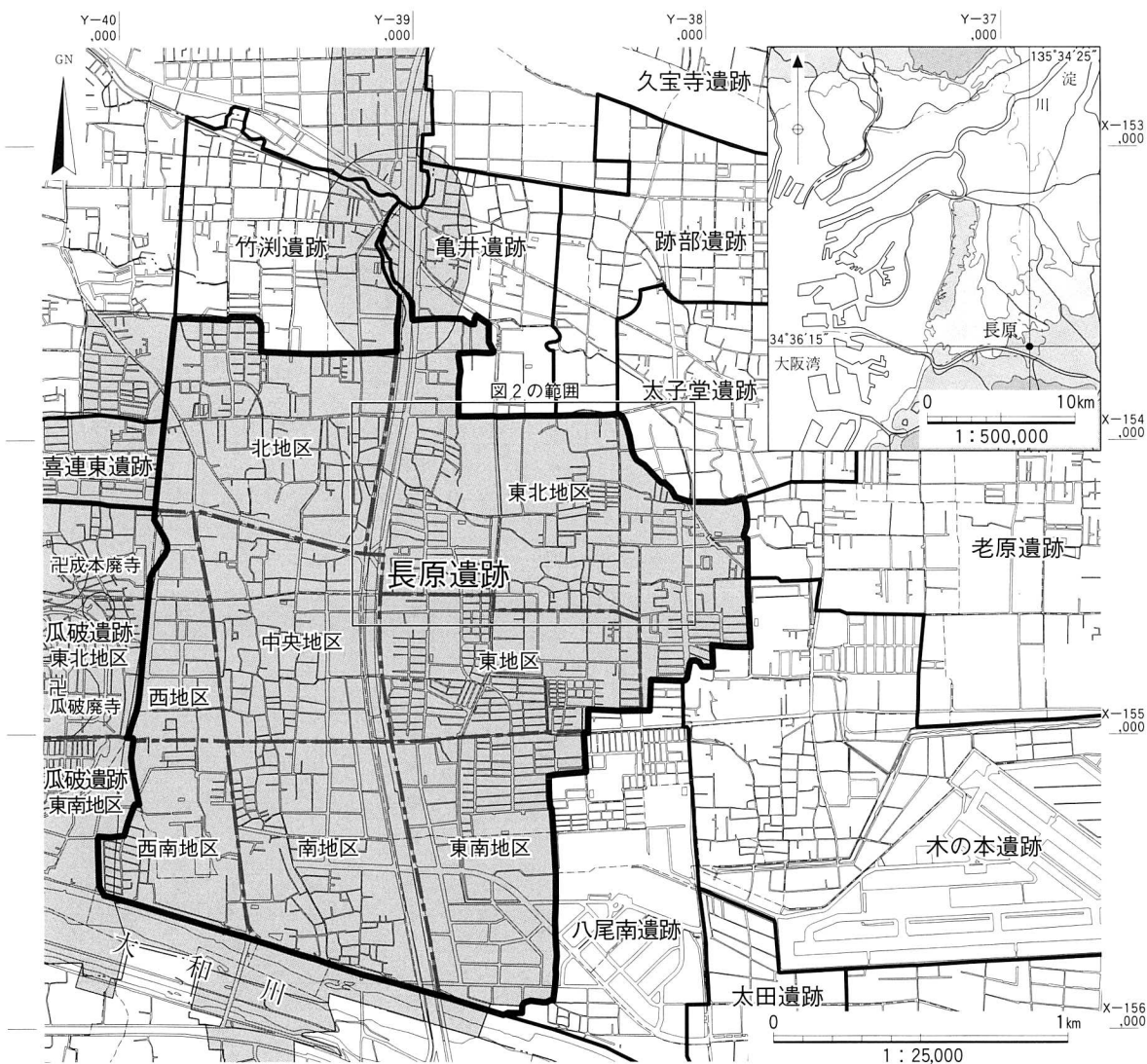


図1 長原遺跡の地区割と周辺の遺跡

表1 長原遺跡東北地区におけるおもな調査

調査	おもな内容	文献
城山mh2	弥生時代前期～中期周溝墓状遺構、古墳	[大阪文化財センター1980]
城山mh3	弥生時代中期遺物、古墳時代大溝、奈良時代遺物	[大阪文化財センター1980]
城山B・C区	弥生時代中期方形周溝墓、古墳、飛鳥時代自然流路	[大阪文化財センター1986a]
城山D・E・F区	弥生時代中・後期集落、古墳時代中期水田・土壇、飛鳥～平安時代溝、中世水田	[大阪文化財センター1986b]
城山G区	弥生時代土壇群、飛鳥時代～中世水田	[大阪文化財センター1986c]
NG1	弥生時代中期溝・土壇墓、古墳時代中期溝、飛鳥時代大溝	[大阪市文化財協会1978]
77年度試掘	奈良時代溝	[大阪市教育委員会・難波宮址顕彰会1978]
NG12	飛鳥時代杭列・流路・土器溜まり、平安時代土壇	[大阪市文化財協会1979a]
NG16	弥生～古墳時代中期遺物、弥生時代溝、古墳時代前・中期溝・井戸	[大阪市文化財協会1979b]
NG17	縄文時代晩期・弥生・古墳時代後期遺物	[大阪市文化財協会1979c]
NG80-1	TP+7.2mで奈良時代溝、TP+6.9mで砂層(NG8層)	[大阪市文化財協会1981a]
NG80-2	弥生・古墳時代遺物	[大阪市文化財協会1981b]
NG23	弥生時代中期遺物、古墳	[大阪市文化財協会1980]
NG25	縄文時代晩期・弥生時代中期遺物	[大阪市文化財協会1980]
NG83-1	弥生時代中期住居、古墳時代中期住居	[大阪市文化財協会1984a]
NG83-5	TP+8.0mで砂層	[大阪市文化財協会1984b]
NG83-22	TP+7.6mで奈良時代包含層	[大阪市文化財協会1984c]
NG83-43	TP+7.8mで砂層	[大阪市文化財協会1984d]
NG83-54	TP+8.1mで砂層(NG5層か)	[大阪市文化財協会1984e]
NG83-63	弥生時代中期集落、弥生時代後期土器棺墓	[大阪市文化財協会1984f]
NG83-65	弥生時代中期遺物、古墳時代中期土壇状遺構	[大阪市文化財協会1984g]
NG84-4	古墳時代中期溝・土壇、飛鳥時代水田、古墳時代砂層なし	[大阪市文化財協会1985a]
NG84-18	TP+8.2mで泥質土層	[大阪市文化財協会1985b]
NG84-49	TP+7.7mで砂層	[大阪市文化財協会1985c]
NG84-86	弥生時代後期～古墳時代中期遺物、庄内期井戸・建物、古墳時代中期土壇	[大阪市文化財協会1985d]
NG85-17	縄文時代晩期遺物	[大阪市文化財協会1986]
NG88-6	TP+7.8mで砂層(飛鳥時代初頭の須恵器が出土)、飛鳥時代包含層、奈良時代溝	[大阪市文化財協会1989]
NG95-57	TP+8.2mで砂層(古墳時代後期中葉の須恵器が出土)、古墳時代後期柵、平安時代集落	[大阪市文化財協会1998a]
NG95-77	TP+8.0mで砂層(古墳時代後期前葉の須恵器が出土)、古墳時代後期柵	[大阪市文化財協会1996]
NG96-9	弥生時代後期水田、TP+8.2mで砂層、飛鳥・平安時代集落	[大阪市文化財協会1999]
NG96-40	TP+7.5～8.2mで砂層、飛鳥～平安時代溝	[大阪市文化財協会1999]
NG96-66	弥生時代中期～庄内期遺物、TP+7.8mで砂層、古墳時代後期～奈良時代集落	[大阪市文化財協会1999]
NG96-79	旧石器時代遺物、TP+7.5mで砂層、飛鳥・平安時代井戸・溝	[大阪市文化財協会1997]
NG97-12	旧石器時代遺物集中部、縄文時代遺物、古墳中期時代木製品、飛鳥時代竈屋・掘立柱建物	[大阪市文化財協会2000]
NG97-13	古墳時代自然流路、平安時代溝	[大阪市文化財協会2000]
NG97-41	平安時代溝・自然流路、古墳時代水田、弥生時代中期溝、弥生時代前期自然流路	[大阪市文化財協会1998b]
NG97-43	弥生時代後期溝、古墳時代自然流路、飛鳥時代溝・土壇	[大阪市文化財協会2000]
NG97-52	旧石器時代遺物、縄文時代遺物、古墳時代中期木製品、古墳時代後期土手状遺構、飛鳥時代遺構	[大阪市文化財協会2000]
NG97-56	縄文時代後期踏込み跡、平安時代土手状遺構	[大阪市文化財協会2000]
NG98-19	古墳時代中期土壇状遺構・土師器・須恵器・玉類・製塩土器	[大阪市文化財協会2001]
NG98-20	古墳時代中～後期流路、古墳時代中期土壇状遺構・堅穴住居、古代～中世耕地	[大阪市文化財協会2001]
TS97-7	平安時代後期井戸・土壇	[八尾市文化財調査研究会2000a]
TS98-8	奈良～平安時代初期の小穴、中世井戸	[八尾市文化財調査研究会2000b]
NG99-15	縄文時代石器集中部、弥生中～後期・古墳中期集落、飛鳥時代耕地	[大阪市文化財協会2002c]
NG99-19	縄文時代後期土壇、弥生～古墳時代前期水田、平安時代～近世耕地	[大阪市文化財協会2002b]
NG99-41	後期旧石器時代遺物、縄文時代早期～前期住居址、古墳時代前期水田、平安時代流路・土手	[大阪市文化財協会2002b]
NG00-6	古墳時代中期盛土遺構、古代溝、平安時代流路	[大阪市文化財協会2003a]
NG00-30	奈良時代ビット、平安時代土壇・流路	本書収録
NG01-14	奈良時代流路	[大阪市文化財協会2002a]
NG01-25	中世水田	本書収録
NG02-1	弥生時代中期集落、古墳時代畠、奈良時代流路	[大阪市文化財協会2003b]
NG02-4	古墳時代盛土、中世水田	本書収録
NG02-5	弥生時代前期流路・水田、古墳時代前期水田	[大阪市文化財協会2003c]
NG02-9	旧石器、平安時代集落	[大阪市文化財協会2003d]

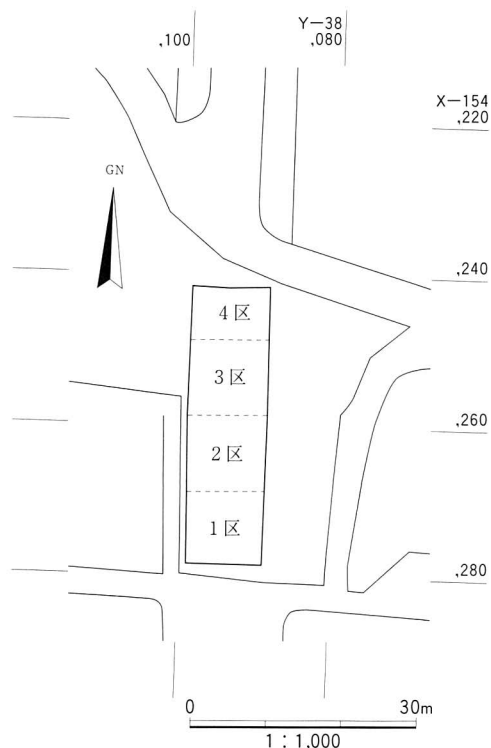


図3 北調査地の地区割

八尾市久宝寺太田線の建設にあたり、埋蔵文化財の取り扱いについて八尾市都市整備部と大阪市教育委員会文化財保護課および財団法人大阪市文化財協会の3者が事前に協議を行い、2000年度より数個年にわたり発掘調査を実施することになった。

初年度である2000年度は、計画地の大阪市域の最北端にあたる場所で調査が行われた(NG00-30・図3)。土留め工事

の後、現地表下4mまでの調査を行ない、飛鳥時代から平安時代にかけての遺構や流路を検出するなどの成果を挙げた。遺物の整理は当年度内に基礎的な作業を終えている。

2001年度調査地は住宅密集地にあたるため、生活道路の確保など様々な制約が生じ、三つの区画に分けて行なうことになった(NG01-25・図4)。調査面積が狭小な2個所のトレンチについては地表下2mまでの調査とし、面積を確保できたトレンチは4mまで掘削を行い、中世の大畦畔を検出している。2001年度も年度内に遺物整理などの基礎的な作業を終えている。

2002年度は2001年度の北側に接して調査区を設定した。同様の理由で2個所にわけて調査を行なった(NG02-4・図4)。地表下6mまで調査を行い、古墳時代の盛土遺構を検出するなど大きな成果を収めることができた。当年度の遺物整理も基礎的な作業は年度内に行なっている。

以上の3年にわたる調査の成果をうけ、2003年度に本報告書の作成作業を行うことになった。

なお、本報告では以上の3個所の調査地を図3・4のように地区割し、00-30次調査地を北調査地、01-25および02-4次調査地を南調査地とした。また、南調査地は狭小な調査区が南北に並ぶ

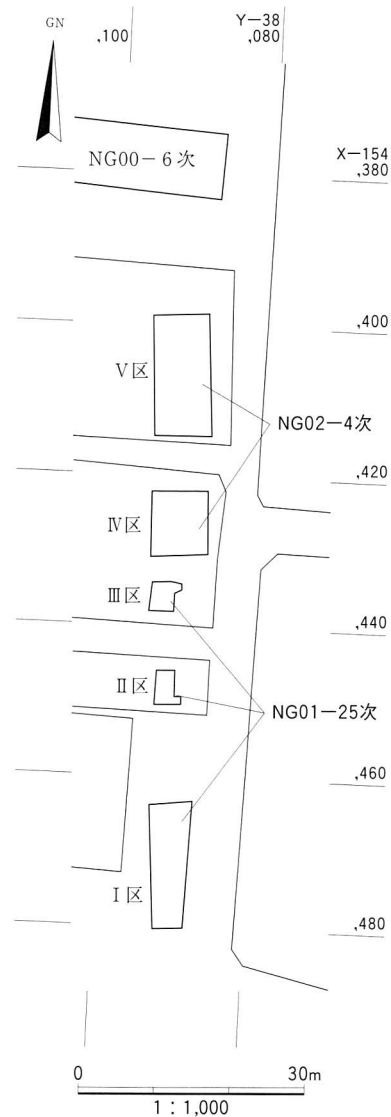


図4 南調査地の地区割

ため、南から順にⅠ～Ⅴ区とした。

2) 遺跡の立地と調査地の位置

長原遺跡は南北にのびる瓜破台地から東に広がる沖積平野にまたがる、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である。遺跡の東側には八尾南・木の本・老原・太子堂の各遺跡が分布している(図1)。今回報告対象となる長原遺跡東北地区は、遺跡内で最も沖積作用が発達した地域であり(図5)、段丘構成層の埋没深度が深く、資料の少ない地域であった。1995年度より開始された大阪市長吉東地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査により継続的な調査が行われた結果、旧石器時代から現代にいたるまでの地層の堆積状況が明らかとなり、1999年には「長原遺跡東北地区の基本層序」が提示され[高橋工1999]、以後も着実に新たな資料を加え続けている(別表)。また、調査件数の増加により、当地の地形の変遷や遺跡の消長が明らかにされつつある。

今回、報告の対象となる調査地に近接する調査としては、NG84-4次とNG00-6次調査が挙げ

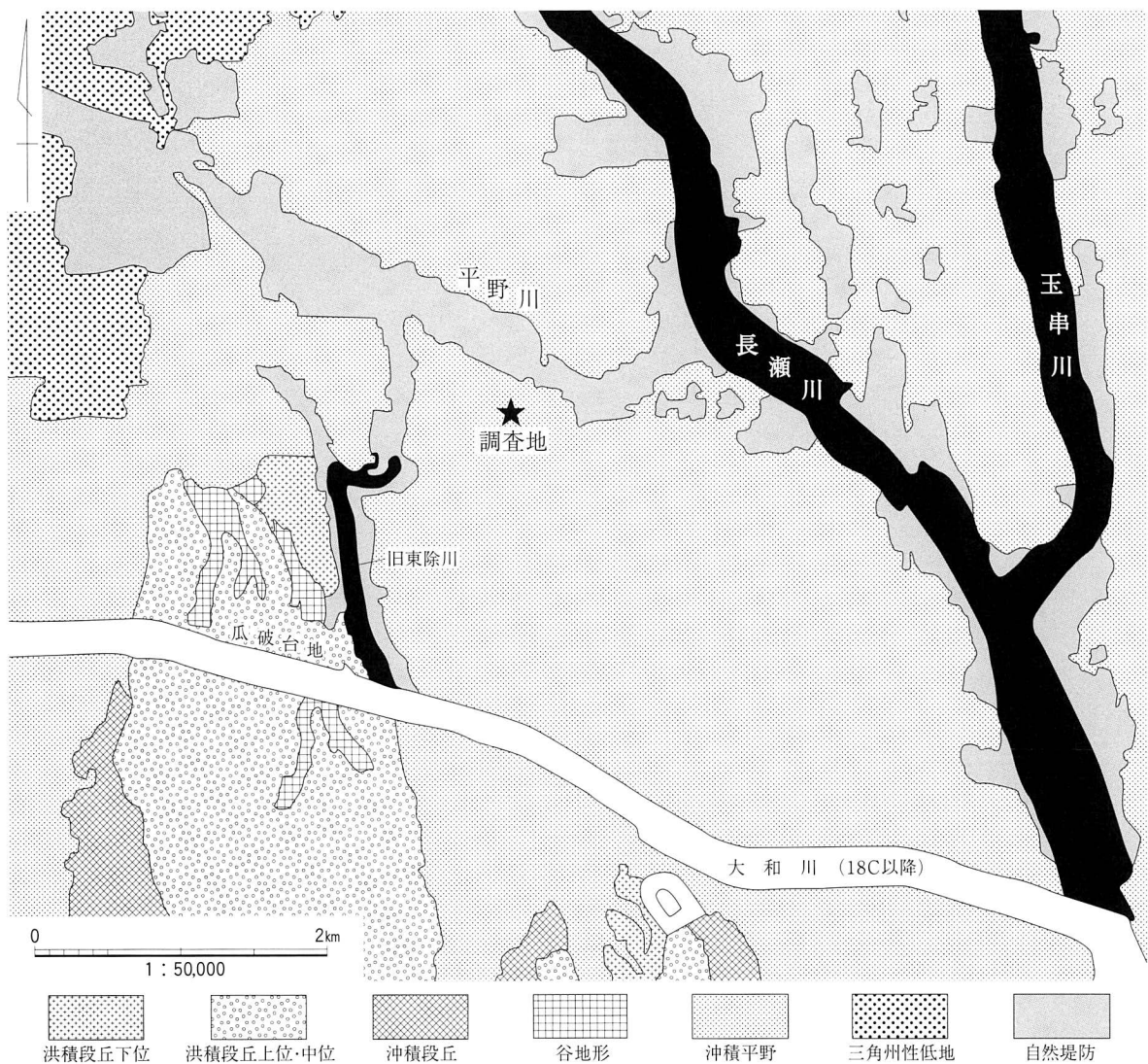


図5 長原遺跡周辺の地形分類(土地条件図[建設省国土地理院1983]に一部加筆)

られる(表1)。NG84-4次調査地は、今回報告対象となる三つの調査地の南延長上に位置するもので、NG01-25次調査地に隣接する。3～6m四方の調査区を5箇所設定したが、古墳時代中期の土壙や溝を検出するとともに、滑石製の勾玉・臼玉、初期須恵器や韓式系土器が多量に出土するなど、長原遺跡の古墳時代の集落を考えるうえで極めて貴重な資料を得ることができた。一方、NG00-6次調査では、古墳時代中期の盛土遺構と水田が検出されており、盛土内からは滑石製の勾玉・臼玉、土師器高杯や小型丸底壺がまとまって出土した。この盛土遺構はNG98-19・20次調査でも確認されており、機能としては耕作時の休憩場所や堤防などが考えられているが、不明な点が多いものである。今回、調査を行なった地点は、この盛土遺構の延長に相当するため、その続きの検出が期待された。また、飛鳥時代から平安時代前期にかけて、自然堤防上に暗色帯の発達が認められ、古代集落の縁辺にあたるものと考えられた。今回の一連の調査は、この自然堤防の南斜面にトレンチを設定した形となる。これらの成果を踏まえ、今回も古墳時代から平安時代にかけての遺構の検出が予想されたのである。

第2節 発掘調査の経過と概要

1) 北調査地(NG00-30)

八尾市の都市計画道路久宝寺太田線の大阪市内最北端に位置する。周辺地域では低位～中位段丘構成層までの調査を行っているが、現场上空を高圧送電線が通過しているために長尺の鋼矢板を打設することができず、調査は地表面から4 mまでを対象として行うことになった。

調査に先立ち、平成12年9月25日より調査地周辺の整備を行い、続いて10月10日より鋼矢板による土留め作業を開始した。10月26日からは重機を用いて現代作土まで除去し、近世の地層以下を人力で掘削した。途中、1段の切梁架設工事を行い、平面的な調査は現地表下4 mまで行った(写真1)。その後、施工業者と協議を行い、安全を確保しながら、調査区の中央に幅1 mの地層観察用のサブトレンチを設け、地表下5 mまでの堆積状況の断面観察を行なっている(写真2)。発掘調査は翌2月2日に終了し、5日より埋戻しを開始し、28日には整地を含むすべての作業を終了した。



写真1 北調査地調査風景



写真2 北調査地深掘りトレンチ

2) 南調査地(NG01-25・02-4)

南調査区は平成13年度と14年度に行われた。住宅密集地の中での調査であるため、生活道路および残土の搬出を考慮した結果、小規模な調査区を数箇所設定することになった。

NG01-25次調査地はⅠ～Ⅲ区に分かれる(図4)。Ⅱ・Ⅲ区は面積が狭く安全を確保するために、現地表下2 mまでの調査となった。また、Ⅰ区は84㎡あったため、土留めを行って現地表下4 mまで調査した。平成14年1月23日から準備工に入り、2月12日から重機を用い、現地表下およそ1 mま

表2 発掘調査の期間など

調査地区	調査回数	調査地番	東西×南北	面積	調査期間	担当者
北調査地	NG00-30	平野区長吉六反4丁目	11.1m×36m	400㎡	2000年9月25日～2001年2月28日	村元健一
南調査地	NG01-25	平野区長吉六反4丁目	4.6m×24m	110㎡	2002年1月23日～2002年3月25日	杉本厚典
南調査地	NG02-4	平野区長吉六反4丁目	6.8m×25m	170㎡	2002年12月24日～2003年3月20日	辻 美紀
合計調査面積				680㎡		

での現代盛土・現代耕作土を除去した後、人力による掘削を開始した。中世・古代の各遺構面を調査し、2月27日に切梁を設置後、さらに現地表下4.0mまで掘下げながら遺構検出を行った。3月11・12日にⅡ・Ⅲ区を調査し、3月25日に復旧作業を含む全調査を完了した。

NG02-4次調査地は通路を確保するため、南北にⅣ・Ⅴ区の2個所の調査区を設定した(図4)。調査に先立ち、平成14年12月24日より調査地周辺の整備に取りかかった。翌平成15年1月20日から土留め作業としてシートパイルの打設を開始し、同28日からは重機を用いて中世の作土まで掘削した。それ以下の地層については、人力による掘下げと遺構・遺物の検出に努め、途中、2段の切梁の架設作業を経て、地表下6mまでの平面調査と地表下7mまでの地層の観察を行った。発掘作業は3月12日に終了し、同20日に埋戻し・器材類の撤収を含めた現地におけるすべての作業を完了した。

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 北調査地(NG00-30次調査)の成果

1)層序と各層出土の遺物(表3、図6、図版1)

i)地層

調査地の地層断面を図示した(図6)。各層準の岩相などの詳細と長原遺跡標準層序および長原遺跡東北地区基本層序との対応は、表3のとおりである。

第0層：現代盛土層である。

第1層：現代作土層である。

第2層：作土層で、調査地の北で層厚を増す。上下2層に大別でき、下層は淘汰がよくない。下面で東西方向の耕作溝を検出した。

第3a層：粗粒砂からなる河成層であり、調査区の南端を除いてほぼ全面に分布する。東から西への古流向が確認でき、下位の第3b層を削込みながら流れている。

第3b層：作土層である。上面は調査区の南から北にかけて次第に低くなっており、東西方向の畦畔SR301と、畦畔の痕跡と思われる南から北に落ちる段を検出した。なお、畦畔の方向はほぼ正東西で

表3 NG00-30次層序表

層序	長原層序	六反層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	遺物	時代
0	0	0		120					近・現代
1	1	1	オリーブ黒色シルト質極細粒砂	5≦	作土				
2	2	2	にぶい黄褐色シルト質細粒砂～中粒砂	30	作土	地震による変形	▼耕作溝		江戸時代
3a	3	3	灰色粗粒砂	15	水成		←SR301		
3b	3	3	暗灰黄色シルト質極細粒砂	15	作土				
4bi	4B	4B	オリーブ褐色シルト混り細粒砂	15	作土				鎌倉時代
4bii	4B	4B	暗灰黄色細粒砂質シルト	15	作土				
4ci	4C	4C	灰黄色粗粒砂	20	水成	地震による変形			
4cii	4C	4C	灰色シルト～極細粒砂	20		地割れ	SX4c01 ←NR4c01・4c02 ▽SD501・502・503, SP501・502,SK501		平安時代
5a	6	5-6	暗灰黄色シルト	≦10	古土壌				
5b	6	5-6	灰オリーブ色シルト質極細粒砂	≦20	水成		←SD601・602		奈良時代
7ai	7Bi	7Aiv	黄褐色細粒砂	30	水成				古墳～
7aii	7Bi	7Aiv	灰色シルト	10	水成				飛鳥時代
7aiii	7Bi	7Av	黒色シルト	15	古土壌				
7bi	7B	7Bi	褐色細粒砂～粗粒砂	80	水成				
7bii	7Bii	7Bi	オリーブ黒色シルトと極細粒砂の互層	60	水成	地震による変形・植物遺体			古墳時代
7biii	7Bii	7Bi	オリーブ黒色シルト	20	水成				
7biv	7Bii	7Bi	オリーブ黒色シルト質細粒砂	20	水成				
7bv	7Bii	7Bi	オリーブ黒色シルト	≦5	水成				
10a	9A	10A	黒色シルト質中粒砂	15	古土壌				弥生時代
10bi	9B	10B	暗緑灰色粗粒砂	30	水成				
10bii	9B	10B	暗緑灰色シルト	25	水成	植物遺体			
10ci	9Bor9C	10Bor10C	オリーブ黒色粘土	20	古土壌				縄文時代
10cii	9Bor9C	10Bor10C	暗オリーブ黒色粘土	30<	古土壌				

↓基底面検出遺構
▽地層内検出遺構
←上面検出遺構
▼下面検出遺構



图6 北調査地地層断面図

ある。瓦質土器や備前焼播鉢が含まれることからRK3層に相当すると判断した。

第4bi層：調査区の全面で確認された作土層である。調査区の北側では直接第4ci層の粗粒砂を耕起しており、層中に多量の粗粒砂を含んでいる。

第4bii層：調査区南半に部分的に遺存する作土層である。調査区北部では大部分は第4bi層により耕起されていた。

第4ci層：河成層で、調査区中央を東から西へ流れる自然流路NR4c01を埋積していた。

第4cii層：調査区の北半に分布する。シルトが主体であり、粗粒砂がブロック状に不規則に入る。人為的に形成された地層ではなく、地震による地割れによるものと判断した。

第5a層：ほとんど削平されているが、部分的に残ったシルト層である。暗色化しており、遺物を多量に包含する。層内でピットや溝・土壙を検出した。

第5b層：後背湿地性の粘土層である。

第7ai層：後背湿地性の粘土～細粒砂である。上面で東西方向の2条の溝SD601・602を検出した。

第7aii層：後背湿地性のシルトである。

第7aiii層：粗粒砂混りのシルトからなり暗色帯を形成する。本層下面は植物擾乱をうけている。

第7bi層：細粒砂からなる水成層で、調査区の北側にいくにつれ次第に粗粒化していた。本調査地周辺では第4cii層の段階で地震が起こり、噴砂が確認されているが、その際、液状化を起こしたのが本層である。また、北壁では本層内に相当するTP+7.6mの水準で、横滑りによる断層が確認できた。噴砂が生じた際の揺れによるものと思われる。

以下の地層は調査地の掘削限界深度を超えるため、調査区の中央に南北方向のトレンチを入れ、さらに部分的に坪掘りして確認したものである。したがって、以下は断面観察のみの記録である。六反層序との対比は、各地層から遺物がほとんど出土しなかったため、すでに層位が明らかとなっている周辺調査の層相と比較しながら行うことにした。

第7bii層：ほぼ水平に堆積する、シルトと極細粒砂の互層からなり、後背湿地性の堆積状況を示す。一部ラミナの規則的な変形が観察でき、堆積後に地震で揺られたものと思われる。本層は北側で粒径が粗くなり、調査区の北端で流路と思われる斜向ラミナの発達した粗粒砂の堆積が確認できた。

第7biii層：やや暗色化したシルト層で、調査区の北側で地震によるラミナの変形が認められる。

第7biv層：沼沢湿地性のシルト質細粒砂層である。

第7bv層：シルト層であり、ラミナが認められることから水成層と判断される。調査区では部分的にしか確認できていない。

第10a層：暗色化したシルト質中粒砂からなる。淘汰はあまりよくなく、下面は植物擾乱により乱れている。乾痕が認められ、古土壌であると思われる。RK10A層に相当する。

第10bi層：シルト層で、水平のラミナが観察された。

第10bii層：やや暗色化した沼沢湿地成のシルト層である。植物ラミナが認められる。

第10ci層：暗色帯を形成する粘土層である。RK10B層あるいは10C層に相当すると思われる。

第10cii層：やや暗色化した粘土層であり、上位の第10ci層とは漸移的である。本層の下面を確認

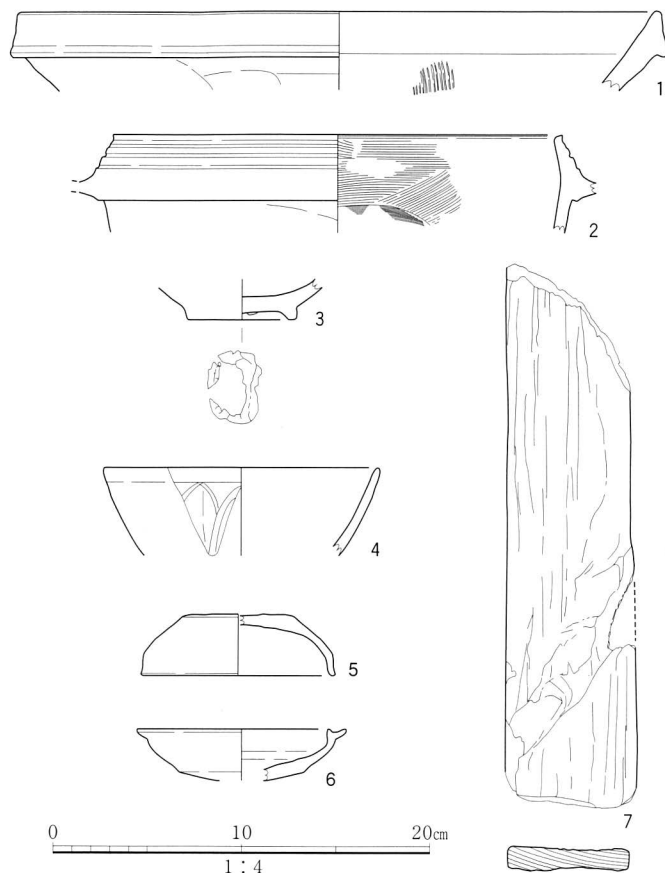


図7 各層出土遺物

第2層(3)、第3a層(1・2・4)、第7ai層(6)、
第7aii層(5)、第7bii層(7)

することはできなかった。

ii)各層出土遺物(図7、図版8)

第2層からは瀬戸美濃焼丸碗の底部3が出土した。

第3a層からは青磁碗4、瓦質土器播鉢1、同羽釜2が出土した。4は外面に鎬蓮弁が施されており、龍泉窯のものと思われる。1は口縁端部が下にやや広がる。2は内面にヨコハケが施される。1・2は15世紀後半に位置づけられる

第7ai層からは須恵器杯H6が出土した。口径が10cm前後で、立上がりが短い。飛鳥Ⅱに相当する。

第7aii層からは須恵器杯H蓋5が出土した。口径が10.2cmと小振りであることから、飛鳥Ⅱに相当すると思われる。

第7bii層からは板状の木製品7が出土した。長さ29cm以上、幅6.5cm、厚さは1.3cmある。

2)奈良時代の遺構と遺物

i)溝(図8、図版2)

東西方向の2条の溝を検出した。SD601は幅1.3m、深さ0.4mである。第5b層によって埋没している。水流の痕は確認できず、ほぼ滞水状態にあり、周囲の土砂が徐々に流れ込み、埋没したものと思われる。この溝からは遺物が多量に出土しており、付近に居住域のあったことが推測できる。遺物の年代は平城宮土器Ⅵを下限とする。

SD602も東西方向の溝で、南肩は平安時代の自然流路NR4c01に切られている。残存幅2mで、検出面からの深さは0.3mである。遺物の出土量はSD601に比べはるかに少量である。この溝もSD601と同様に第5b層によって埋没していることから、2条の溝は併存していたものと考えられる。

これらの2条の溝は遺物の包含量が大きく異なり、SD602に比べてSD601からの土器の出土量が多い。両遺構の遺物の出土状況から考えるならば、北側のSD601がより居住域に近いものと思われる。水流の形跡が認められず、ほぼ滞水状態にあったと思われることから、土地を区画する目的で掘削された溝と考えられる。

ii)溝出土の遺物(図9・10、図版8～10・12)

SD601からは土師器8～35、須恵器36～66、土製品67・68が出土した。

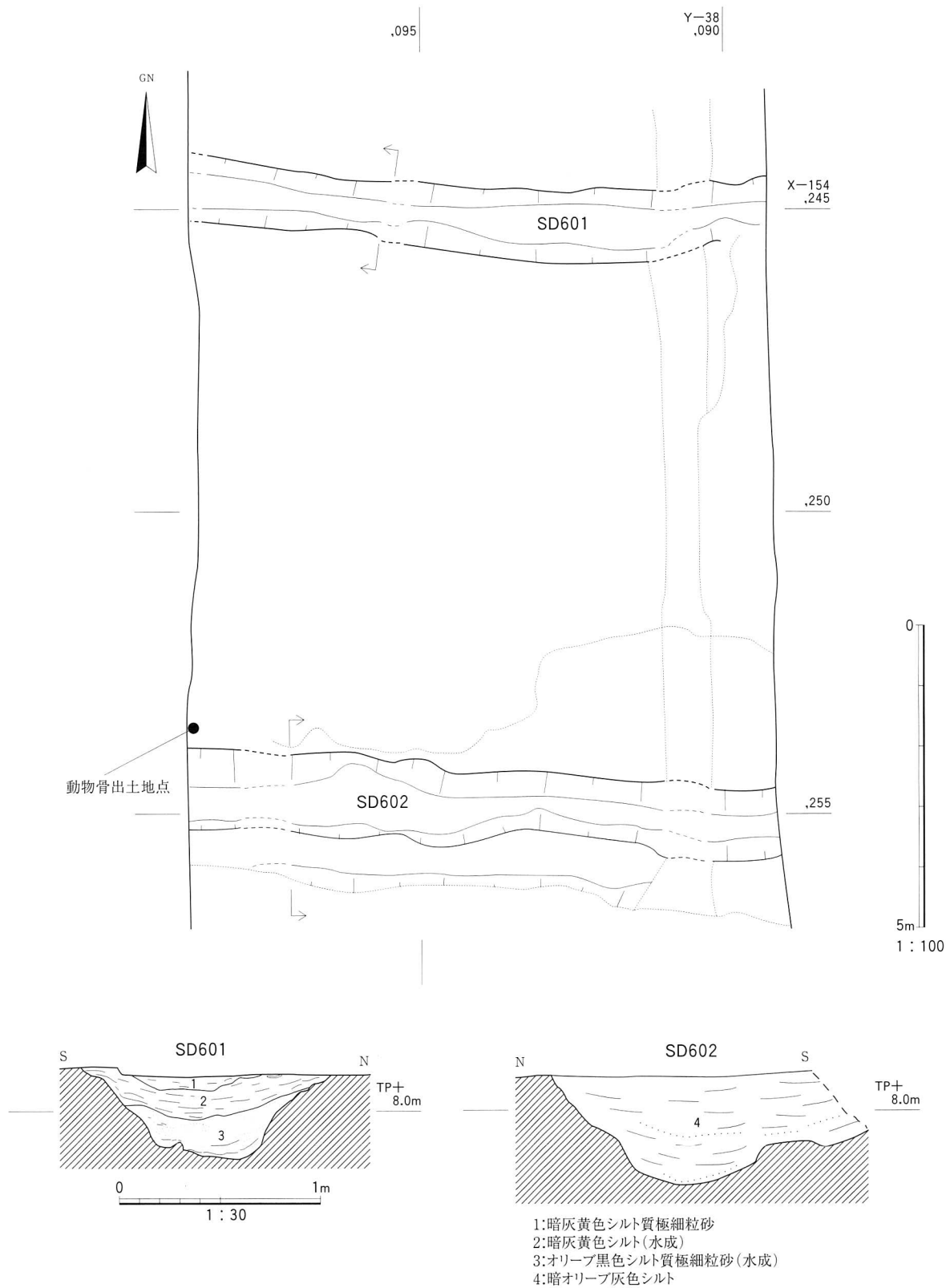


図8 第7ai層上面検出遺構平・断面図

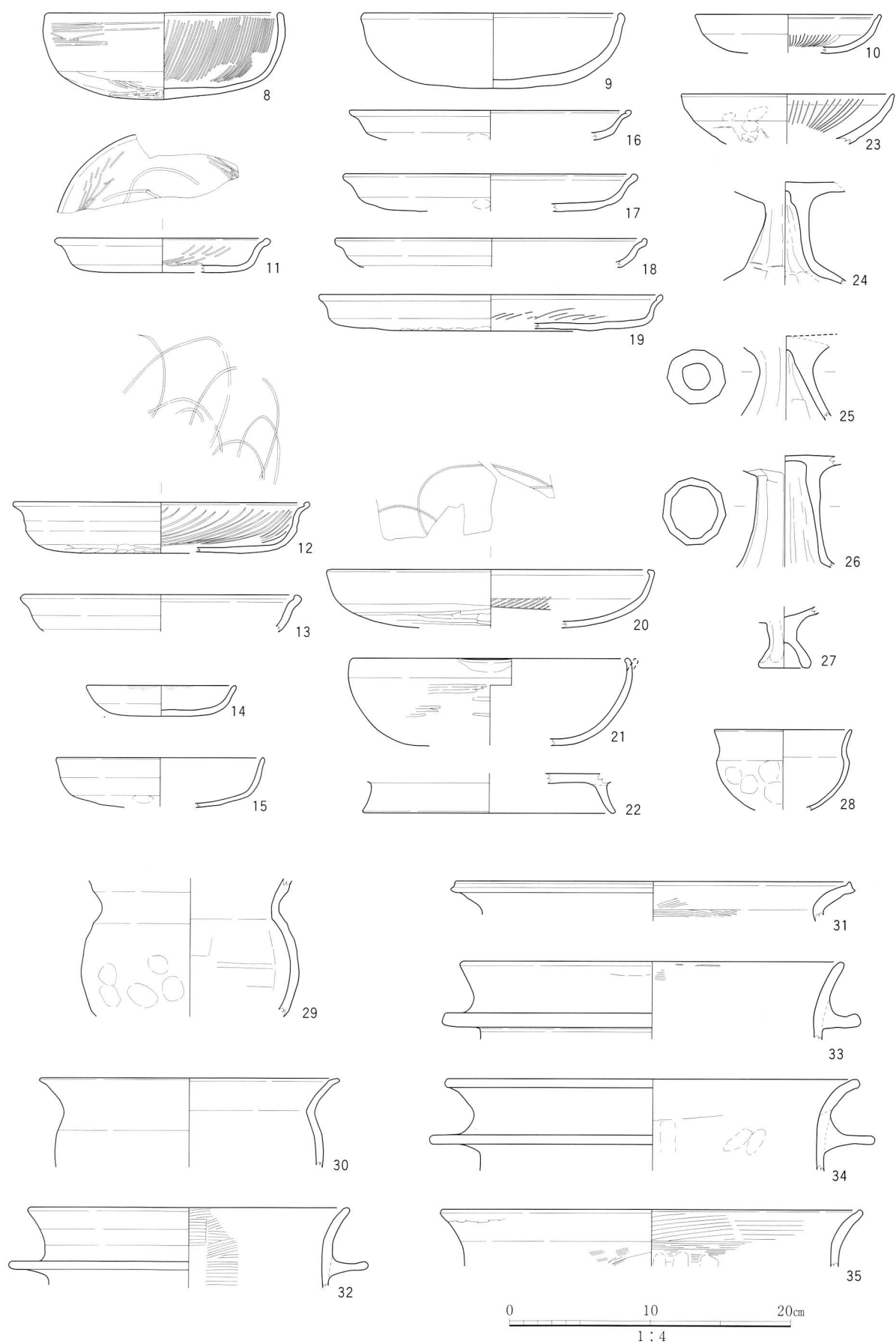


図9 SD601出土土師器

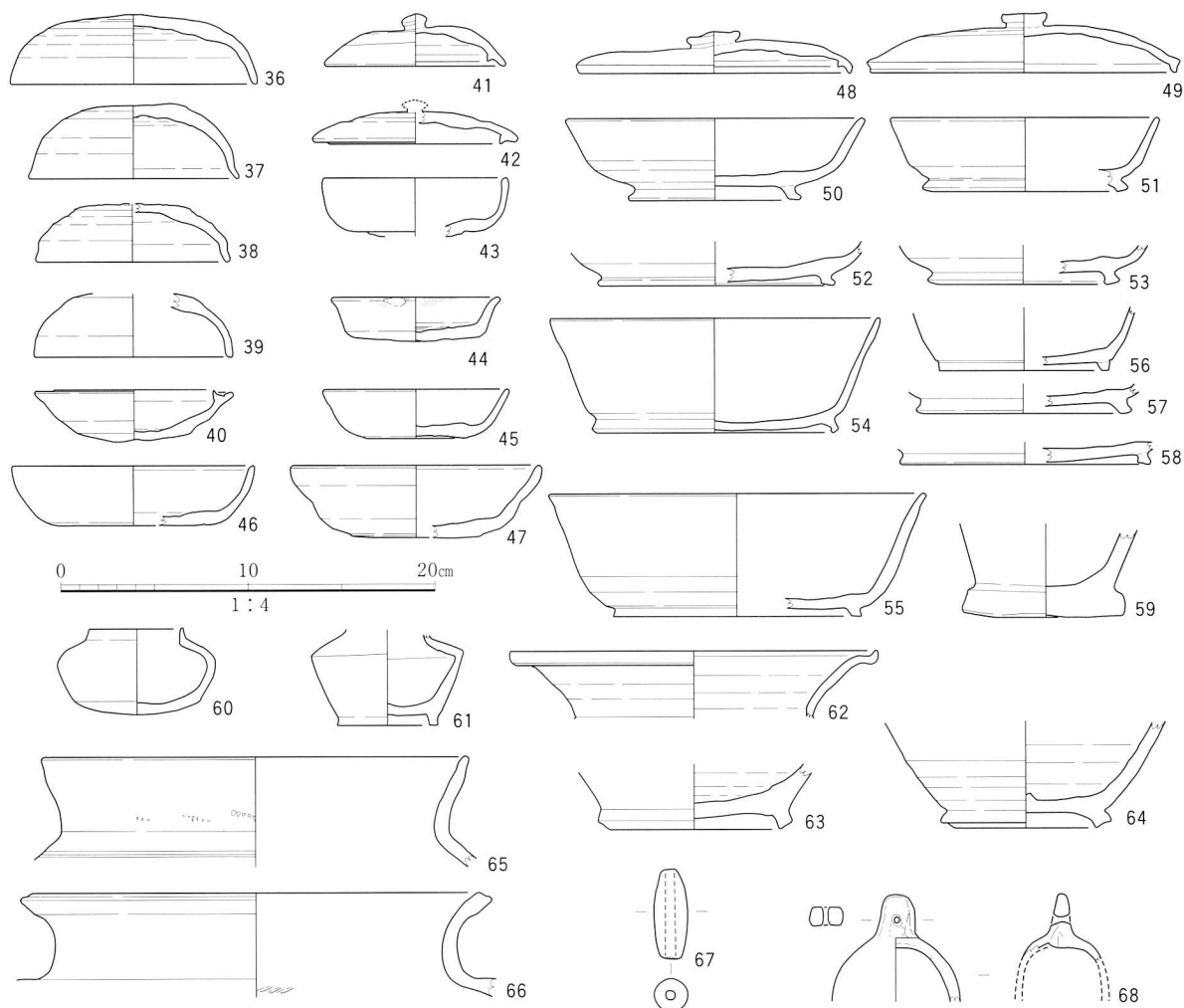


図10 SD601出土須恵器・土製品

8～10は杯Cである。8・9の径高指数はそれぞれ38・29で、前者には放射状暗文が施されるが、後者はナデで仕上げられる。10は底部が欠損しているが、径高指数が小さく、器高が低い形態になるものである。8は飛鳥Ⅱ、9は飛鳥Ⅲ、10は飛鳥Ⅳに位置づけられる。11～15は杯A、16～19は皿Aであり、14・15以外は口縁端部を内側に肥厚させる。11・12・19には放射状の暗文が1段施され、さらに11・12は内底面に連弧状の暗文が施される。14の口縁部には煤が付着しており、灯明皿に用いられたのであろう。11・12・19は平城宮土器Ⅲ、13・16～18は平城宮土器ⅣもしくはⅤ、14・15は平城宮土器Ⅵである。20は皿C、21は片口の鉢で、22は台付の杯もしくは鉢と思われる。23～27は高杯で、23・24が飛鳥ⅠもしくはⅡ、25・26が平城宮土器ⅣもしくはⅤに属すると思われる。27はミニチュア土器である。28は壺、29～31は甕である。28・29は外面にユビオサエ、30はナデが施される。32～35は羽釜で、いずれも胎土に角閃石を含む。

36～39は杯H蓋、40は同身である。36は口径13.0cmあり、天井部にはヘラケズリが施される。37～39は口径が10～11cmで、38は天井部にヘラケズリ、37・39はヘラ切り後に調整が施されていない。40は口縁部の立上がりが高く、底部はヘラ切り後に調整が施されていない。41・42は杯G蓋、43は同身で、口径はそれぞれ9.4cm、10.7cm、9.6cmである。43の底部にはヘラケズリが施される。44は灯明皿と思われ、口縁部内面に煤が付着し、外面は欠けている。45～47は杯Aである。48・49は杯B

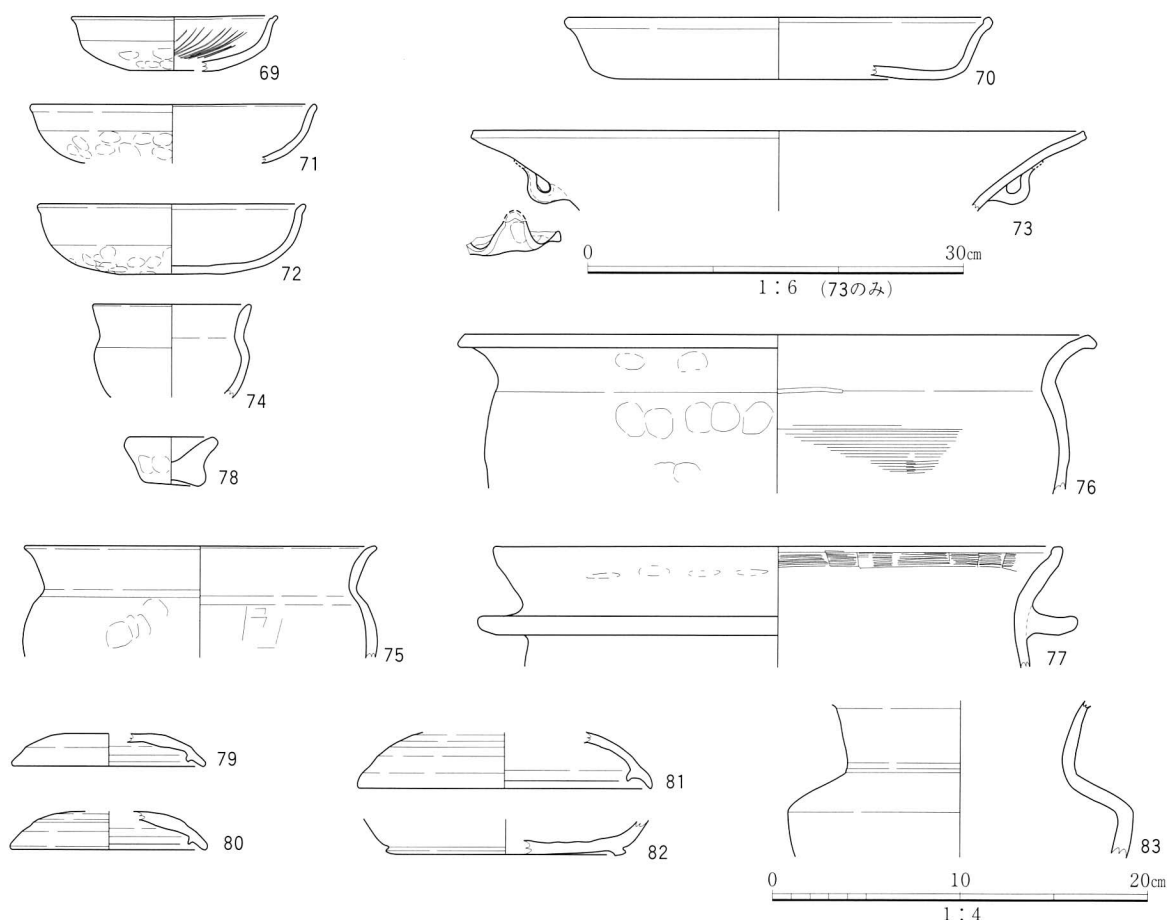


図11 SD602出土遺物

蓋、50～58は同身である。48にはかえりが付く。50は高台が底部の内寄りに付き、底部と胴部の境界が丸い。一方、54は底部の縁に高台が付く。以上の杯について、36がTK43型式、37～41・43が飛鳥Ⅱ、42が飛鳥Ⅲ、45～48・50～53は飛鳥Ⅳ～Ⅴ、54・55が平城宮土器Ⅱ～Ⅲ、44・56が平城宮土器Ⅴ～Ⅵに比定される。

59は捏ね鉢、60～64は壺、65・66は甕である。62はわずかに頸部が残存し、口縁端部は内側に折れる。65はまっすぐ外傾して伸びる口頸部にタタキ原体の縁が当たった痕がある。

67は管状土錘で、長さ4.9cm、孔径0.5cm、重量15.0gある。68は土鈴と思われる土製品である。孔径は0.3cmあり、器壁は0.5cm程度である。

以上の遺物からSD601の年代の下限は8世紀末に位置づけられる。

SD602の出土遺物は69～83である(図11)。土師器には杯C69、杯A70～72、盤73、壺74、甕75・76、羽釜77、ミニチュア土器78がある。69は口縁端部内側に弱い沈線が巡り、内面には放射状の暗文が施される。飛鳥Ⅲに位置づけられる。70は口縁端部が内側に肥厚し、内外面ともナデで仕上げられる。平城宮土器Ⅳ～Ⅴに位置づけられる。71・72は口縁端部がわずかに外傾するが、内側には肥厚しない。底部にユビオサエが残る。平城宮土器Ⅴに該当する。73は口径は48.6cmあり、まっすぐ伸びる体部に形骸的な把手が付く。77は胎土に角閃石が含まれる。

須恵器には杯G蓋79・80、杯B蓋81、同身82、壺83がある。79・80は飛鳥Ⅱ～Ⅲ、81・82は飛鳥

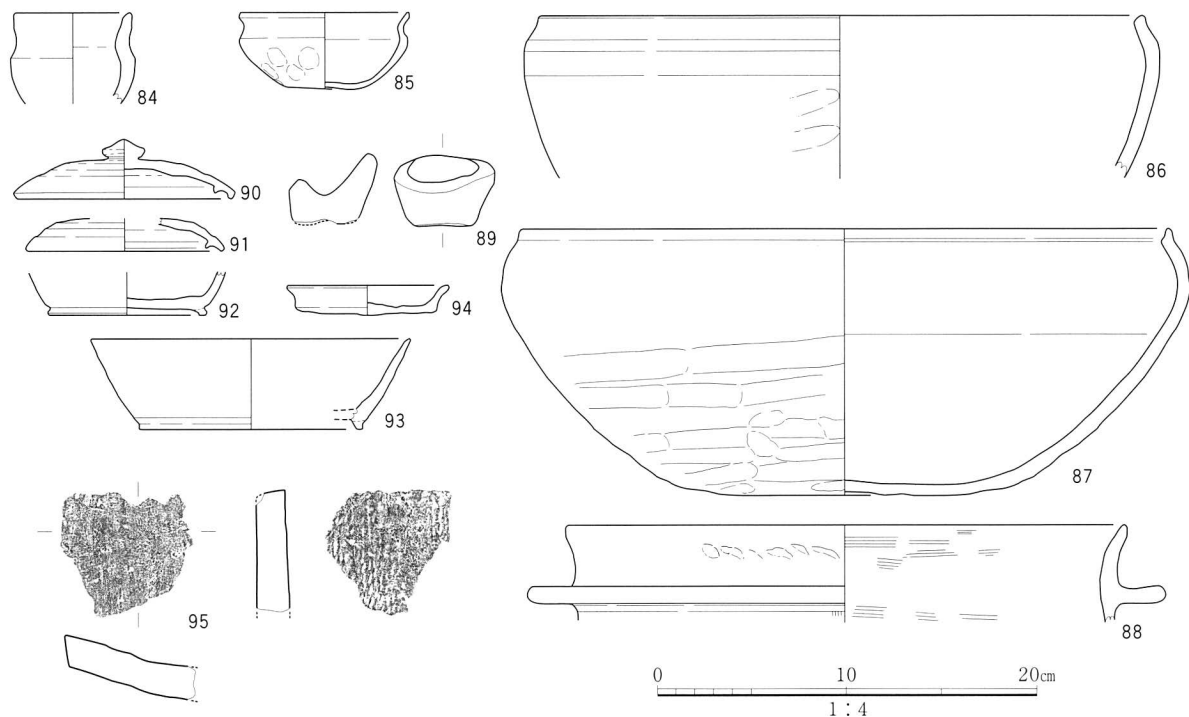


図12 第5b層出土遺物

Ⅳに比定される。

以上よりSD602の年代の下限は8世紀後葉である。

また、これらの遺構面を覆う第5b層からは土師器壺84・85、鉢86・87、羽釜88、ミニチュア土器89、須恵器杯G蓋90・91、杯B92・93、皿A94、瓦95が出土した(図12)。87は口縁部が内湾気味に伸び、体部外面は横方向の強いヨコナデで仕上げられる。86も同様の形態であると思われる。88は生駒西麓産の胎土を用いて作られている。89は口縁部が斜めにカットされたような形で仕上がり、体部は上げ底である。90・91は口径がそれぞれ11.4cm・10.2cmで、いずれもかえりが短い。これらは飛鳥皿に属するものであろう。92・93は高台が底部の縁に付いており、体部は直線的に外傾して伸びる。94は小型の皿Aで、口径8.5cm、器高1.6cmある。92～94は平城宮土器VもしくはVIに属し、この2点が第5b層出土遺物の中でもっとも新しい。95は凸面に縄タタキが施される。

なお、SD601や第5b層からは製塩土器の破片が多量に出土した。第5b層よりも新しい地層・遺構のものについてもここから遊離したものと考えられるため、合計31点を一括して記述する(図13、図版12)。なお、製塩土器の分類は[積山洋1993]の成果を用いる。

96～99は鉢形で、体部外面に接合痕を残し、100・101は口縁端部が平坦である。これらは1b類に属し、播磨や淡路に生産地が求められる。102～105は粗い布目が、106は細かい布目が内面に残り、6類に位置づけられる。102・103は口縁部が直立気味に伸び、口縁端部は外側に面をもつ。口縁端部が短く外傾する107～109は2a類に属するものである。107・108の内面にはハケが施されている。110～114は器壁が薄手で、8世紀以前と推定される5a類に属するものである。115は口縁端部が尖り気味で、内面にハケが施されることから、4c類であろう。結晶片岩は見られないが、製作技法から生産地は紀伊と想定される。116～124は器壁が厚手で、口縁部内外面にナデが施される。5c類に属し、

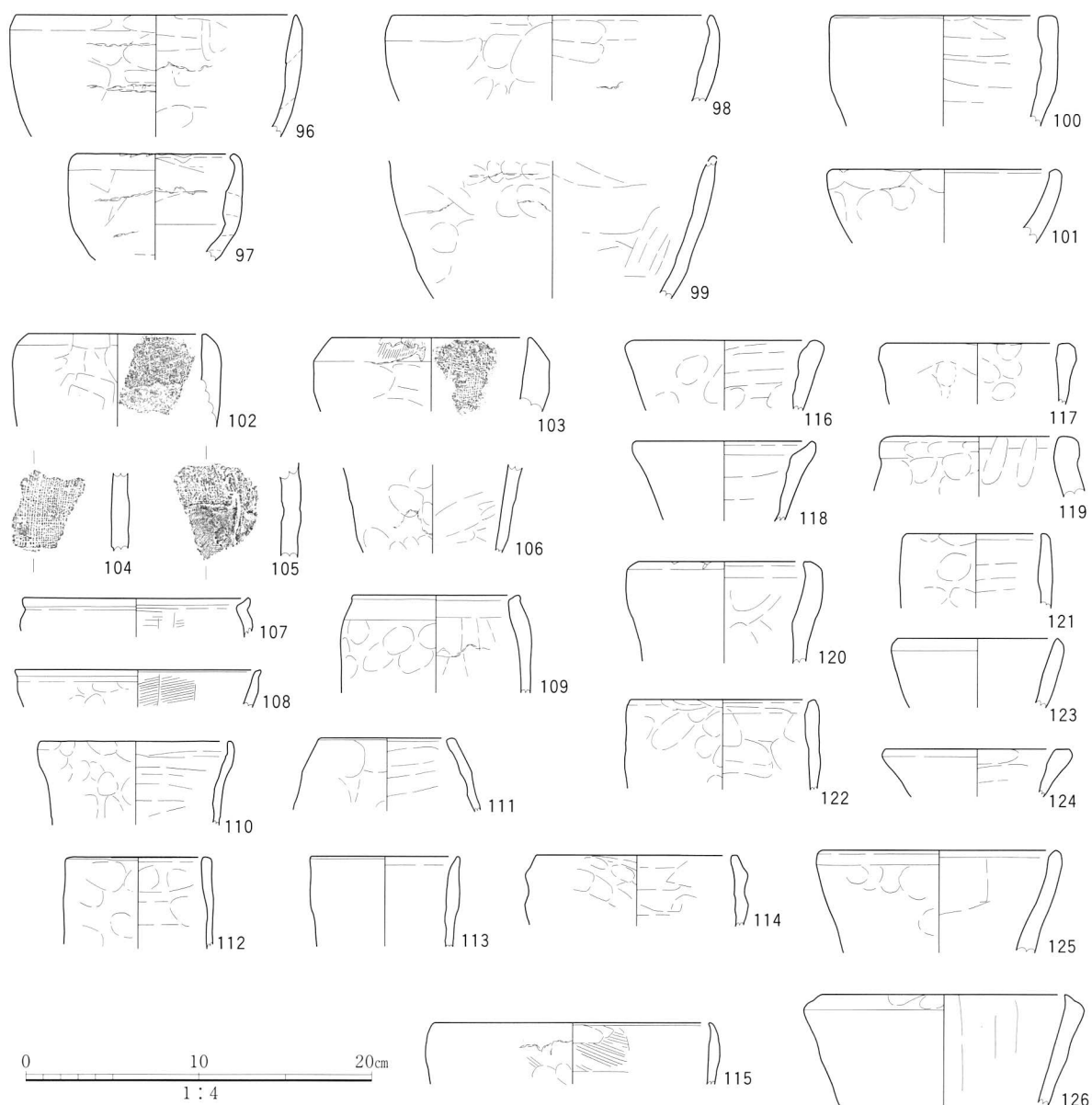


図13 製塩土器

第5b層(106・107・123)、第4ci層～5b層(109)、第4cii層(98・101・104・108・113・114・116～119・122・124)、第4ci層(105・111・115)、SD601(96・97・100・103・112・120・121・125・126)、NR4c01(99・102・110)



写真3 ウマ骨出土状況

紀伊に生産地が求められる。125・126は二次焼成が著しく、器面観察が不可能である。

iii) 動物骨(写真3、表4・5、図版13)

第5b層からは動物骨R551・552が出土した(図8)。出土位置はSD602の北肩付近である。出土したのはウマの上顎と下顎で、前端部は土留めのシートパイルにより切断されていた。R551は左上顎臼歯列が釘植した状態で出土した。R552は左上顎と左右下顎の大臼歯列が咬合した状態で臼歯のみが出土している。R551・552は別個

表4 出土ウマ骨観察表

番号	種名	出土部位		詳細	計測値
		左右	部位名		
R551	ウマ	左	上P3～M3	歯のみ釘植した状態で遺存	表5
R552	ウマ	左	上P2～M3	歯のみ釘植した状態で遺存	下顎と咬合しているため計測不可
R552	ウマ	左	下P3～M3	歯のみ釘植した状態で遺存	表5
R552	ウマ	右	下P2～M3	歯のみ釘植した状態で遺存、 第3大臼歯は後1/2破損	下顎と咬合しているため計測不可

表5 ウマの歯の計測値

単位: mm

R551			R552	
上顎	頬舌径	近遠心径	下顎	近遠心径
P3	23.72	27.61	M1	23.31
P4	25.65	25.65	M2	23.86
M1	25.06	23.64	M3	30.35
M2	23.51	23.91		
M3	22.59	25.27		

体である。馬の頭部が置かれていたと思われるが、埋納墳などの掘形は確認できなかった。(安部)

3) 平安時代前期の遺構と遺物

第5a層内検出遺構である。この面では柱穴2基、溝3条、土壇1基を確認した(図14)。

i) 柱穴

柱穴はいずれも直径0.3m、深さ0.25mと小型である。この2基以外に組合うピットは確認できなかった。仮にこの2基が組み合うとすれば柱間は1.8mとなり、方位は正方位ではなく、かなり東に振れることになる。

ii) 溝

SD501は幅0.3m、深さ0.1mである。後世の耕作によりかなり削平されている。埋土はシルトであり、滞水状態にあったものと思われる。

SD502は東西方向の溝と思われ、後述するSX4c01に北側を切られており、規模は不明である。検出面からの深さは0.5mで、やや蛇行していたものと考えられる。埋土は下部に比較的均質な極細粒砂が堆積するが、流水の痕跡は認められない。埋土上層は5cmほどの偽礫からなり、溝の周囲の土を用いて意図的に埋戻されたことが観察できた。

SD503は南北方向の溝である。調査区の東端で検出したため、地層観察用の側溝に重なったことと、後世の地震による地割れで破壊されたため一部を検出したのみである。幅1m、深さ0.3m以上に復元できる。

SD501からは土師器杯A127・128が出土した(図15)。いずれも暗文は施されずにナデで仕上げられ、平城宮土器Ⅲに収まるものである。

SD502からは土師器甕129・椀130が出土した(図15)。130は口径が13.0cmあり、口縁部はていねいなヨコナデが施される。平安時代Ⅱ期に収まる遺物と思われる。

SD503からは土師器杯C132、皿A133、甕134、須恵器高杯135、平瓦131が出土した(図15、図版12)。132には1段、133には2段の放射状の暗文が施され、いずれも飛鳥Ⅲに該当すると思われる。135は大きく外湾して開く高杯の脚部で、奈良～平安時代のものと思われる。131は凸面に4条/cmの縄タキが施され、凹面には布目が残る。

iii) 土壇

SK501は長径1.6m以上、短径1.2m、深さ0.2mの不定形な土壇である。この遺構から出土した遺物は極めて少量であった。

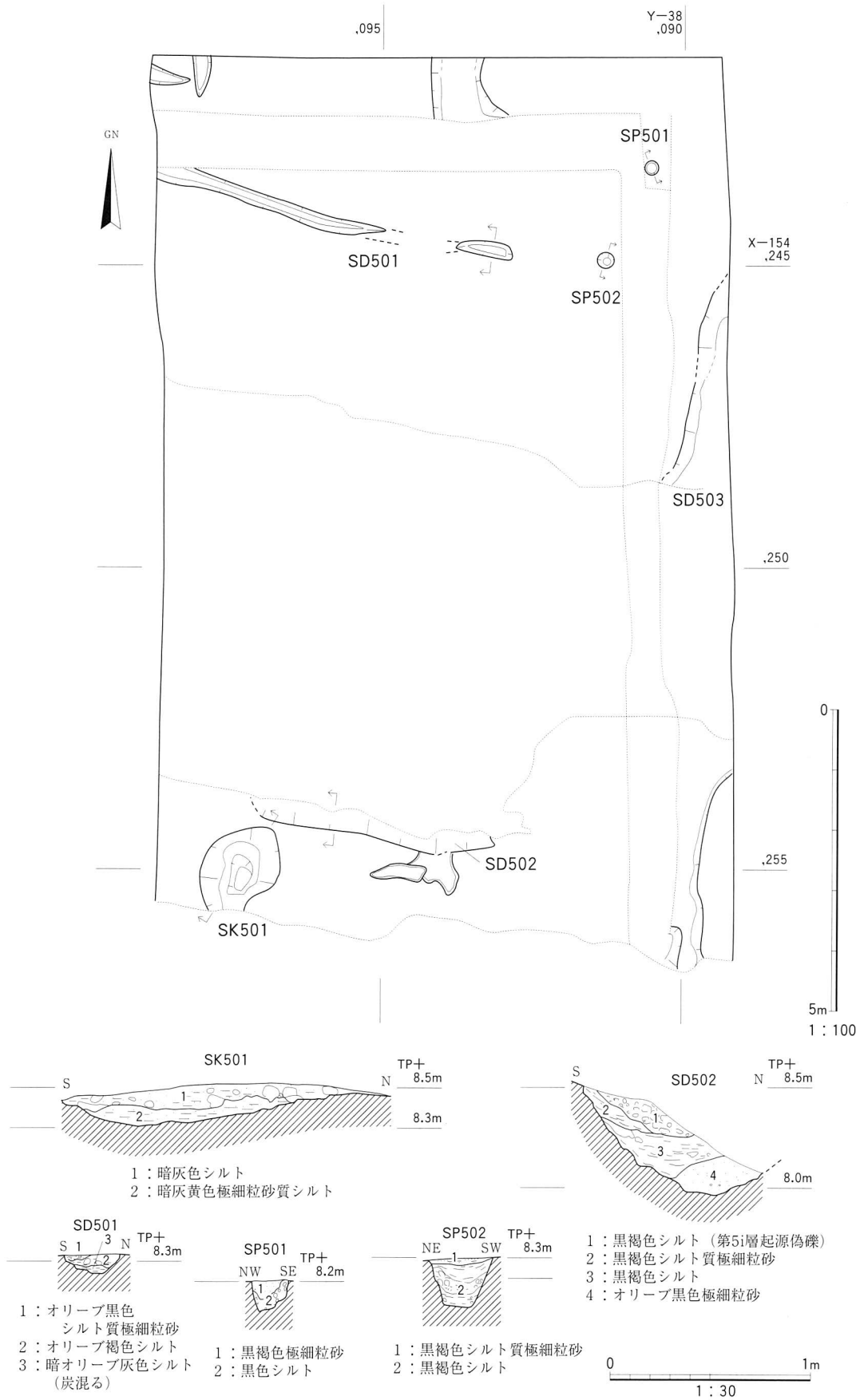


図14 第5a層内検出遺構平・断面図

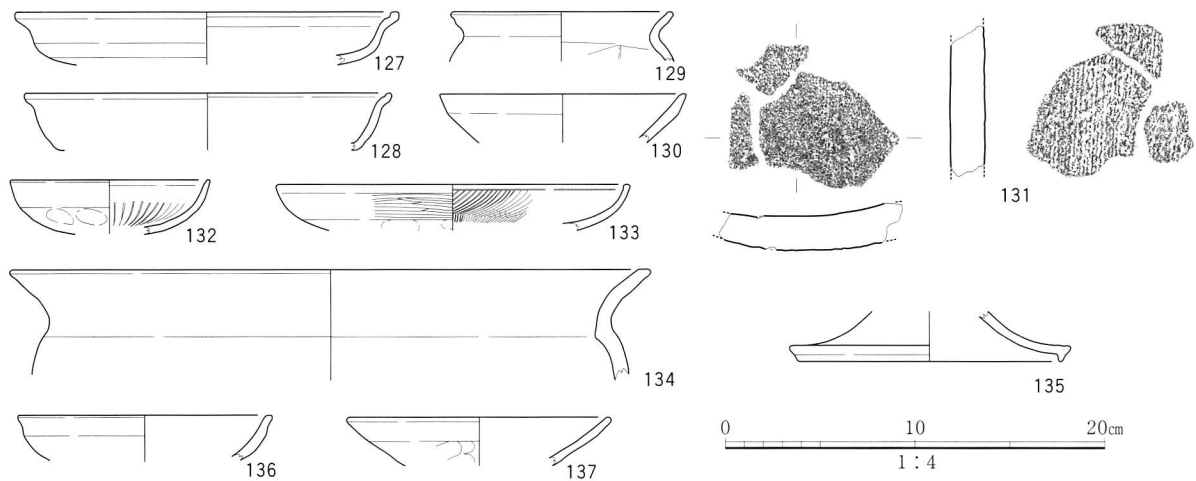


図15 第5a層内検出遺構出土遺物

SD501(127・128)、SD502(129・130)、SD503(131～135)、SK501(136・137)

SK501からは土師器碗136・137が出土した(図15)。136は口縁部外面にていねいなナデが施されている。137は口縁端部がナデで仕上げられ面をもつ。いずれも平安時代Ⅱ期に収まる遺物と思われる。

4) 平安時代後期の遺構と遺物(図16)

第5a層上面検出遺構である。この面では土壌・流路のほかに、地震の痕跡が見つかった。

i) 土壌状遺構(図17～19、図版2・3)

SX4c01は南北6.5m、東西は7m以上であり、深さは0.9mである。後世の地割れにより大きく破壊されているが、ほぼ方形に復元でき、西は調査区外へ延びていた。ゆるやかな落込みで、南肩には杭を東西方向に打ち込んでいる。

杭の平均的な長さは170cm、直径4cmである。表面に樹皮が残ることから枝を払い、先端を加工しただけのもので概して作りは粗雑である(図19・20、図版13)。図20には出土した杭1(138)、2(139)、3(140)、10(141)、11(142)、15(143)、16(144)、17(145)、18(146)、19(147)を示した。このうち140～142は図19に断面図を示したもので、ここでは地中に残った部分のみを図示している。それ以外の杭は上部は残っておらず、地中に打設された部分だけが遺存していた。樹種の詳細は第三章第1節に譲るが、分析の結果判明したものは、ヤマグワ・ヤナギ属・ヒノキ科・エノキ属など多岐にわたる。杭の簡単な作りと樹種のばらつきは、周辺にあった木材を利用していたことを示しており、作られた杭列が簡易なものであったことを示している。

杭は土壌の南肩に沿いつつさらに東側へと続いていることから、土壌に伴うものというよりは流路の北側に設けられた土手を構築するためのものと考えられる。杭は一様に北側に向かって倒れており、南からの激しい力により折れているものや、大きく湾曲したものもある。屈曲点は標高7.8mである。折れた杭の上には植物繊維(R554)が覆いかぶさっていた(図18)。土手の構築時に盛土間に植物を敷き詰め、そのうえに杭を打設する方法は付近でよく検出されるが、この植物繊維は杭を打設の後に置かれたものである。そのため、土留めのために杭の間に渡したものと考えることができる。ただ、杭

の間に渡すための横木が見られなかったため、本来は杭とは関係なく、杭の倒壊後に流れ着いた可能性も残される。

杭がこのような倒壊した原因について明らかにするため、各杭毎に南北方向のサブトレンチを設け、

断面を観察したところ、いずれの杭でも杭が折れた箇所、もしくは屈曲点にあたる水準で、地層に横滑りの痕跡が観察された(図19)。また、遺構にほぼ重なる地点で下位の地層が破壊をうけ偽礫となっていることや、粗い砂が局所的に分布していることが確認できた。これらの状況を総合すると、南北方向に大きな揺れが生じた結果、まず地層が横滑りを起こし杭が北側に倒壊し、同時に、下位の砂礫層である第7bi層が液状化を起こし、続いて粘土～シルトからなる第7ai～第7aiii層を破壊しながら噴砂が発生し、倒れた杭を覆った、という過程が推測される。その後、この遺構には徐々に周囲の土砂が流れ込み埋没していったのである。

この遺構が完全に埋没した年代は後述するように平安時代Ⅲ期新段階である。このころには遺構の南側には東西方向の流路が形成されていた。この流路の北岸に堤防が築かれていたことが、この遺構の性格を探る手がかりとなる。堤防の盛土を構成する土が主に第5a・5b層であること、堤防に直交もしくは平行するように杭が打設されていたこと、そして、堤防に沿うようにすぐ北側に掘られていることから、この遺構は堤防造営に伴う土取りの跡であり、杭は土留めに用いられていた可能性を挙げることができる。形成された窪地は埋戻されることはなく、水成のシルトが堆積していた状況から徐々に埋没していったと考えられる。したがって、検出された杭は倒壊した後は放置されていたこととなり、新たに杭を打ちなおすこともなかったことが窺えるのである。この遺構の性格について留意すべき点は、遺構の埋土から、皇朝十二銭のうち神功開宝(初鑄765年)・承和昌宝(835年)・長年大宝(848年)が各1点ずつ、銅製の巡方169、そして獣骨や歯が出土していることであり、祭祀的な一面を窺うことができる。

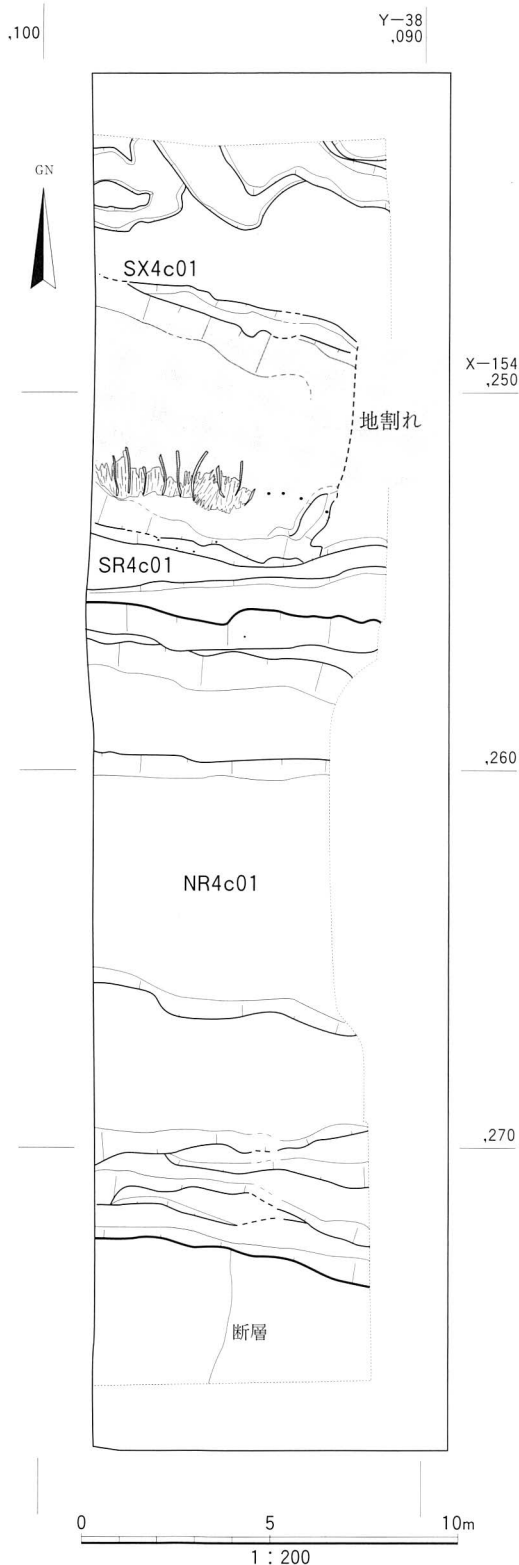


図16 第5a層上面検出遺構平面図

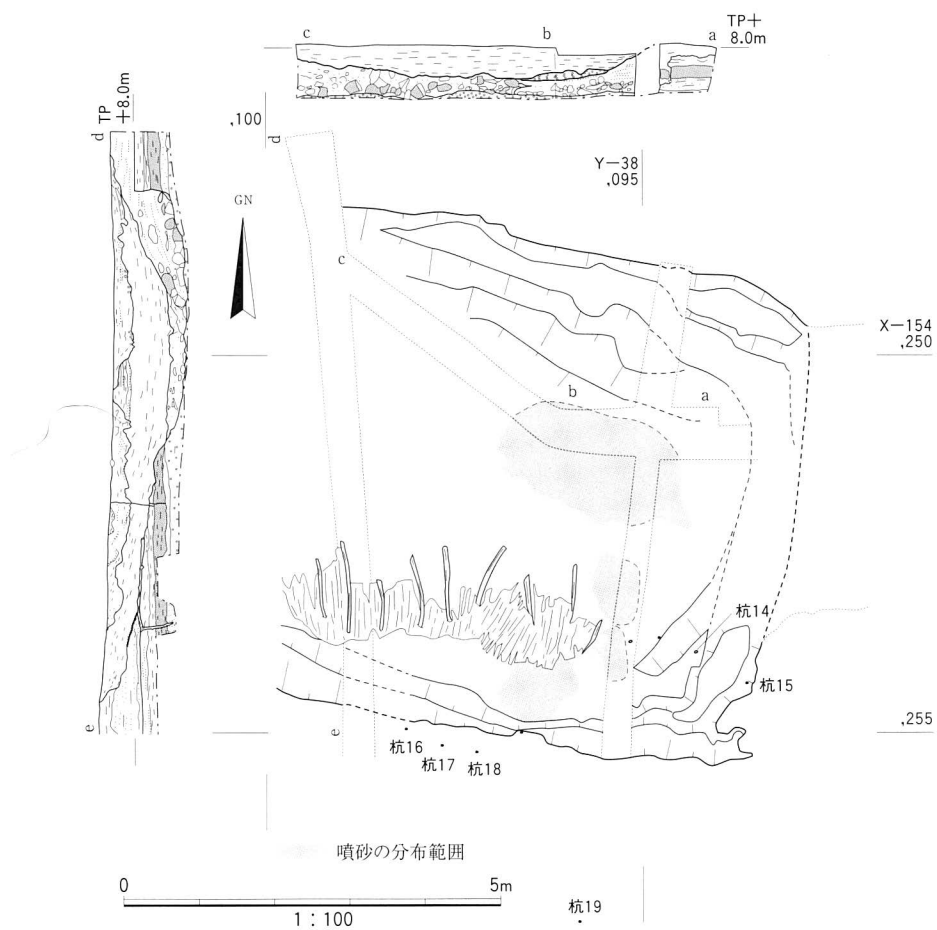


図17 SX4c01平・断面図

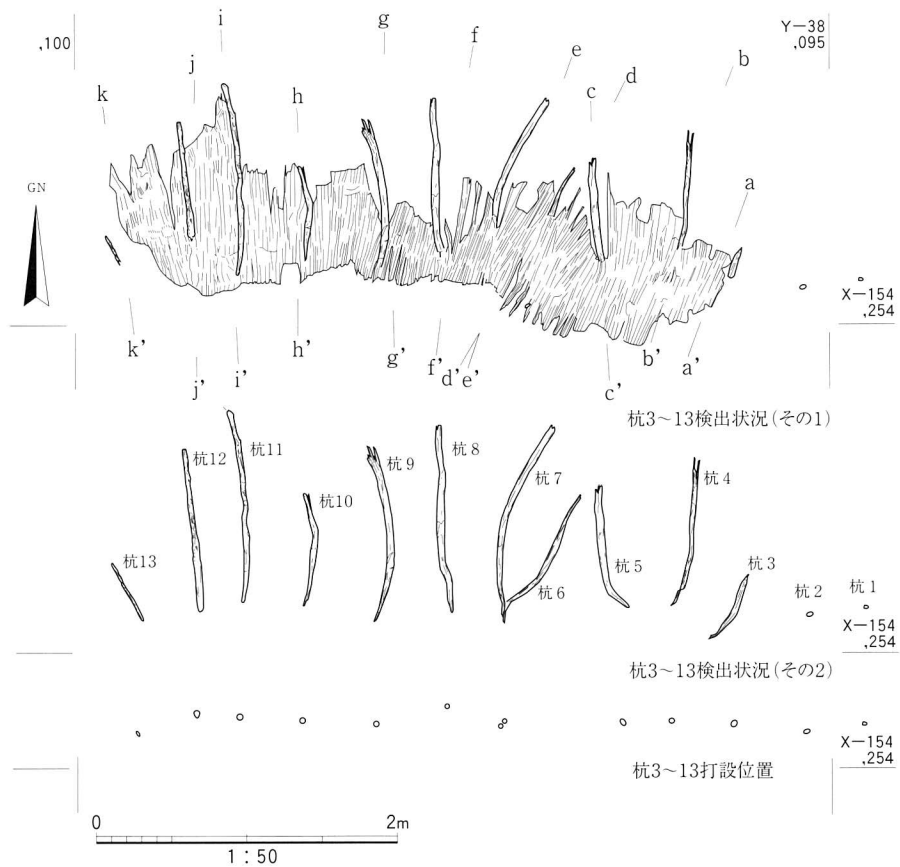


図18 SX4c01内検出杭列平面図

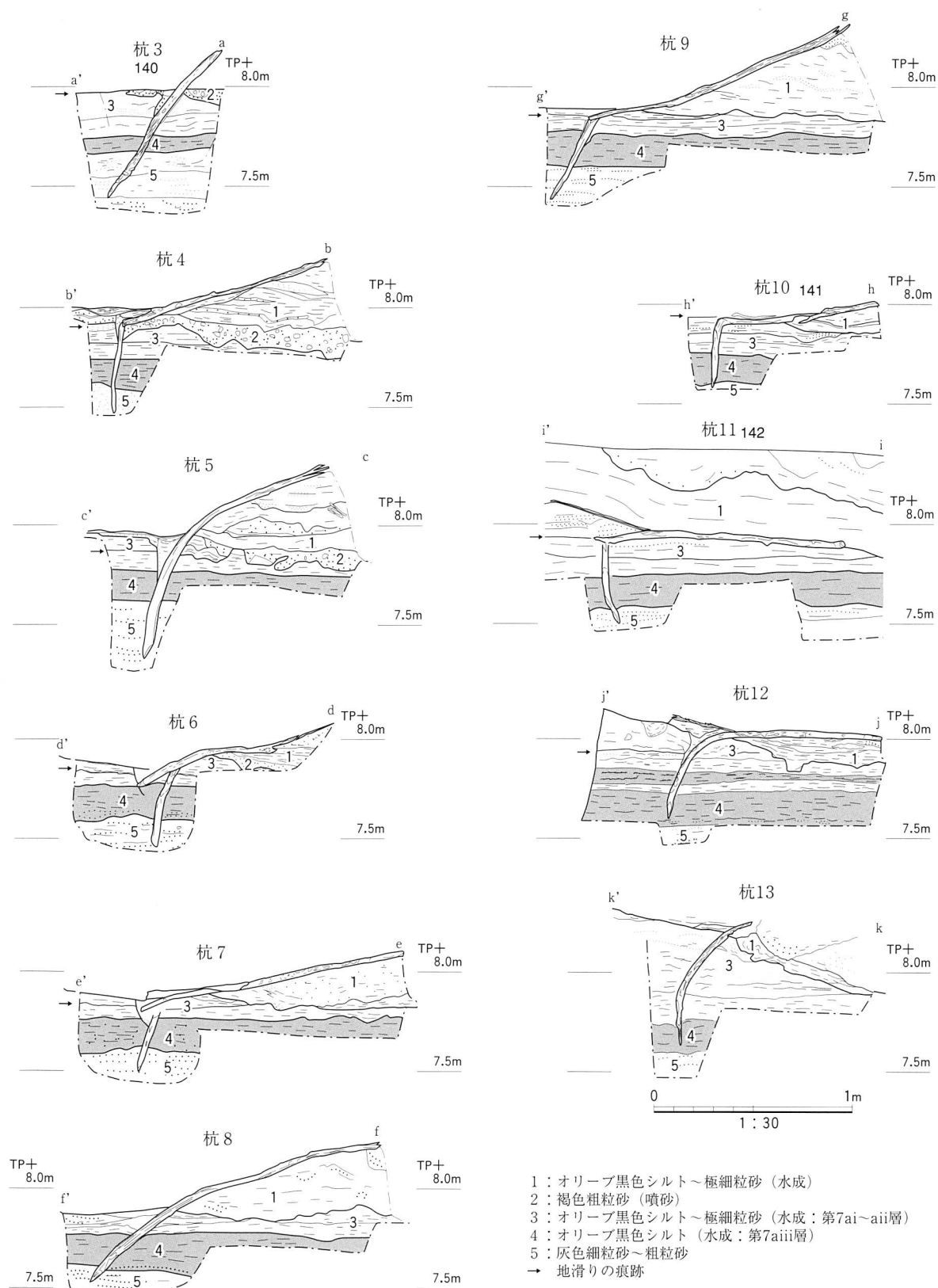


図19 杭断面図

ii) 土壙状遺構出土の遺物(図21、図版10・11・13)

出土遺物には土師器皿148、高杯149、円筒埴輪150、須恵器杯H蓋151、椀152、巡方169がある。
148はいわゆる「て」の字状口縁で、口径が13.6cmあり、平安時代Ⅲ期古段階に属するものである。150は川西編年のⅤ期[川西宏幸1978]、149・151は飛鳥Ⅱのものである。152はきわめて精良な胎土が用いられており、底部を回転糸切りで切り離された後、高台を付けている。高台内に墨が付着してい

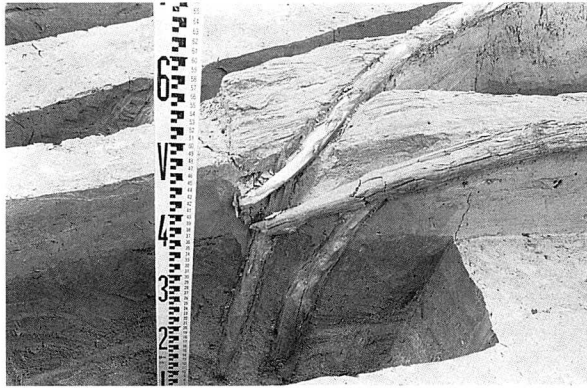


写真4 杭6・7切断部

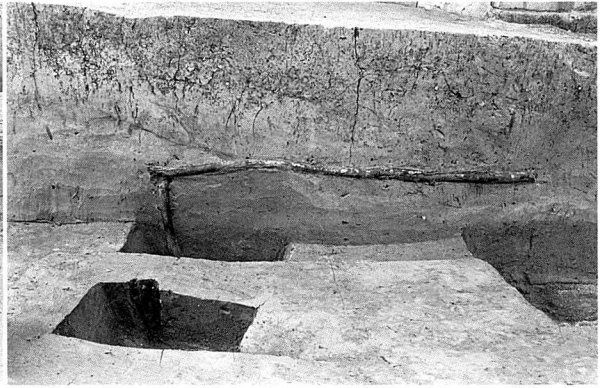


写真5 杭11検出状況

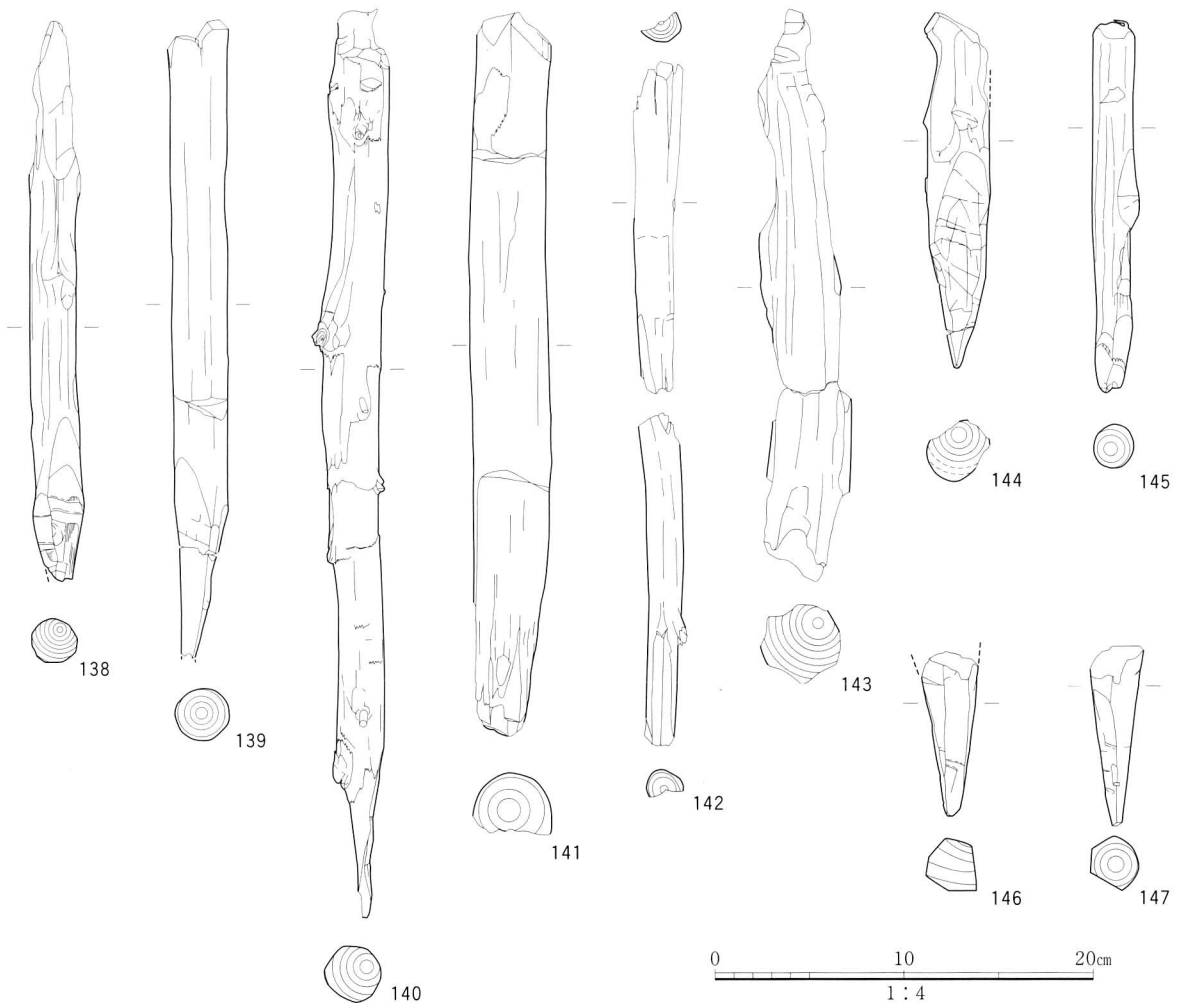


図20 SX4c01杭

ることから、転用硯として再利用されたことがわかる。169は銅製で、長さ2.7cm、幅2.4cm、厚さ0.9cmあり、四隅に鋸が残る。下寄りには長さ2.0cm、幅2.4cmの垂孔がある。表面に黒漆を塗って仕上げている。

SX4c01で確認された噴砂からは土師器皿154、木製品165、銅銭166～168が出土した。これらの遺物が遺構の廃絶時期を示すものと考えることができる。154はいわゆる「て」の字状口縁で、口径が10.8cmある(図21)。平安時代Ⅲ期新段階に属する。165は柄穴があるため、建築部材の一部と思われる。166は神功開宝(初鑄765年)、167は承和昌宝(同835年)、168は長年大宝(同848年)である。

iii) 地震の痕跡

SX4c01が完全に埋没した後に再び大きな地震が発生し、東西方向の地割れが生じている(図16)。この地割れが生じた時期はSX4c01の埋没後で、第4bii層の形成以前である。また、これとは別に調査区の南端では西に10cmほど地層がずれて落込んだ断層が見つかっており(写真6)、地震発生の時期は流路NR4c02埋没後で第4bii層形成以前と考えられた。そのためこれらの痕跡をもたらした地震が同じものであった可能性も残る。

iv) 地割れ出土遺物

土師器椀153、皿155、羽釜156、須恵器壺157～159、瓦器皿160・161、管状土鍾162、平瓦163・164が出土した(図21、図版10・12)。153は口径13.3cmあり、口縁部はナデ、体部から底部にかけてはユビオサエで仕上げられている。平安時代Ⅱ期古段階に該当すると思われる。155は底部を焼成後に外側から穿孔している。平安時代Ⅳ期古段階のものであろう。160・161は内外面をヘラミガキで仕上げている。平安時代Ⅳ古段階に該当する。162は一方の先端がやや欠けるが、残存長4.5cm、孔径0.35cm、重量6.0gある。163は凸面に縄タタキの後にナデが施され、凹面には布目が残る。164は縄タタキの痕が消されずに残っている。

第4cii層は、地割れの周囲に部分的に分布した地層であり、地割れの形成に伴い周囲から土が落ち込んで形成された可能性が強い。そのため、ここでまとめて報告することにする。

土師器には皿170、杯C171、杯A172～174、鉢175、甕176～181、羽釜182、ミニチュア土器183～185がある(図22、図版11)。170はいわゆる「て」の字口縁の皿で、口径が9.2cmあり、平安時代Ⅲ期新段階に属する。171は飛鳥皿、172は平城宮土器Ⅲ、173は平城宮土器Ⅴ、174は平城宮土器Ⅵに位置づけられる。175は内面をナデで仕上げ、暗文は施されない。176～178は外面をユビオサエで仕上げ、179～181にはハケが施される。182は胎土に角閃石を含む。183・184は高杯、185は移動式竈を象ったものであろう。

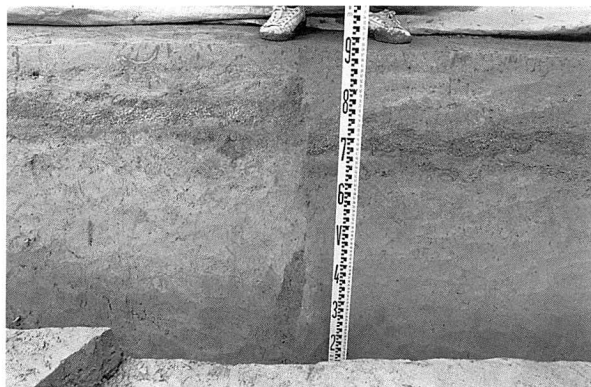


写真6 南壁断層

須恵器には杯B蓋186、同身187、皿C188、高杯189、壺蓋190、壺191・192、甕193・194、円面硯195がある(図22、図版11)。186は口縁部が反ることから、平城宮土器ⅤもしくはⅥに該当

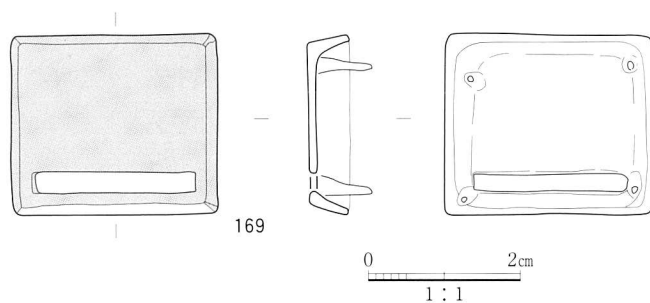
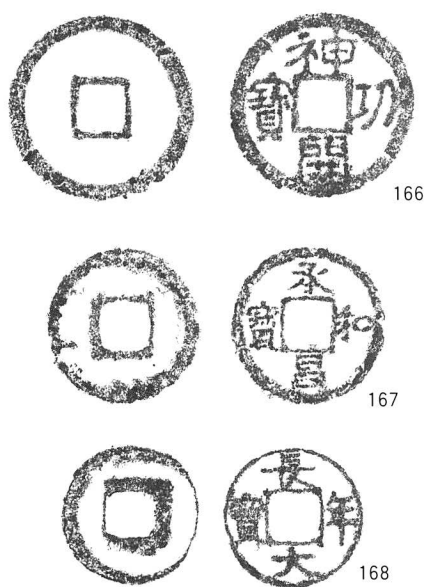
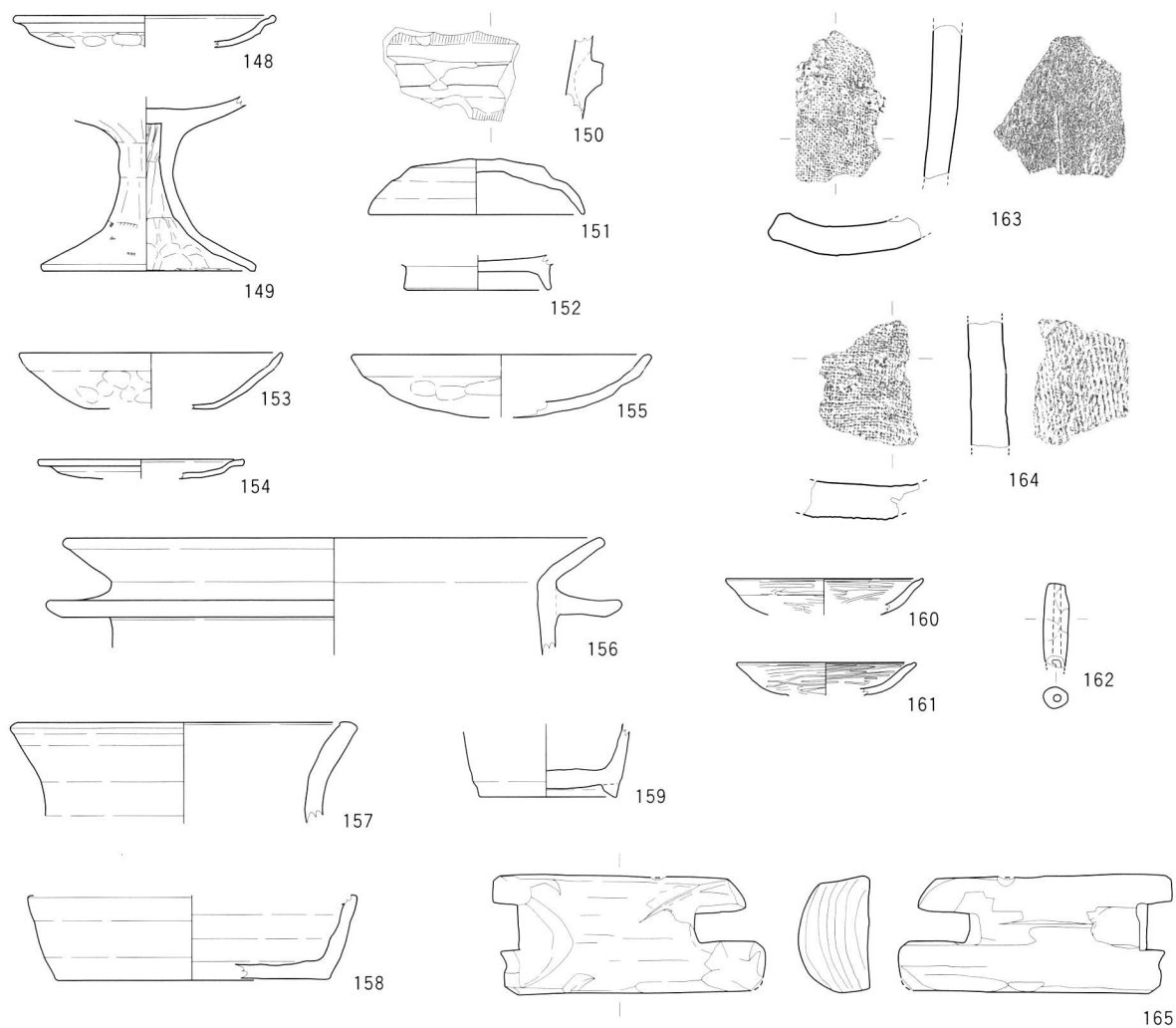


図21 第5a層上面検出遺構出土遺物

SX4c01(148~152・169)、地割れ(153・155~164)、噴砂(154・165~168)

すると思われる。187は高台が内寄りに付くため、平城宮土器ⅡもしくはⅢに位置づけられると思われる。188は平城宮土器Ⅴと思われる。195は海の部分のみが残っており、外面には断面三角形の突帯が2条巡る。

196・197は凸面に縄タタキが施され、凹面に布目が残る平瓦である(図22)。

v) 流路(図23、図版3)

NR4c01は幅16m、深さ2mの東西方向の流路である。北岸は既述したように堤防が作られている。激しい流れと滞水状態を繰返し、最終的には水が澱み自然に埋没した過程が観察できた。特に埋土の最下層は極粗粒砂～細礫からなり、激しい流れにより、下位層を大きく削りこんでいた。最下層からは乾元大宝と思われる銅銭の残欠と平安Ⅲ期に相当する遺物が出ている。このことから、NR4c01は

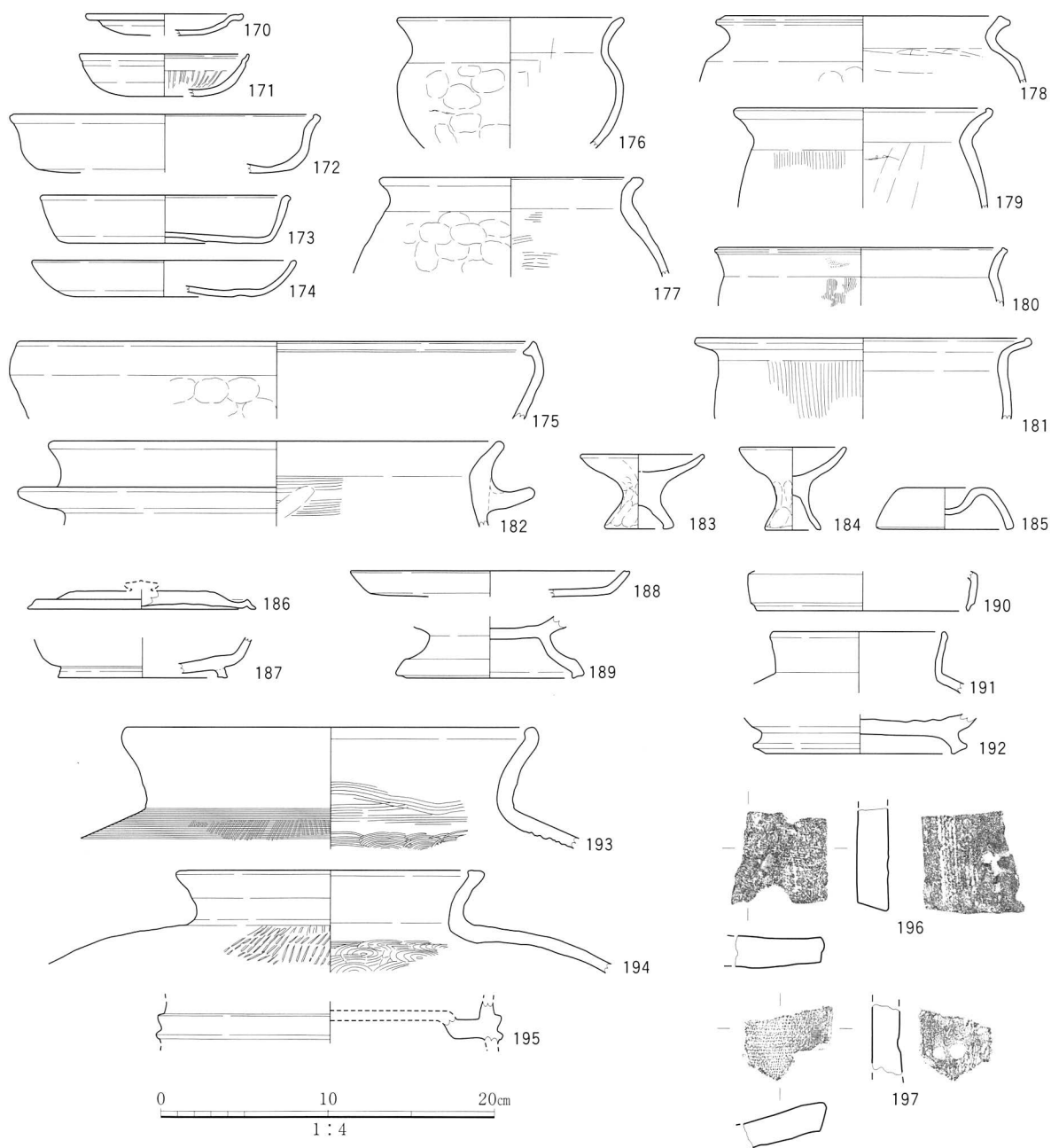


図22 第4cii層出土遺物

平安時代Ⅲ期に流れはじめ、12世紀後半まで流路として機能し、その後、次第に埋没していったものと思われる。ただ、調査区の南部ではこの流れに切られる同方向のNR4c02があることから、ここに河道ができた時期はさかのぼる可能性がある。

川の方角と規模および出土した遺物の年代から考えると、NG96-66次調査[大阪市文化財協会1999]で検出されたNR4B01と同一の河川であると思われる。

vi) 流路出土の遺物(図24・25、図版10～14)

土師器には皿198～207、椀208、鉢209、高杯210、甕211～214、羽釜215がある(図24)。198～201・204はいわゆる「て」の字口縁の皿で、いずれも口縁端部がつまみ上げられている。198は口縁部の反りが弱いため平安時代Ⅳ期古段階に、その他は平安時代Ⅲ期新段階に位置づけられる。202は口縁部がまっすぐ伸び、底部にはユビオサエがあり、平安時代Ⅳ期新段階のものである。203・205～208は底部にユビオサエが施され、平安時代Ⅱ～Ⅲ期に位置づけられる。209は口径が32.0cmに復元できる片口の鉢である。210は低い脚部に11面の面取りが行われる。211は外面ハケ、212はユビオサエが施される。213・214は奈良～平安時代初頭の人面墨画土器の破片と思われる。215は胎土に角閃石を含んでいる。

須恵器には杯H蓋216、同身217、壺218～222がある(図24)。いずれも飛鳥～奈良時代のものである。222は肩部に把手が付いているため、平瓶の可能性もある。223は灰釉陶器椀である。224は黒色土器A類椀である。内面にヘラミガキが施され、口縁端部には弱い沈線が巡る。225～229は瓦器椀である。225～228は内外面ともに密にヘラミガキが施され、226・227の高台は断面台形でしっかりとしている。226は粘土板を重ね合わせた痕跡が残っており(写真7)、楠葉型によく認められる粘土板結合法と呼ばれる技法であるが[橋本和久1992]、口縁部にヨコナデが施される特徴は和泉型である。229は高台の断面が三角形で高台形も小さく、外面にはユビオサエが顕著に残る。225～228は12世紀前半、229は12世紀後半に位置づけられる。

230は管状土錘、231は砥石、232は乾元大宝の破片である(図24)。230は完形で、長さ5.4cm、孔径1.0cm、重量53.0gである。231は筋状の溝がある。232は初鑄が958年で、一番最後の皇朝

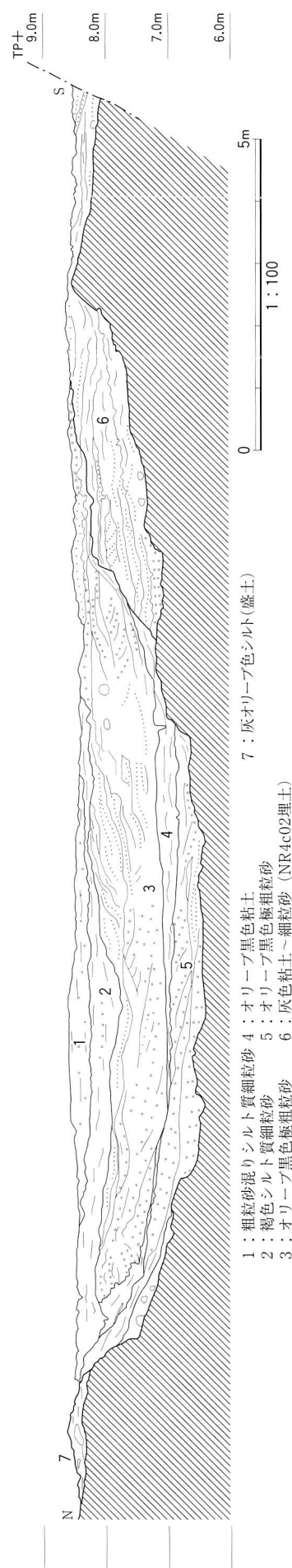


図23 NR4c01・4c02断面図

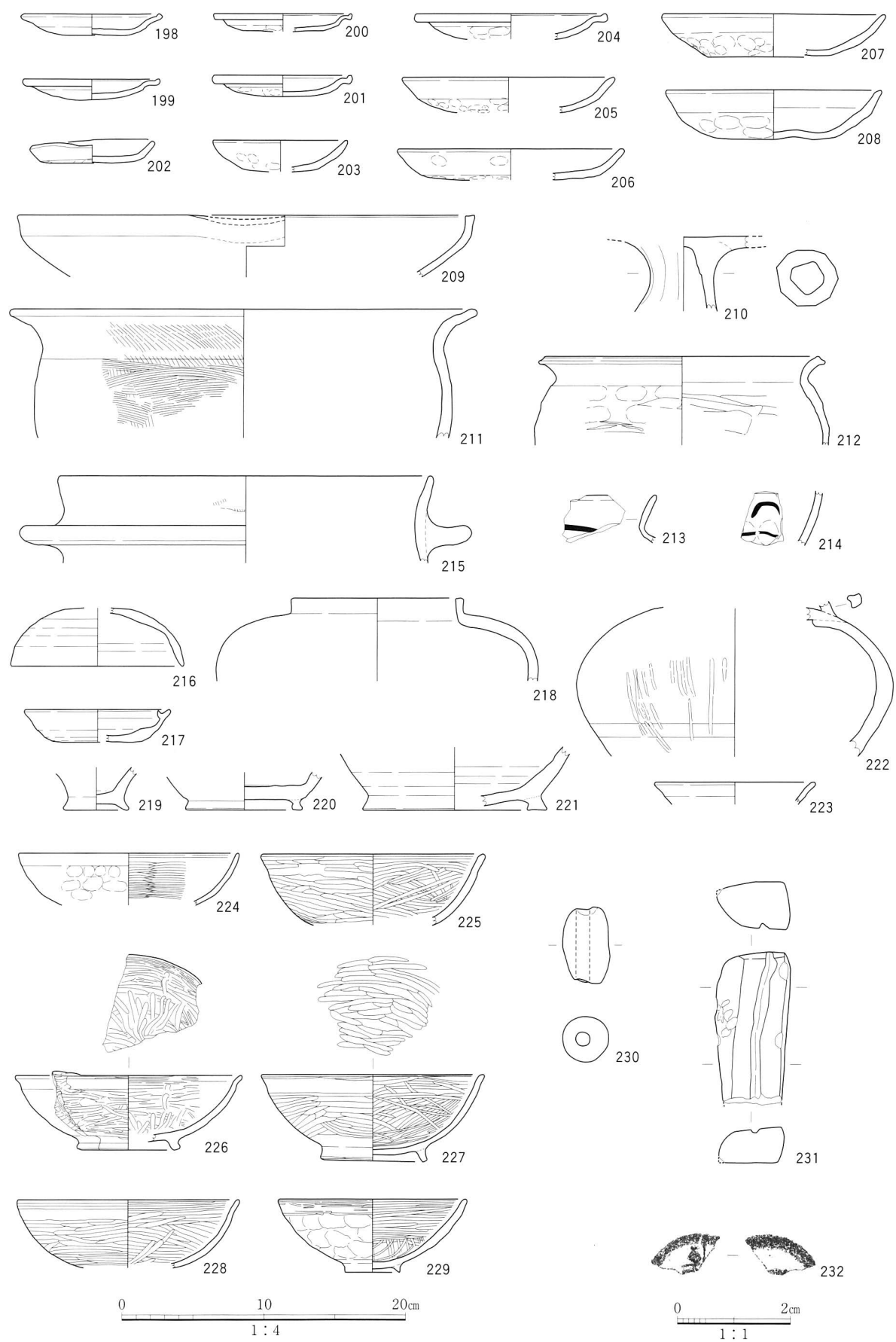


图24 NR4c01出土遗物(1)

十二銭である。

233～234は丸瓦、235～239は平瓦である(図25)。233は玉縁の部分で、凹面には布目が残る。235～238の凸面には縄タタキメが、凹面は布目が残る。239は凸面に斜格子タタキが施される。

240～242は木製品である(図25)。240は曲物の底板、241は板状に加工されたもので、242は片方の先端を尖らしている。

以上の遺物のほかに、ウマの脛骨と中足骨が出土している。



写真7 瓦器碗226に見られる
粘土板結合法

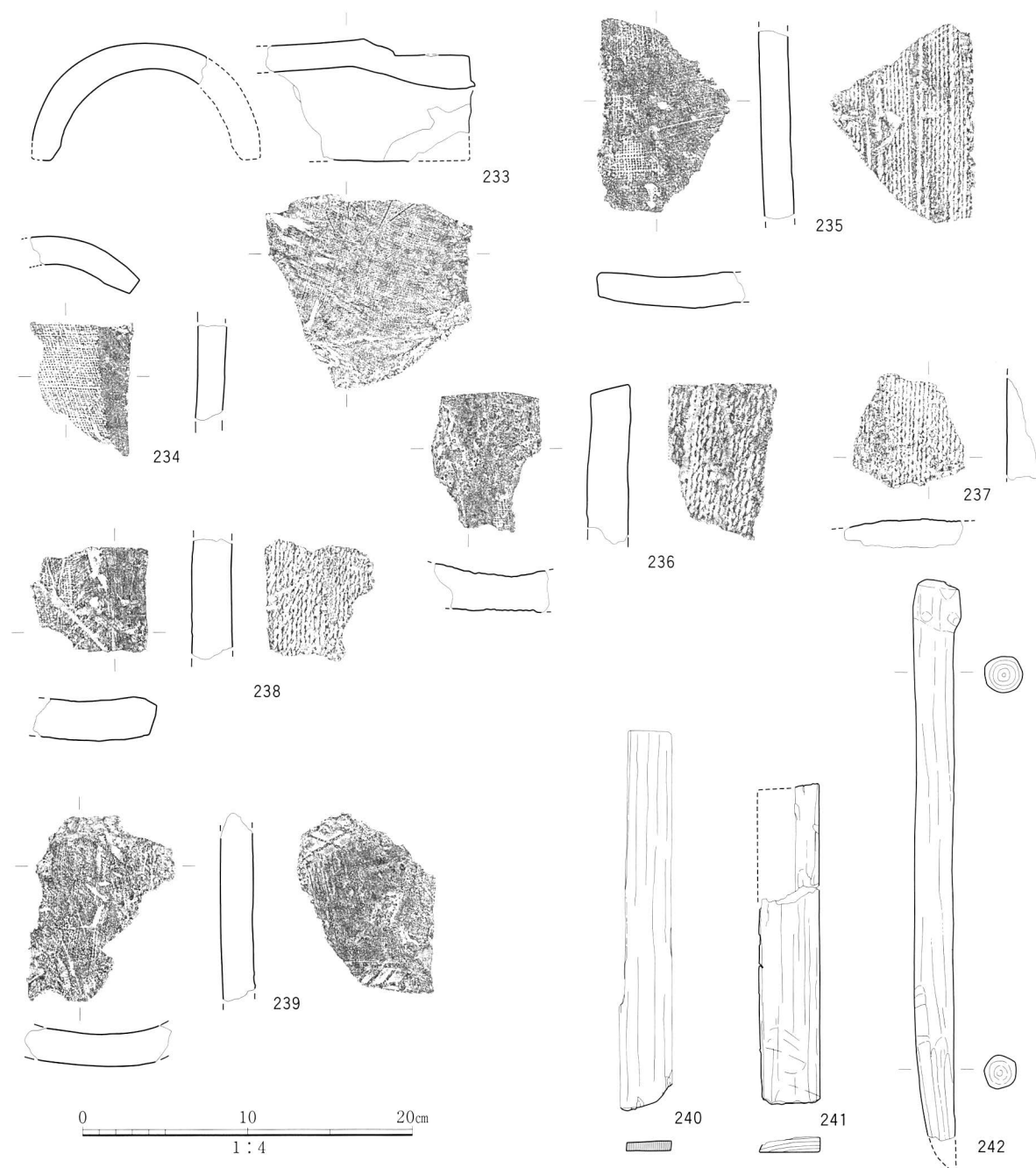


図25 NR4c01出土遺物(2)

5) 鎌倉時代以降の遺構と遺物

NR4c01が埋没した後は、周囲の平坦化が進み、耕作地として現代にいたっていた。NR4c01が埋没後の耕作土である第4bi層からは243の緑釉陶器碗が出土しており、高台内以外は施釉されている(図

27、図版14)。以後も耕作と河川の氾濫による互層が続
き、中でも水成層で覆われていた第3b層上面では畦畔が
良好に遺存していた(図26、図版3)。

畦畔は2条検出し、いずれも正東西である。SR301は
底部で幅1.2mであり、高さは0.3mとかなり大型の畦畔
である。これに取付く南北方向の畦畔は確認されなかつ
た。第3a層の水流はこの畦畔に沿って東から西に流れた
らしく、畦畔の南・北際はかなり激しく抉られていた。

SR302は南から北に落込む段差であり、畦畔の痕跡と
思われる。

この畦畔に伴う作土である第3b層からは瓦質土器火鉢
244、SR301より備前焼播鉢245が出土した。244は火鉢
の口縁部近くと思われ、突帯の上にスタンプ文が施され
る。245は口縁端部が上下にわずかに拡張し、播り目が
疎らであることから、15世紀前半のものと考えられる。

なお、第2層段階で掘削されたと思われる土壇2基を
検出している(図26)。土壇は一辺が0.7~0.8mの方形
で、深さはSK201が0.4m、SK202が0.6mであった。埋
土は第3a層と第3bi層に由来する偽礫で、掘削後、すぐ
に埋戻したと思われる。このうちSK201から鞆羽口246
が出土した(図27)。

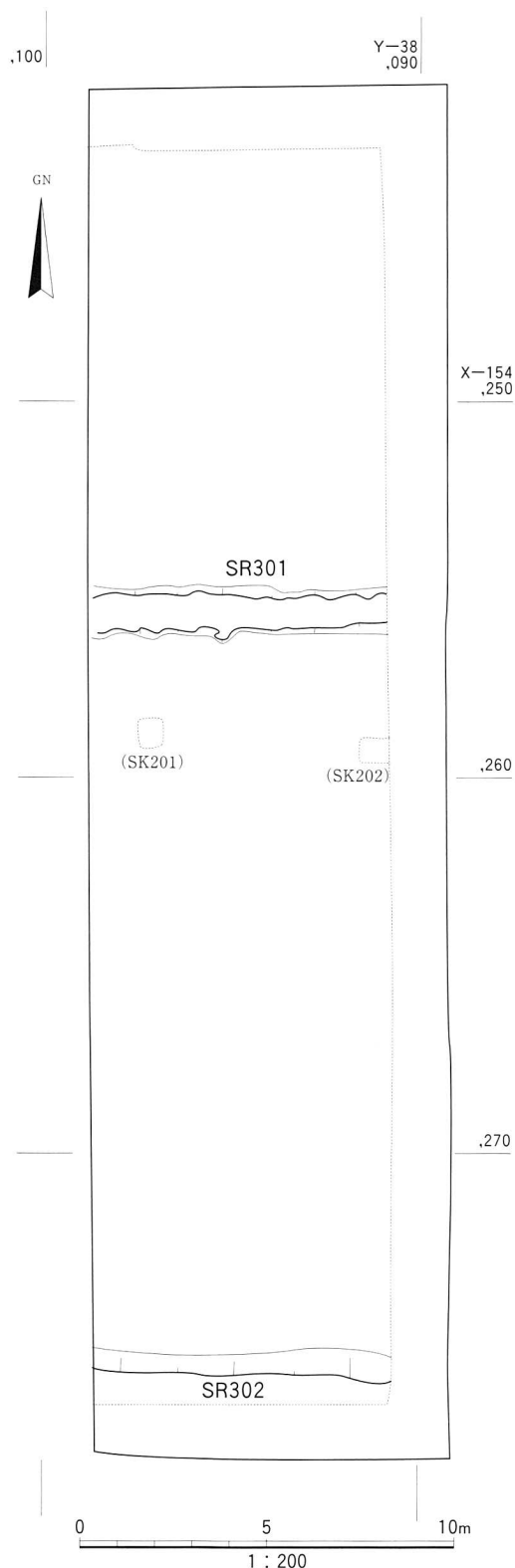


図26 第3b層上面検出遺構平面図

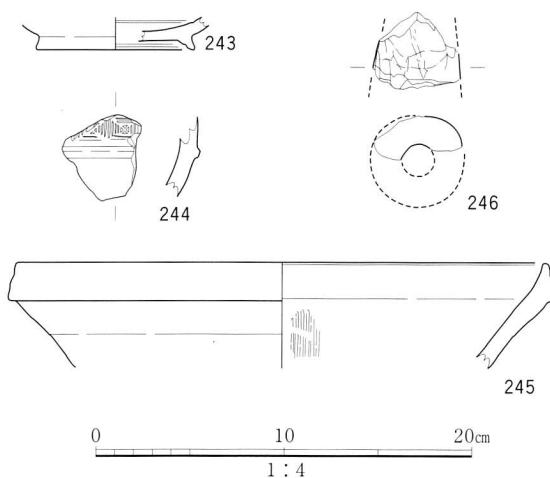


図27 各層・遺構出土遺物

第4bi層(243)、第3b層(244)、SR301(245)、SK201(246)

第2節 南調査地Ⅰ～Ⅲ区(NG01-25次調査)の成果

1) 地層(図28、表6、図版4)

第0層：現代の盛土層である。

第1a層：黄灰色粗粒砂～シルト質細粒砂層である。層厚は30cmであった。粗粒砂層はⅠ区の北部に、細粒砂～シルト層はⅠ区の南部とⅡ・Ⅲ区に分布していた。細粒砂～シルト層は耕起されており、下面に畝間溝が認められた。Ⅰ区では第0・1a層は重機によって除去した。

第1b層：粗粒砂混り暗黄灰色細粒砂層である。作土層で層厚は平均10cmであった。Ⅰ・Ⅲ区に分布していた。本層下面で近・現代の溝・畝間溝・落込みを検出した。

第2a～3b層は中近世の作土および水成層である。層相の違いによって細分した。第2a・b層はRK2層に、第3a・b層はRK3層にそれぞれ対比される。

第2a層：粗粒砂～細礫混り灰オリーブ色細粒砂層である。層厚は15cmであった。本層下面で多数の畝間溝を検出したことから作土層と判断される。

第2b層：中粒砂混り暗オリーブ灰色シルト質細粒砂層である。層厚は20cmであった。本層下面で畝間溝を検出したことから作土層と判断される。

第3a層：暗オリーブ灰色シルト～粘土層で構成され、層厚20cmであった。本層内で溝・畝間溝を検出したことから作土層と判断される。

第3b層：粗粒砂混り灰オリーブ色細粒砂で構成され、層厚は40cmであった。層中には粗粒砂のラミナが認められたことから水成層と判断される。本層はⅠ区北西部に認められた。

第4a・b層以下はGL-2mより深部の調査を行ったⅠ区の観察に基づく。第4層は河成堆積層であり、第4a層がRK4A層に、第4b層がRK4B層にそれぞれ対比される。

第4a層：灰黄～にぶい黄橙色の極粗粒砂～シルト層であり、Ⅰ区全体に分布していた。層厚は60cmであった。分級が良く、下位から上位にかけて粗粒な碎屑物から細粒のものへと漸移変化していた。ラミナの形状から判断するとⅠ区北部では南南西から北北東の、またⅠ区南半では南西から北東の流れによって堆積していたといえる。なお、Ⅱ・Ⅲ区で調査を行なったのは、本層までである。

第4bi層：にぶい黄橙色の細礫～粗粒砂層であり、SR401の南側を流れるNR401を埋積していた。層厚は0.2mであった。ラミナの形状から判断すると、南西から北東の流れによって堆積していたといえる。また流路NR401は基底面で南西から北東方向のグループ・キャストが顕著であった。本層中から平安時代Ⅲ期古段階の土師器皿Cや12世紀初頭に属すると思われる瓦器が出土した。

第4bii層：オリーブ黒色極細粒砂～シルト層である。層厚は10cmでSR401の南側に分布していた。水田作土の上に堆積した砂泥層である。

第4biii層：オリーブ黒色粗粒シルト～粘土層である。層厚20cmの作土層であり、Ⅰ区の北半部に分布していた。本層上面で東西に延びる畦畔SR401を検出した。

第4ci層：オリーブ黒色粗粒シルト～粘土層である。層厚10cmの水成層であり、Ⅰ区の南半部に分

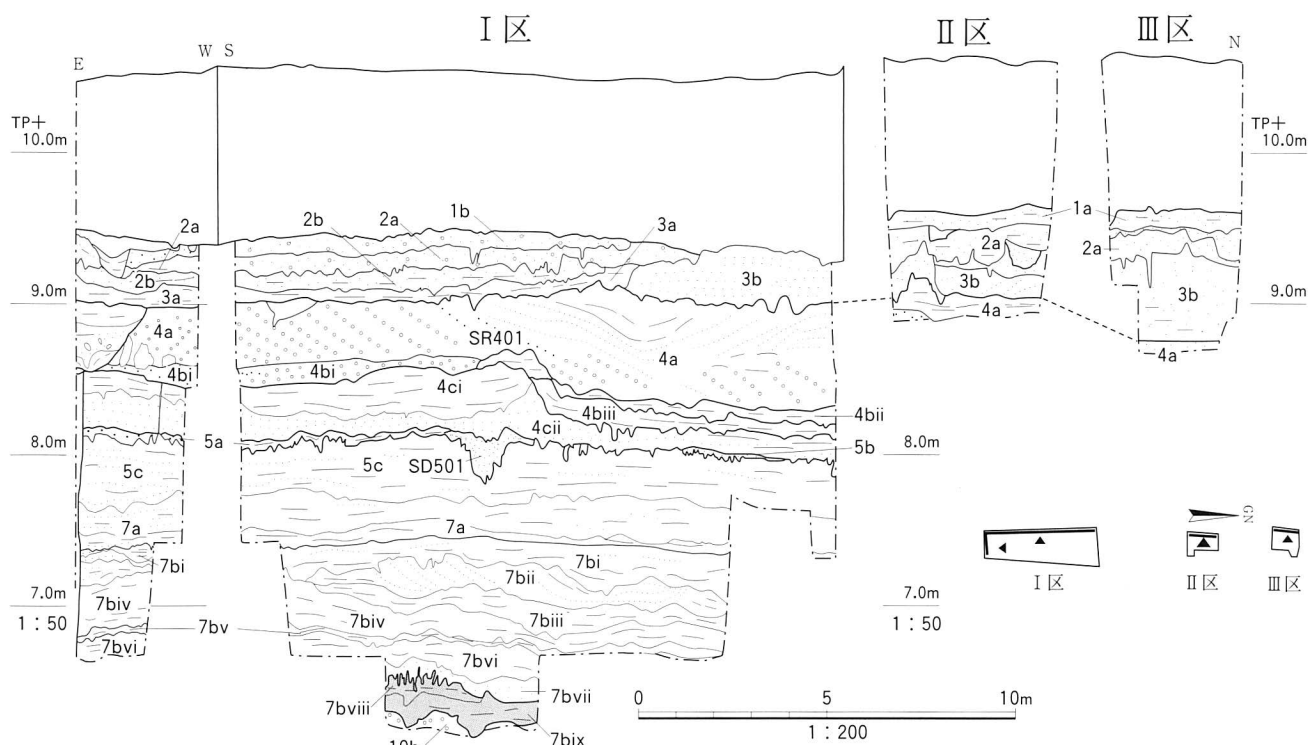


図28 南調査地Ⅰ～Ⅲ区地層断面図

布していた。本層上部は第4bi層によって大きく削られていた。

第4cii層：シルト混りオリブ黒色極細粒砂層である。層厚は20cmであり、調査地全体に分布していた。水成層であり、Ⅰ区北側に向かうにつれてシルトへと漸移的に側方変化していた。

第5a層：細粒砂混り暗オリブ灰色シルト質粘土層である。層厚は10cmであり、SD501周辺に分布していた。淘汰が悪く、偽礫が認められたことから作土層と考えられる。

第5b層：黒オリブ灰～灰色細粒砂で構成される水成層であり、SD501の底と北側に分布していた。本層中から平安時代Ⅰ期に属すると考えられる土師器が出土した。

第5c層：灰色極細粒砂～シルトで構成される水成層である。層厚は30cmであり、極細粒砂の平行ラミナが顕著であった。溝SD501は本層上面から掘込まれていた。また本層上面には偶蹄目類のものと思われる多数の踏込みが認められた。

第7a層：暗オリブ灰色粗粒シルト～極細粒砂層である。層厚は30cmであり、層中に極細粒砂のラミナが認められた。本層中から内面に暗文を施した土師器杯片が出土しており、飛鳥Ⅰ・Ⅱに属すると思われる。

第7b層以下は遺物が出土せず、各層の岩相と周囲の調査結果を参照しながら地層の比定を行なっている。第7bi～7bvi層はRK7Bi層に対比される水成層である。

第7bi層：灰色細粒砂～シルト層である。層厚は30cmであり、Ⅰ区全域に分布していた。

第7bii層：灰色粗粒砂混り細粒砂層である。層厚は30cmであり、ラミナの形状から南南西から北北東の流れによって堆積したものといえる。

第7biii層：灰色細粒砂～シルト層である。本層中から腐蝕した木の枝が数点出土した。層厚は30

表6 NG01-25次層序表

層序	長原層序	六反層序	岩層	層厚 (cm)	特徴	自然現象	遺構	遺物	時代
0	0	0			盛土				近・現代
1a	1	1	黄灰色粗粒砂～シルト質細粒砂	30	作土				
1b	1	1	粗粒砂混り暗黄灰色細粒砂	10	作土				
2a	2	2	粗粒砂～細礫混り灰オリーブ色細粒砂	15	作土				江戸時代
2b	2	2	中粒砂混り暗オリーブ灰色シルト質細粒砂	20	作土				
3a	3	3	暗オリーブ灰色シルト～粘土	20	作土		▽SK3a01・3a02		
3b	3	3	粗粒砂混り灰オリーブ色細粒砂	40	水成		SK3b01・3b02 ↓SD3b01・3b02		室町時代
4a	4A	4A	灰黄～にぶい黄橙色極細粒砂～シルト	60	水成				
4bi	4B	4B	にぶい黄橙色粗粒砂～細礫	20	水成			瓦器	鎌倉時代
4bii	4B	4B	オリーブ黒色極細粒砂～シルト	10	水成				
4biii	4B	4B	オリーブ黒色粗粒シルト～粘土	20	作土		←NR401 SR401		
4ci	4C	4C	オリーブ黒色粗粒シルト～粘土	10	水成				平安時代
4cii	4C	4C	シルト混りオリーブ黒色極細粒砂	20	水成				
5a	5-6	5-6	細粒砂混り暗オリーブ灰色シルト質粘土	10	作土				
5b	5-6	5-6	黒オリーブ灰～灰色細粒砂	——	水成		←SD501		奈良時代
5c	5-7A	5-6	灰色極細粒砂～シルト	30	水成				
7a	7Bi	7Aiv	暗オリーブ灰色粗粒シルト～極細粒砂	30	水成				古墳～ 飛鳥時代
7bi	7Bii	7Bi	灰色細粒砂～シルト	30	水成				
7bii	7Bii	7Bi	灰色粗粒砂混り細粒砂	30	水成				
7biii	7Bii	7Bi	灰色細粒砂～シルト	30	水成				古墳時代
7biv	7Bii	7Bi	灰色シルト～粘土	24	水成				
7bv	7Bii	7Bi	灰色粘土	6	水成				
7bvi	7Bii	7Bi	灰色粘土	22	水成				
7bvii	7Biii	7Bii	灰オリーブ色細～中粒砂	4～18	水成	地震			
7bviii	7Biii	7Bii	オリーブ黒色シルト	12	古土壤				
7bix	7Biii	7Bii	オリーブ黒色シルト混り細粒砂	12～28	古土壤				
10b	9B	10B	灰色粗～極粗粒砂	>20	水成				

cmであり、I区全域に分布していた。

第7biv層：灰色シルト～粘土層である。腐蝕した植物片を多く含んでいた。層厚は24cmであり、I区全域に分布していた。

第7bv層：層厚6cmの灰色粘土層である。

第7bvi層：層厚22cmの灰色粘土層である。

第7bviiと7bix層はRK7Bii層に対比される。水成層である第7bvii層と、古土壤である第7bviiiと7bix層とに区分した。

第7bvii層：灰オリーブ色細～中粒砂層である。層厚は4～18cmと北へ向かうほど厚みを増していた。

第7bviii層：オリーブ黒色シルト層である。層厚は12cmであり、層の上面は北へ向けて傾斜していた。層全体が暗色化しており、水成構造は認められず、上面には踏込みが認められたことから、古土壤と考えることができる。

第7bix層：オリーブ黒色シルト混り細粒砂層である。層全体が暗色化しており、下面には植物の根の痕跡が多く認められたことから、古土壤と考えられる。層厚は12～28cmであった。

第10b層：灰色粗～極粗粒砂層である。上部は硬くしまっており古土壤の可能性もあるが、下部にはラミナが認められたために水成層と認識した。層厚は20cm以上であった。RK10B層に相当すると思われる。

2) 平安時代の遺構(図29、図版4)

i) 第5c層上面検出遺構(図29、図版4)

SD501はI区中央で検出した東西方向の溝である(写真8)。平面は東から西に幅を減じた不定形なものとなっている。深さは0.3mである。埋土は水成の極細粒砂であり、流水のあったことが分かる。埋土中より平安時代I期のものと考えられる土師器皿Bや、土師質の平瓦の破片・動物骨片などが出土した。

ii) 第4biii層上面検出遺構(図29、図版4)

SR401はI区中央部に位置する正東西方向に延びる畦畔である。幅1.8m、高さ0.2～0.6mであった(写真9)。畦畔から遺物は出土しなかった。

NR401はI区南部に位置する南西から北東方向の流路である。幅2.5m、深さ0.3～0.7mであり、基底面にはグループ・キャストが認められた。既述したように埋土である第4bi層からは平安時代Ⅲ期古段階の土師器皿Cや12世紀に属する瓦器椀が出土しており、11世紀頃を中心に機能した流路と考えられる。また埋土中より円筒埴輪と移動式竈の破片がそれぞれ1点出土した。破片はそれほど磨滅しておらず付近に古墳時代中・後期の遺構が存在していた可能性がある。

3) 鎌倉～室町時代の遺構(図29)

i) 第3b層基底面検出遺構(図29)

SD3b01は南調査地東側で検出した南北方向に延びる溝である。幅1.6m以上、深さ0.4mであり、土壌SK3b01とSK3b02に接していた。溝の底には耕作溝を1条検出した。溝埋土中より瓦質の甕、土師器皿などが出土した。

SD3b02は南調査地南側で検出した東西方向に延びる溝である。幅1.0m、深さ0.3mであり、東でSD3b01とSK3b02に接していた。

SK3b01は直径3.6m、深さ0.5mの円形の土壌である。SK3b01の埋土から14世紀前半のものと思われる瓦器椀の細片が出土した。

SK3b02は直径3.0mに復元される深さ0.5mの円形の土壌である。SD3b01の溝底を掘下げて設けら

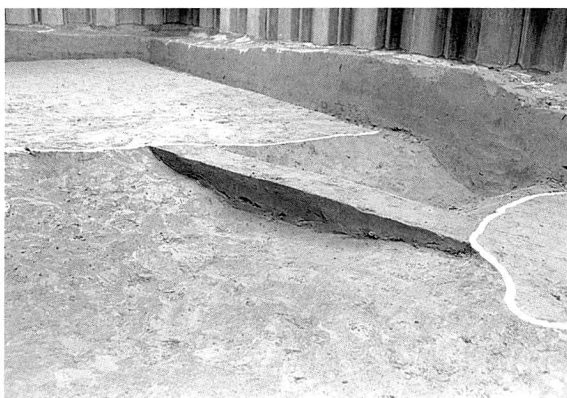


写真8 SD501断面(東から)

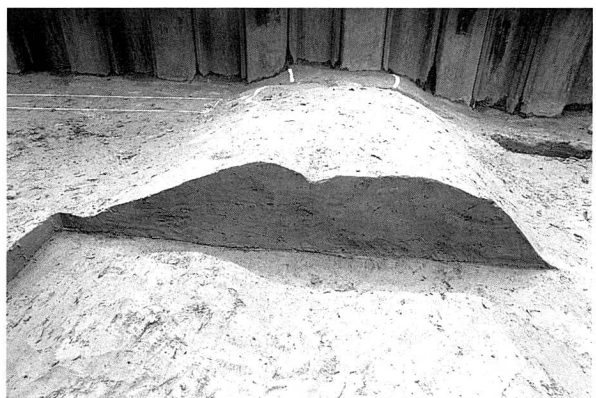


写真9 SR401断面(東から)

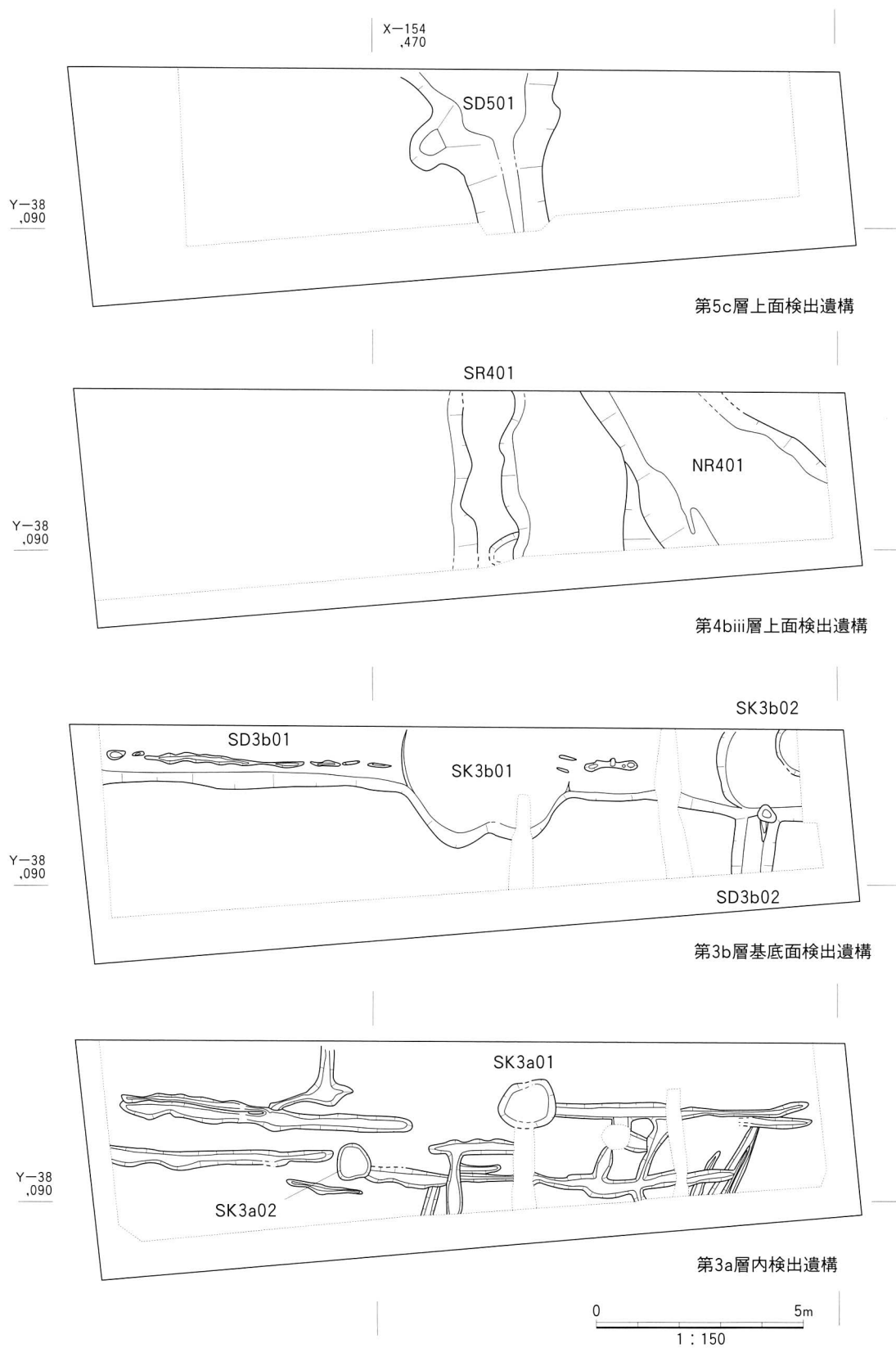


図29 平安～室町時代の遺構平面図

れており、二段に落込んでいた。埋土中から土師器皿・羽釜、丸瓦の細片が出土した。

ii) 第3a層内検出遺構(図29)

SK3a01・3a02は直径0.8～1.2m、深さ0.3mの楕円形の土壌である。埋土にはシルトの偽礫が含まれており、人為的に埋戻された可能性が高い。遺物は出土しなかった。

畝間溝群 幅0.1～0.3m、深さ0.2m前後の畝間溝である。南北方向のものが多いが、東西に枝分かれするものも認められた。遺物は土師器の細片が出土したのみである。

第3節 南調査地Ⅳ～Ⅴ区(NG02－4次調査)の成果

1)地層(図30、表7、図版5)

第0層：現代の盛土層である。現地表から約1m下、TP+9.8mまで及ぶ。

第1層：層厚30cmの現代作土であった。断面観察のみであるが、下面で耕作溝を確認した。また、第Ⅳ区では南北方向の溝を確認している。

第2層：近世の作土であり、部分的にさらに2層に細分することが可能である。それぞれの下面で耕作溝が検出された。

第3層：RK3層に相当すると思われる作土である。

第4ai層：調査区の全面で検出された粗粒砂からなる氾濫性堆積層である。調査区の大部分では、本層までを重機で掘削している。確認しえた範囲では、層厚は最大で55cmであった。

第4aii層：調査区の全面で検出された水成層で、岩相は粘土質シルト～中粒砂であった。

第4bi層：調査区で部分的に検出された作土である。RK4B層に相当する。

第4bii・4biii層：主に第Ⅴ区で検出された氾濫性堆積層である。

第4ci・4cii層：調査区の全面に分布する作土層で、両層の分層が困難な場所もあった。下位の第4ciii層を削り残して形成された畦畔を検出している。

第4ciii層：調査区の全面に分布する河成層であった。作土である第4ci・4cii層は本層を母材としたものである。

以上のように、第4層は河川による堆積層と作土層の互層からなり、頻繁に洪水に見舞われながらも繰返し耕作が行われたことがわかる。

第5層：河成起源と思われる砂質シルト層だが、明瞭にラミナは確認できず、わずかに耕起された作土層と判断した。層中に飛鳥～奈良時代の須恵器・土師器・瓦などの破片を含む。また、上面では奈良時代の終わりから平安時代にかけての遺物を含む溝や不定形の凹みが検出された。RK5－6層に比定できる。

第7ai層：層厚が60cmに及ぶ古墳時代中期から飛鳥時代にかけての河川の氾濫による堆積層である。

第7aii・7aiii層：粘土～砂質粘土からなる湿地性堆積層であり、一部暗色化している。下位の第7aiv層から連続する堆積が一時緩やかになった時に形成された地層であり、部分的に離水していた可能性もある。

第7bi～7biii層：一連の水成の堆積であり、北側で粒径が粗くなる。

第7biv層：古墳時代前期末から中期にかけての地層で、作土層である。Ⅴ区で検出された。

第7bv層：盛土遺構SX704・705を構成する客土層であり、下位の第9層・第10bii層に由来するものである。盛土は大きく3層に細分することが可能である。出土遺物の大半は布留式新相の土師器が占めていたが、弥生土器など先行する時代の遺物も含まれていた。

第9層以下は基本的に河川による堆積層である。第9層の上面で溝やピットを検出したほか、第10c

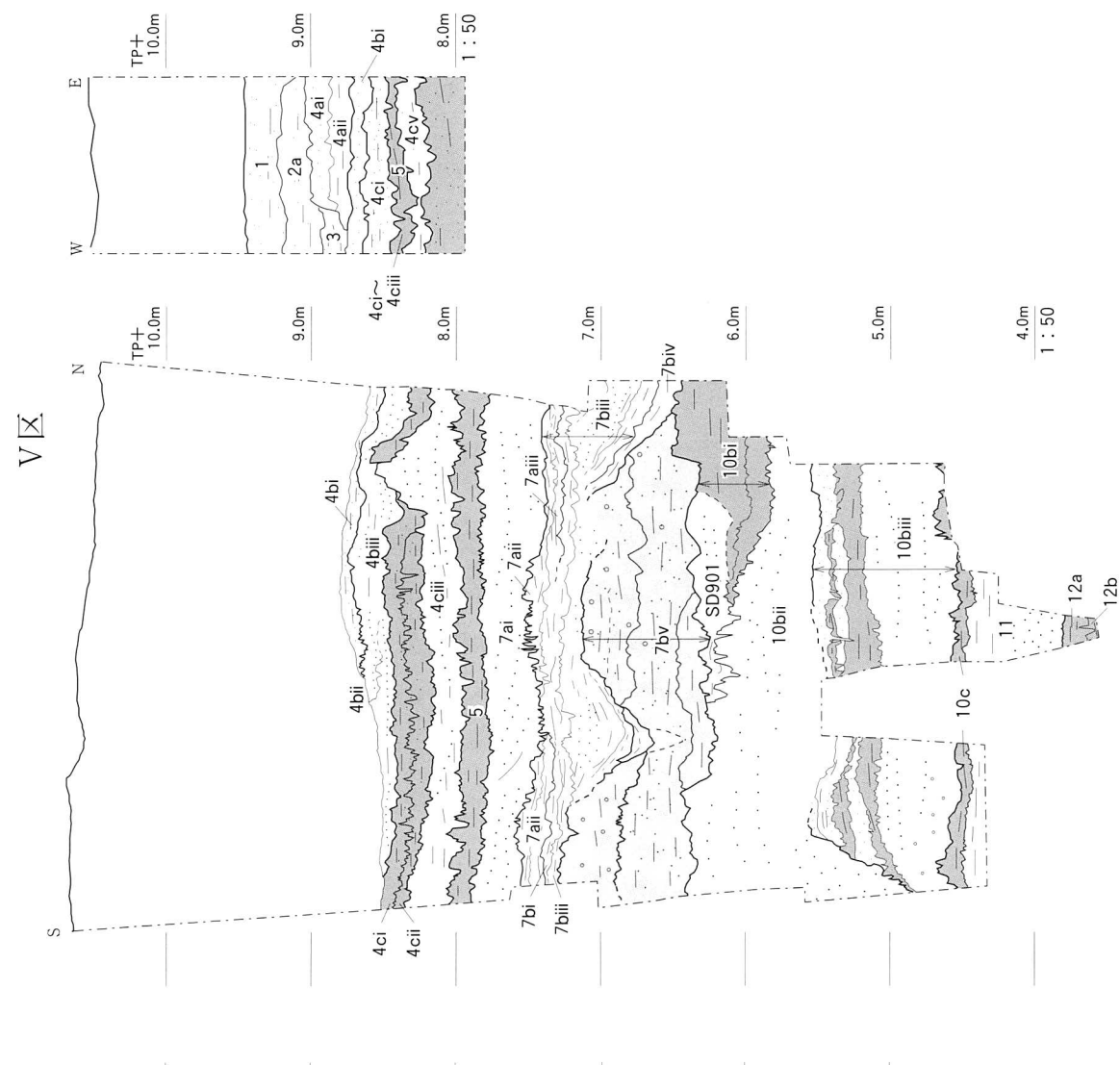
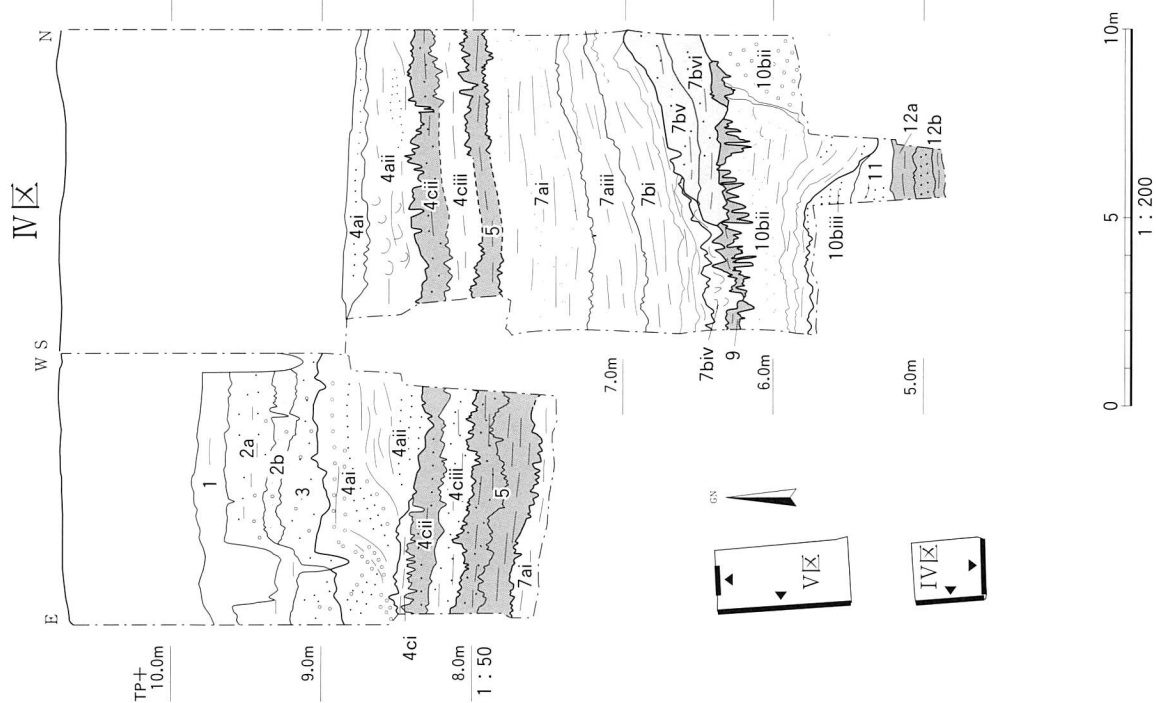


図30 南調査地IV・V区地層断面図

表7 NG02-4次層序表

層序	長原層序	六反層序	岩相	層厚(cm)	特徴	自然現象	遺構	遺物	時代
0	0	0		120	盛土				江戸時代
1	1	1	中粒砂混りオリブ黒色細粒砂	30	作土		▼溝・耕作溝		
2a	2	2	中粒砂混り黄灰色シルト	≦40	作土		▼溝・耕作溝		
2b	2	2	黄灰色砂質シルト～中粒砂	≦15	作土		▼耕作溝		
3	3?	3?	小礫混り暗灰黄色シルト質細～中粒砂	≦30	作土		▼溝・耕作溝		
4ai	4A	4A	黄褐色シルト質細～粗粒砂	35～55	氾濫性堆積層				鎌倉時代
4aü	4A	4A	黄褐～オリブ灰色中粒砂～粘土質シルト	≦35			←SX401、踏込み		
4bi	4B	4B	黄灰色シルト質細粒砂～粘土質シルト	10	作土			瓦器	
4bü	4B	4B	灰色シルト	10	氾濫性堆積層				
4büü	4B	4B	暗オリブ灰色中粒砂～シルト	10			←SR4c01		
4ci	4C	4C	暗オリブ灰色中粒砂～粘土質シルト	≦15	作土(淘汰不良)				平安時代
4cü	4C	4C	黄灰色シルト～細粒砂	≦20	作土?				
4cüü	4C	4C	暗緑灰色中粒砂～暗灰色シルト質粘土	25	氾濫性堆積層		←SK501・SD501	「て」の字皿	
5	5-6A	5-6	中粒砂混り暗緑灰砂質シルト	≦30	(作土)、河成起源			瓦・土師器・須恵器	奈良時代
7ai	7A	7A	暗緑灰～緑灰色砂質粘土～極細粒砂	40	氾濫性堆積層				古墳時代
7aü	7A	7A	オリブ灰砂質粘土	≦15	湿地性堆積層				
7aüü	7A	7A	オリブ灰色シルト質粘土	≦40					
7bi	7A	7A	オリブ黒色粘土	≦10	湿地性堆積層				
7bü	7A	7A	粗粒砂混りオリブ灰色シ砂質シルト	≦10					
7büü	7A	7A	オリブ灰色極細粒～粗粒砂	≦50		植物遺体			
7biv	7Bü	7B～8A	細粒砂混り暗緑灰色粘土質シルト～粘土	20	作土				
7bv	7Bü	7B～8A	砂混り灰～オリブ黒色粘土質シルト	≦70	盛土		←SX704・705 SD703～705 ←SK901 SD901～903	土師器(布留式新相)	
9	9A～7Büü	10A～8B	極細粒砂混り暗オリブ灰色砂質シルト	≦20	氾濫性堆積層(最上部土壌化)			弥生土器	
10bi	9B	10B	暗オリブ灰色極細粒砂	≦40	沼沢湿地性堆積層				弥生時代
10bü	9B	10B	灰白～暗オリブ灰色細粒砂～礫	≦100	氾濫性堆積層				
10büü	9B	10B	灰色粗粒砂～オリブ黒色シルト質粘土(互層)	≦40	氾濫性堆積層	植物遺体	←踏込み (隅路類・鳥)		
10c	9C	10C	黒色粘土質シルト質粘土	50	沼沢湿地性堆積層				
11	10・11	11	暗オリブ灰色中粒砂～中礫	50	氾濫性堆積層				
12a	12A	12A	オリブ黒色粘土質シルト	≦20	沼沢湿地性堆積層	植物遺体	←踏込み (ヒト)	←上面検出遺構 ▼下面検出遺構	
12b			オリブ黒色シルト質粘土	10≦	上部暗色化				

層と第12a層の上面で人や動物の踏込みを観察した。しかし、遺物はいずれの地層からも出土せず、人的な作用はあまりおよんでいないと思われる。周辺調査で観察された地層の層相と比較し、各層をRK 9～12層までに対応させた。

2) 弥生時代～古墳時代前期の遺構(図31、図版5)

V区の南部では、第9層の上面で溝・土壌状の凹み・ピットを検出した。

SD902・903は幅が約0.3mで、溝底がわずかに残るだけであった。SD902・903を切るSD901は幅が約0.8m、深さが約0.2mで、粗粒砂を多く含むシルトの偽礫で埋戻されている。これらの溝は軸の方向は異なるが、いずれも南東から北西に向きをとる。

SK901は南北に長い不定形の凹みで、中央に楕円形の一段下がった部分がある。楕円形の部分の埋土は水成粘土で、凹み内は滞水していたと考えられる。SK901の上位はSD901の埋土と同様の土で埋戻されている。南壁の近くでは、直径が約0.3mのピットを数基(SP901ほか)検出した。埋土はSD901・SK901と共通しており、同時期に機能・廃絶したと考えられる。しかし、これらの遺構からは遺物が出土せず、詳細な時期は不明である。調査地の北西で行われたNG00-6次調査では、第9層と一連と思われる古土壌の上面で、埋土や規模が類似した溝が見つかっており、また、上層から弥生

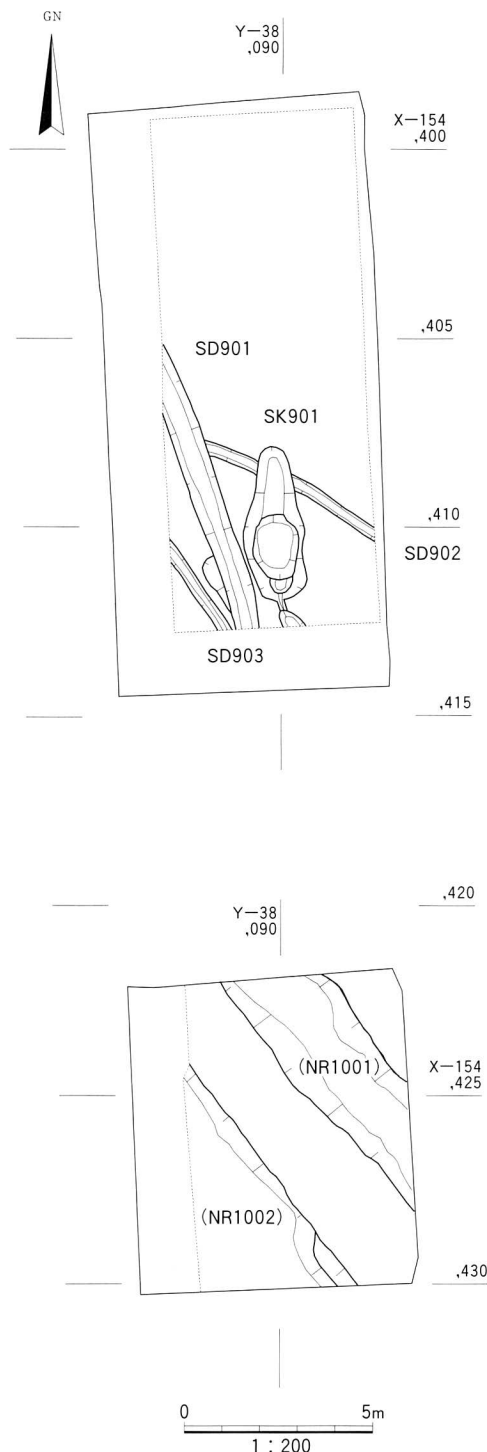


図31 弥生時代の遺構平面図

時代中期から古墳時代前期にかけての遺物が出土したことから、この時期の遺構である可能性は高い。

またⅣ区では第10b層内で南東－北西方向にかけての自然流路を2条検出した。NR1001は深さ0.25mの浅い流路で埋土は粗粒砂からなり、激しい水流であったことがわかる。また、NR1002もほぼ同規模の流路であるが、埋土はシルトであり後背湿地性の堆積を示す。これらは一連の流れであり、埋土の違いは堆積過程の差を示すものと思われる。

この2条の流路に挟まれた部分がやや高くなっており、これは第10b層段階の流路廃絶による自然堤防の最高所に位置する。自然堤防の方向は南東－北西方向であり、同じ方位の流路と自然堤防がNG00－6次調査でも確認されている。自然堤防を形成した流路はⅣ区北部～Ⅴ区南部にかけて確認されており、埋土は粗粒砂～細礫とかなり粗く、激しい水流があったものと思われる。NR1001はこの流路の最後の流れに相当するものであろう。

3) 古墳時代中期の遺構と遺物

i) 盛土遺構(図32・33、表8、図版6)

第7biii層を除去したところ、盛土遺構とその上面に築かれた溝を検出した。同様の盛土遺構は過去にも、調査区の北西で行われたNG98－19・98－20・00－6次調査で見つっている。今回の盛土遺構はこれらの盛土遺構と上面のレベルが同じであり、構築方法や用いられた土の質も同じであるため、一連の計画のもとにつくられた可能性が高いと思われる。そのため、今回検出された盛土遺構と溝については、すでに検出されている遺構番号に続けて番号し、混乱を避けることにしたい。

SX704はⅣ・Ⅴ区にまたがり、幅が6m以上、高さが約0.6mである。3段階にわたって盛土され、成形されている。盛土の規模や上面に溝を設けている点や、RK10B層により形成された自然堤防の高まりを利用している点などは、NG00－6次調査で検出されたSX702・703と同じであり、一連のものである可能性が極めて高い(註1)。

SX705は東西に向きをとるが、調査区外にその大半が及んでおり、全体の形状や規模は不明である。

SX704・705の盛土内とその周辺からは、布留式新相を中心とした土師器が多数出土した。特

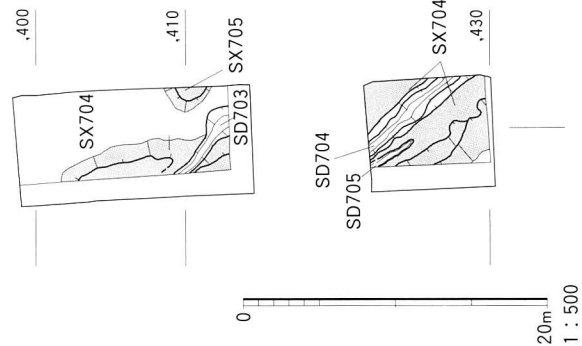
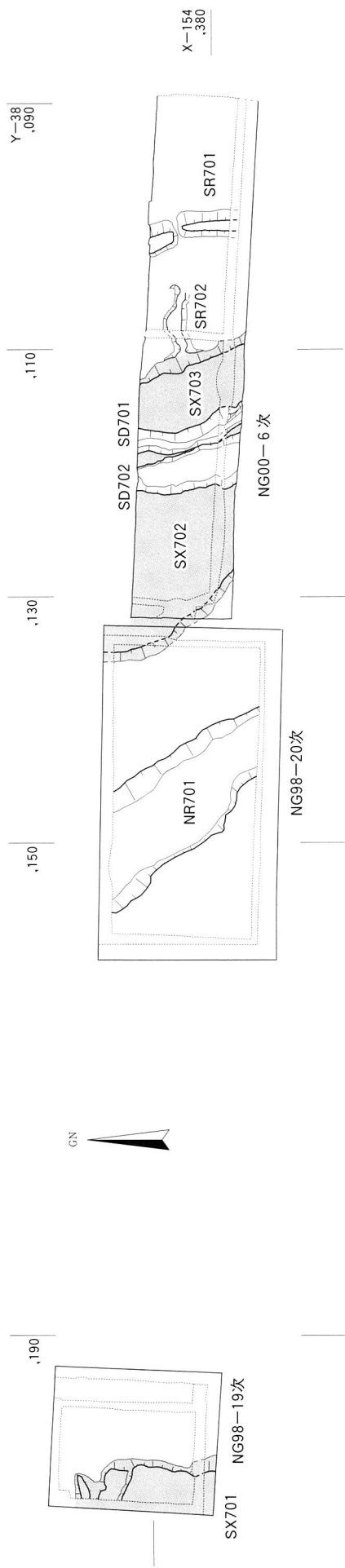


表 8 古墳時代盛土遺構一覧

遺構番号	規模[東西幅×高(m)]	調査回数	出典
SX701	(4.5以上)×0.4	NG98-19	[大阪市文化財協会2001]
SX702	11×0.3	NG98-20・00-6	[大阪市文化財協会2001・2003a]
SX703	6×0.5	NG00-6	[大阪市文化財協会2003a]
SX704	約11×0.6	NG02-4	本書
SX705	(2以上)×0.2	NG02-4	本書
SD701	1.8×0.4	NG00-6	[大阪市文化財協会2003a]
SD702	3.5×0.2	NG00-6	[大阪市文化財協会2003a]
SD703	0.7×0.04	NG02-4	本書
SD704	0.5×0.05	NG02-4	本書
SD705	2.0×0.4	NG02-4	本書

図32 周辺調査地検出の古墳時代盛土遺構

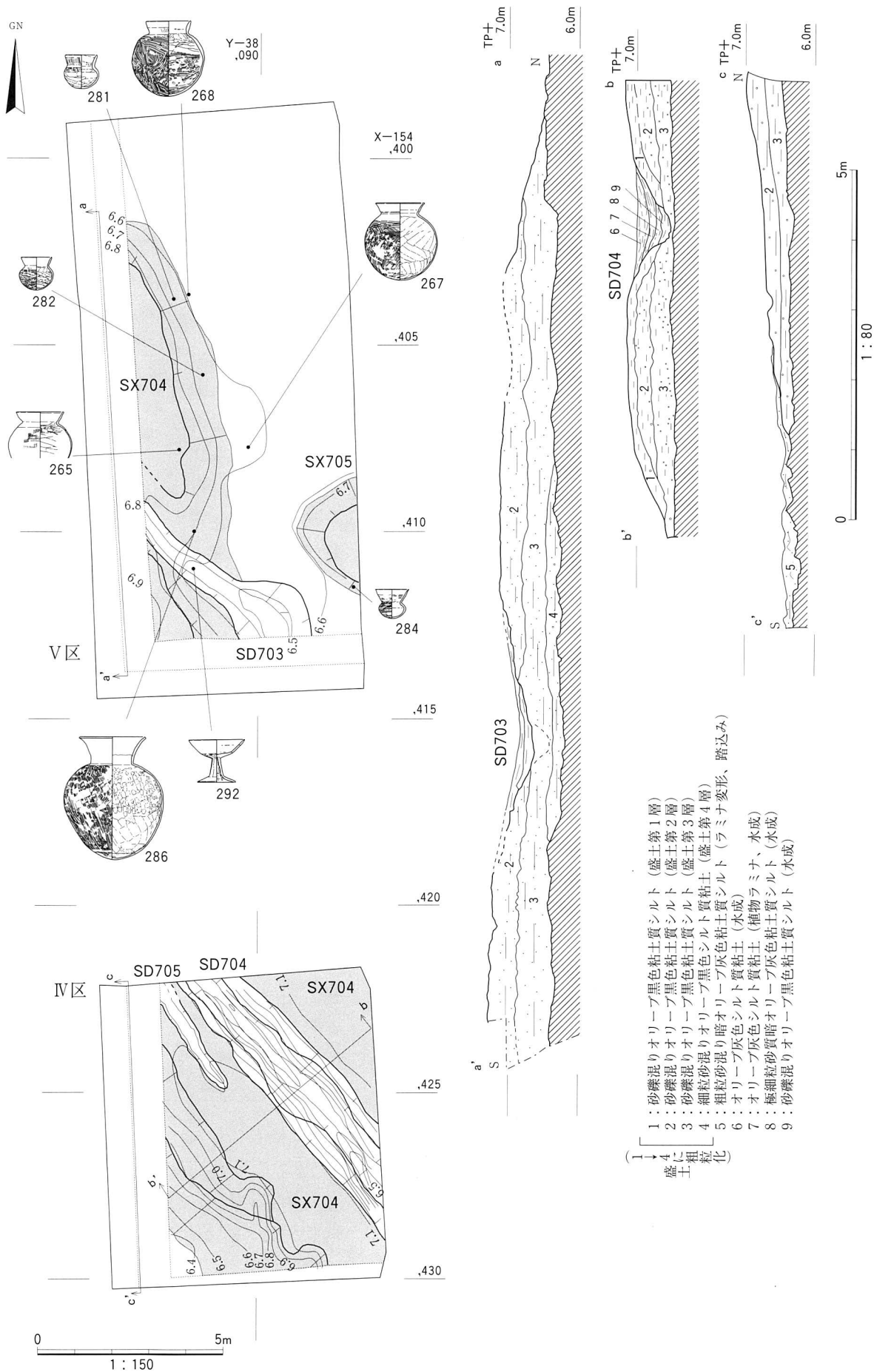


図33 SX704・705平・断面図

に、SX704の第2層と第3層の間と東裾には、完形に近い土器が点々と埋まっていた(写真10)。このような状況はNG98-20・00-6次調査地のSX702の西裾での土器出土状況と極めて似ている。

ii) 盛土遺構出土の遺物(図34・35、図版15・16)

SX704出土遺物：Ⅳ区では弥生土器甕247～251・253、壺254・255、土師器甕256・257・259、壺258、製塩土器260が出土した(図34)。247～251は畿内第Ⅴ様式甕である。247は口径15.3cm、残存高17.2cmあり、口縁端部はナデにより外側に面をもつ。外面には右上がりの平行タタキが施される。248～251は底部で、内面に反時計回りにクモの巣状のハケを施している。253はタタキメがなく、底部が薄いことから弥生時代中期の甕と思われる。254は畿内第Ⅴ様式の広口壺の口縁部、255は底部である。255の内外面にはヘラミガキが施される。257は口縁端部が内側に肥厚する球胴の甕である。258は二重口縁壺である。260は薄手で、口縁端部にユビオサエが見られる。以上の遺物の中で盛土の下部から出土したのは248・253・256・257である。

Ⅴ区では弥生土器壺263、土師器甕264～273、小型丸底土器280～283、壺286、高杯290～292が出土した(図34・35)。263は畿内第Ⅴ様式の壺の底部である。264は外面に粗い平行タタキを施した後、縦方向のヘラケズリで仕上げられている。内面もヘラケズリで仕上げられている。口縁部に接合痕が残る。265～273の口縁部と口縁端部について、外傾して伸び、端部が上方に面をもつ265・266・273、端部が上方に面をもち、内側につまみ出される267・271・272、端部が内傾して、面をもつ269、直立気味に伸び、端部が丸い268、外反する270に分けられる。265は肩部の1個所に刺突による点が施されており、266は波状の沈線が1条施されているが、両端とも途中で止まり、肩部全体に巡っていない。267は完形で、口径14.0cm、器高22.1cm、体部最大径20.7cmある。体部外面はタテハケの後で肩部にヨコハケが施され、内面は頸部のやや下までヘラケズリであり、肩部から最大径付近の器壁は3mmと非常に薄い。一方、268は内面は最大径より少し上にヘラケズリが施される程度であり、肩部のもっとも厚い部分で器壁の厚さが8mmと厚い。以上の甕について、268や270は布留式新相でも新しい段階に属すると思われる。

281は口縁部と体部にタテハケを施した後、下半にユビナデが施され、内面もユビナデで仕上げられる。282については、内面にユビナデが施された後、下半にヘラケズリが施される。283は内面全体がヘラケズリである。286は丸底で、ラップ状に口縁が広がる広口壺である。口縁端部はていねいにナデを施して面をもつ。体部外面はタテハケで、内面はヘラケズリの後、上半にユビオサエが残る。290は高杯の脚部で、外面は縦方向のヘラミガキの後、横方向に暗文状にヘラミガキが施され、内面にはシボリメが残る。292は杯底部外面と脚部外面にヘラケズリを施す。

SX705出土遺物：盛土直下からは小型丸底土器284、下層から土師器甕274・275、上層から土師器甕276が出土した(図34・35)。274は受口



写真10 甕268出土状況

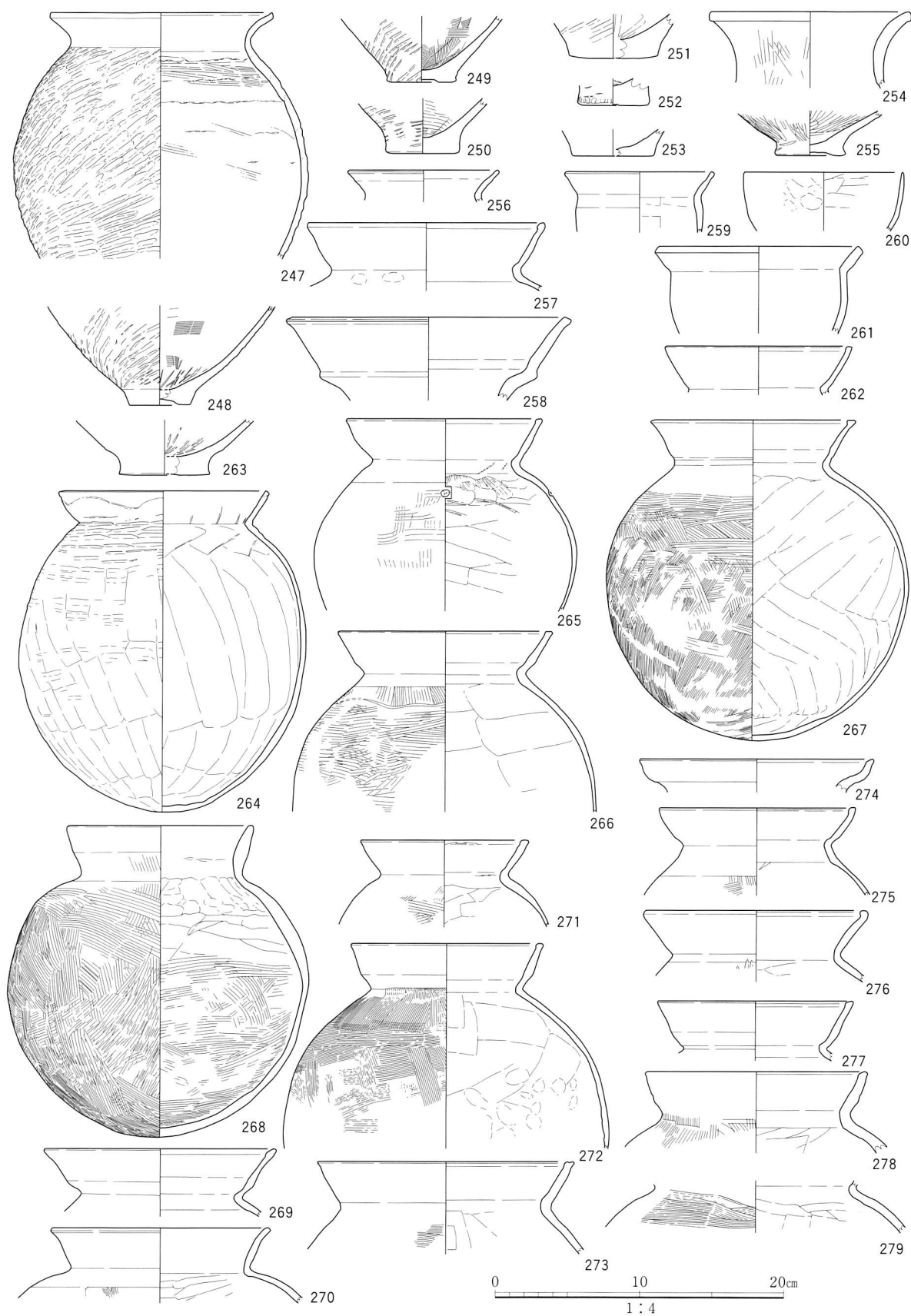


図34 SX704・705およびSD703・704出土遺物(1)

SX704Ⅳ区(下層:248・253・256・257、上層:247・249~251・254・255・258~260)、SX704Ⅴ区(下層:263、上層:264~273)、SX705(下層:274・275、上層:276)、SD703(277~279)、SD704(252・261・262)

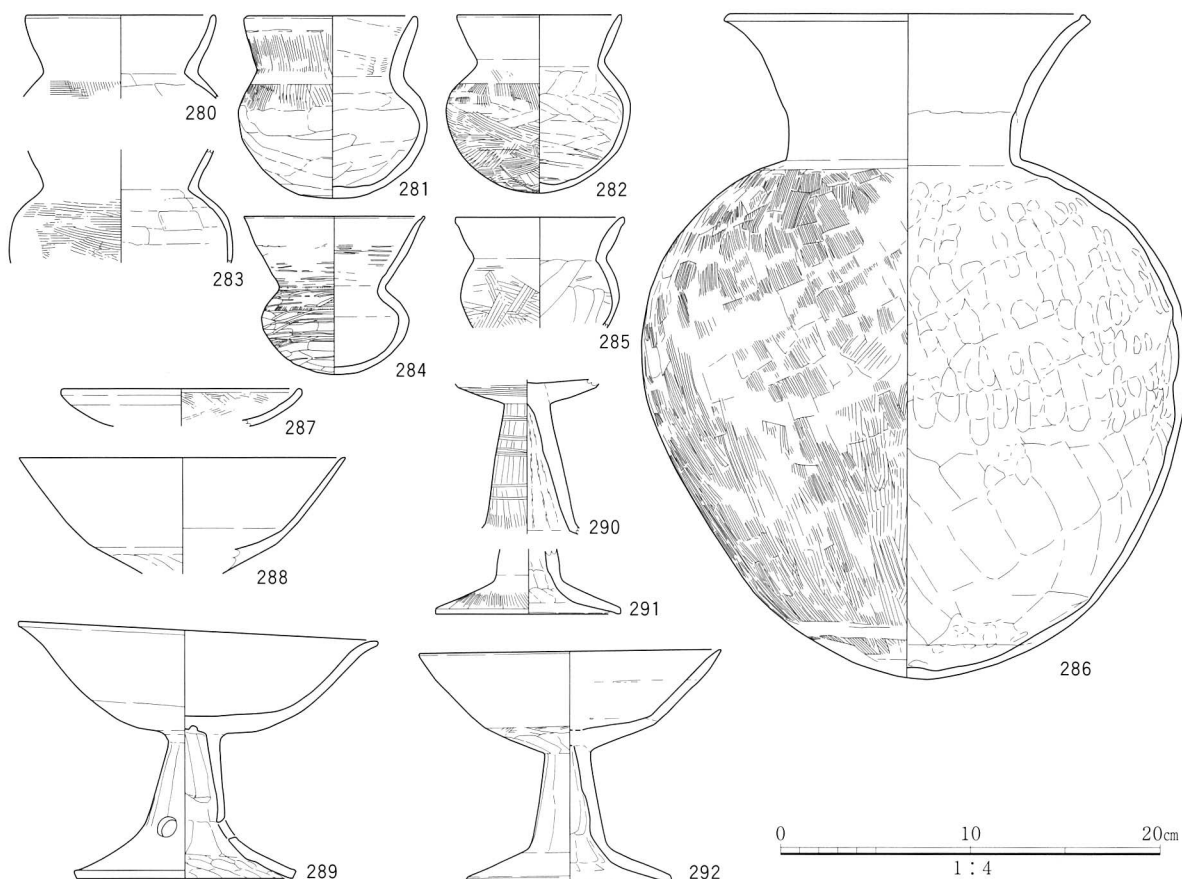


図35 SX704・705およびSD703・704出土遺物(2)

SX704V区(上層:280~283・286・290~292)、SX705(下層:284)、SD703(285・287~289)

状に内湾する口縁部である。275は口縁部が内湾気味に伸び、口縁端部は上方に面をもつ。284は口径9.6cm、器高8.6cm、頸部径5.6cm、体部最大径7.9cmある。体部外面はヘラケズリの後に横方向のヘラミガキが施される。

iii) 溝(図33、図版7)

SD703はV区南部で検出された幅約0.7~1.5mの溝で、SD704・705にほぼ平行する。SX704から東側の作土が分布する方向に下っていることから、水田への給水を目的に掘削されたものと考えられることができる。

SD704はIV区で検出した南東から北西へ向う溝で、幅は2.0m、深さは0.5mである。埋土は水成のシルトであり、徐々に埋没していったようである。規模・方位・埋土のようすからNG00-6次調査で検出されたSD701と一連のものと思われる。

SD705はSD704の西側に平行する幅約0.5mの溝である。幅・深さともに、SD704と比べてはるかに小さく、給排水や土地の区画などを目的としたものとは考えにくい。

iv) 溝出土の遺物(図34・35、図版15)

SD703からは土師器甕277~279、小型丸底土器285、小型器台287、高杯288・289が出土した(図34・35)。289は口縁端部がやや外反し、脚部には3方向に円形のスカシがある。

SD704からは弥生土器甕252、土師器甕261・262が出土した(図34)。252は畿内第V様式の甕であ



写真11 SX704地層断面

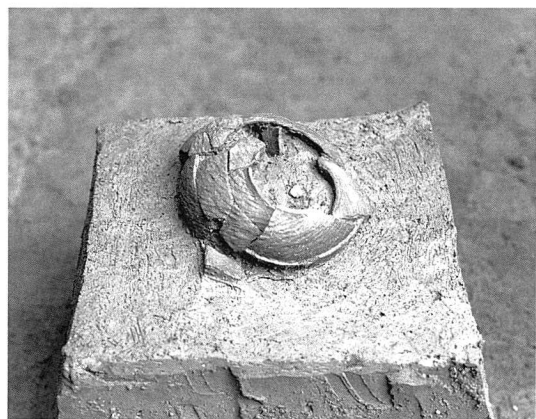


写真12 甕247出土状況

る。261は頸部が「く」の字状に折れる。

v) 盛土遺構に関する知見

今回検出された盛土遺構は、過去に検出されたものと同様に、下層の砂礫層を主体とする土を盛り上げて作られたものであり、大きく3層に分けることができた。また、盛土が水田に接して築かれていること、盛土上面に溝を設けていることなど、類似する点が多々あった。出土遺物と遺構など今回得られた知見をまとめておくことにしたい。

今回検出されたSX704・705は第9層の上に築かれており、土は多量に砂礫を含むことから第9層や第10bii層に由来するものと思われる(写真11)。盛土内に弥生土器が包含され、さらに247のように1個所でつぶれたような状態で出土した状況は、土採りの際に混入した下層に由来する土器をそのまま盛り上げていたことを示すものといえるだろう(写真12)。また、盛土を行なった後に、上面に溝を掘削し、その排土をさらに盛り上げたために、盛土の下層に包含されていた土器が混入していた事例も認められている。このように盛土は長期にわたって徐々に高さを増していったものと考えられ、周囲の耕作と関連を持ちながら改変が加え続けられたものと考えることができる。今回報告した遺物の年代観は、Ⅳ区に多く見られる畿内第Ⅴ様式の段階を除けば、いずれも布留式新相に位置づけられるものである。ただ、

この段階でも265・266・284や286のように明らかに古い様相を残す一群とそうでない一群に分かれる。古い様相を示す土器が盛土の直下や、あるいは盛土の下層から出土するものであることから、これらの土器群は1回ではなく、複数の異なる時期のものが重なっていたものと思われ、盛土構築の時間幅を示すものと捉えることができよう。

また、過去の盛土の調査においては盛土内から破碎された土器や勾玉・白玉が出土していた。今回の調査地の北西に位置するNG00-6次調査では、盛土の途中で、柱穴や土壙が検出され、炭や焼土とともに火を受けた高杯や小型丸底壺が多量に出土した。こうした状況から考えると、盛土の構築途中で作業の中断があり、祭祀的な行為があったのではないかと推測された。今回の盛土では滑石製品の出土や炭、焼土のかたまった場所は検出されなかった。また、明瞭に破碎されたり、火を受けた土器も見つかっていない。しかし、図33に示したように、ほぼ完形に復元可能な土器が点々と見つかるな

ど、NG00－6次調査検出の盛土と極めて似通った状況が確認できたことは注目される。

盛土の構築目的については、SX704・SD704がそれぞれSX702・703とSD701と連続するものである可能性が出てきたため、南東－北西方向に長く続き、上面に水路を設ける構築物であることが明らかとなった。周囲に広がる水田と合わせて考えるならば、灌漑と密接に係わるものであることがより明瞭となったのである。

4) 奈良～平安時代前期の遺構と遺物(図36・37、写真13、図版7)

第5層上面検出遺構である。SK501はⅤ区北部で見つかった東西方向に広がる不定形の土壌である。埋土の観察の結果、水流の痕跡が確認され、西から流れ込む水をうけて南東へと流れ出ていたことがわかった。

SD501はⅤ区南部で検出された東西方向の溝で、幅が約0.5m、深さが0.1m程度である。奈良時代の終わりから平安時代の初めにかけての須恵器や土師器・瓦が出土した。これらの遺構は調査地から北に広がる六反自然堤防上に築かれた古代集落の一端を示すものと思われる。凹面に布目が残る平瓦310が出土した。

遺構が築かれた第5層からは土師器甕297、須恵器杯298、杯B299・300、平瓦305・306が出土した。305は凸面に格子タタキが施される。なお、より下位の第7ai層からは平瓦307と鉄製品319が出土した。307は凸面に縄目、凹面に布目が残る。319は残存長8.5cm、幅0.8cm、厚さ0.3cmである。透過X線写真による観察を行なったが、錆化が進んでおり状態は良くなかった。形状から判断して鉈と思われる(写真13)。

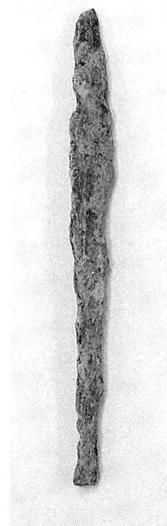


写真13 鉈319

5) 平安時代中期の遺構と遺物(図36・37、図版7)

第4ci層上面検出遺構である。Ⅴ区北部で第4cii層を削り出してつくられた東西方向のSR4c01を検出した。規模は上端幅が約1.8mで、残存高は約0.1mである。周囲には第4ci・4cii層の作土が広がっていることから、SR4c01は大畦畔あるいは鳥畠と考えられる。

畦畔が築かれた第4ciii層からは凸面に縄目、凹面に布目が残る平瓦309が出土した。また、第4ciii層を母材とした作土である第4cii層からは、土師器杯A295が出土した。内面に暗文が施されず、口縁端部が短く反り、内側が肥厚する。平城宮土器Ⅲに該当すると思われる。また、第4cii～5層出土遺物としては、土師器碗293、皿294・296、須恵器杯301、耳の部分302、製塩土器303・304、平瓦308がある。294はいわゆる「て」の字状口縁で、平安時代Ⅲ期古段階に属する。301は平底で、ヘラ切り後、調整が施されていない。外面にハケメのよ

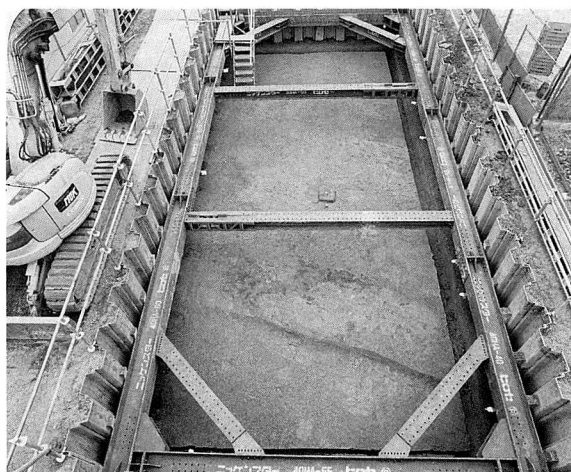


写真14 SX4b01完掘状況(北から)

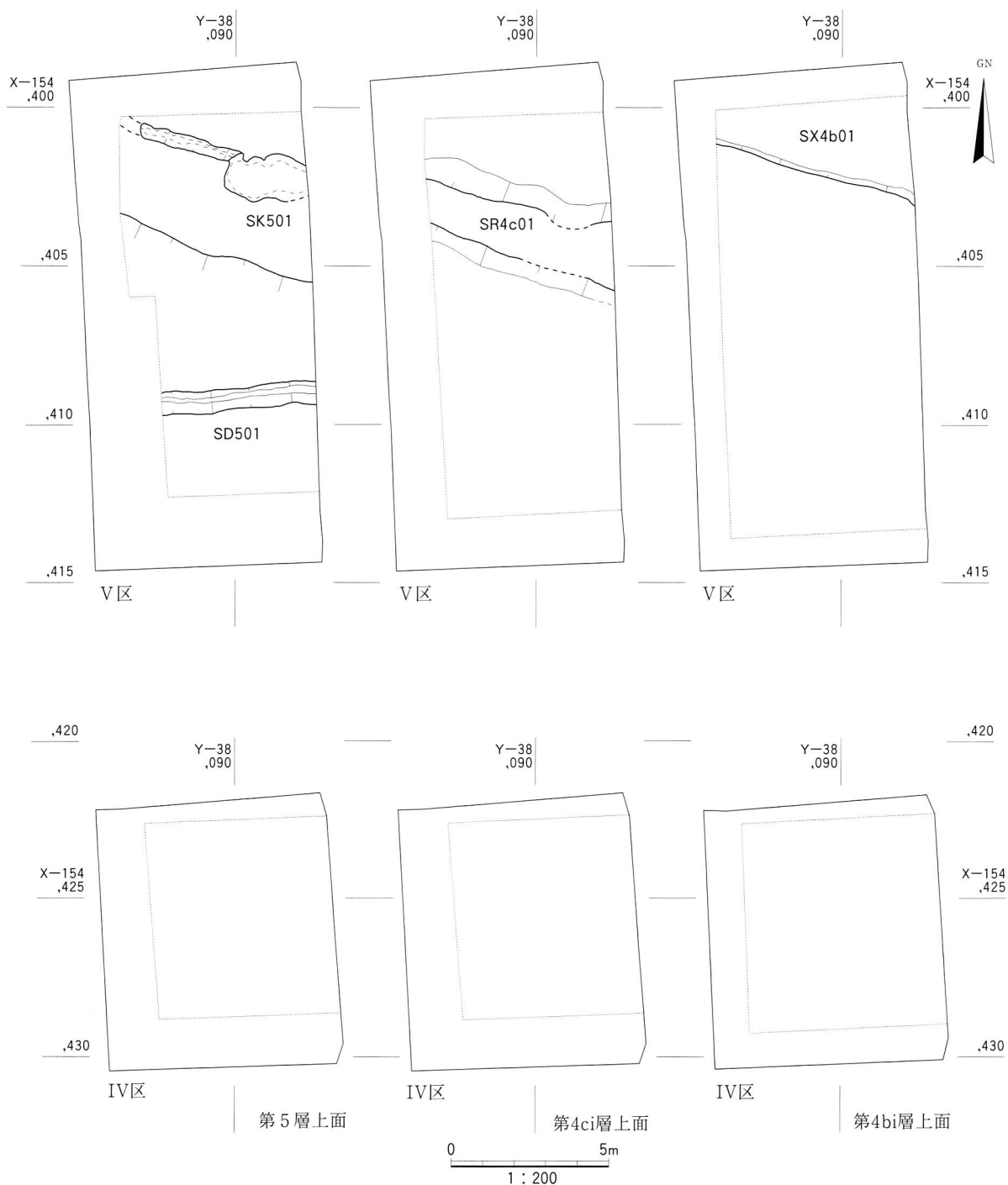


図36 平安～室町時代の遺構平面図

うなものが見られる。302は壺の耳になるのではと思われる。

水田を廃絶させる水成層である第4bii層からは、土師器皿311、瓦器碗312～314が出土した。311は口縁部が外湾する。312は内外面ともヘラミガキが施されている。これらの瓦器碗は12世紀中頃のものと思われ、水田の下限を示す遺物である。

6) 鎌倉時代の遺構と遺物(図36・37、図版16)

第4bi層上面検出遺構である。V区北部で、南から北に1段下がる落ち込みSX4b01を検出した(写

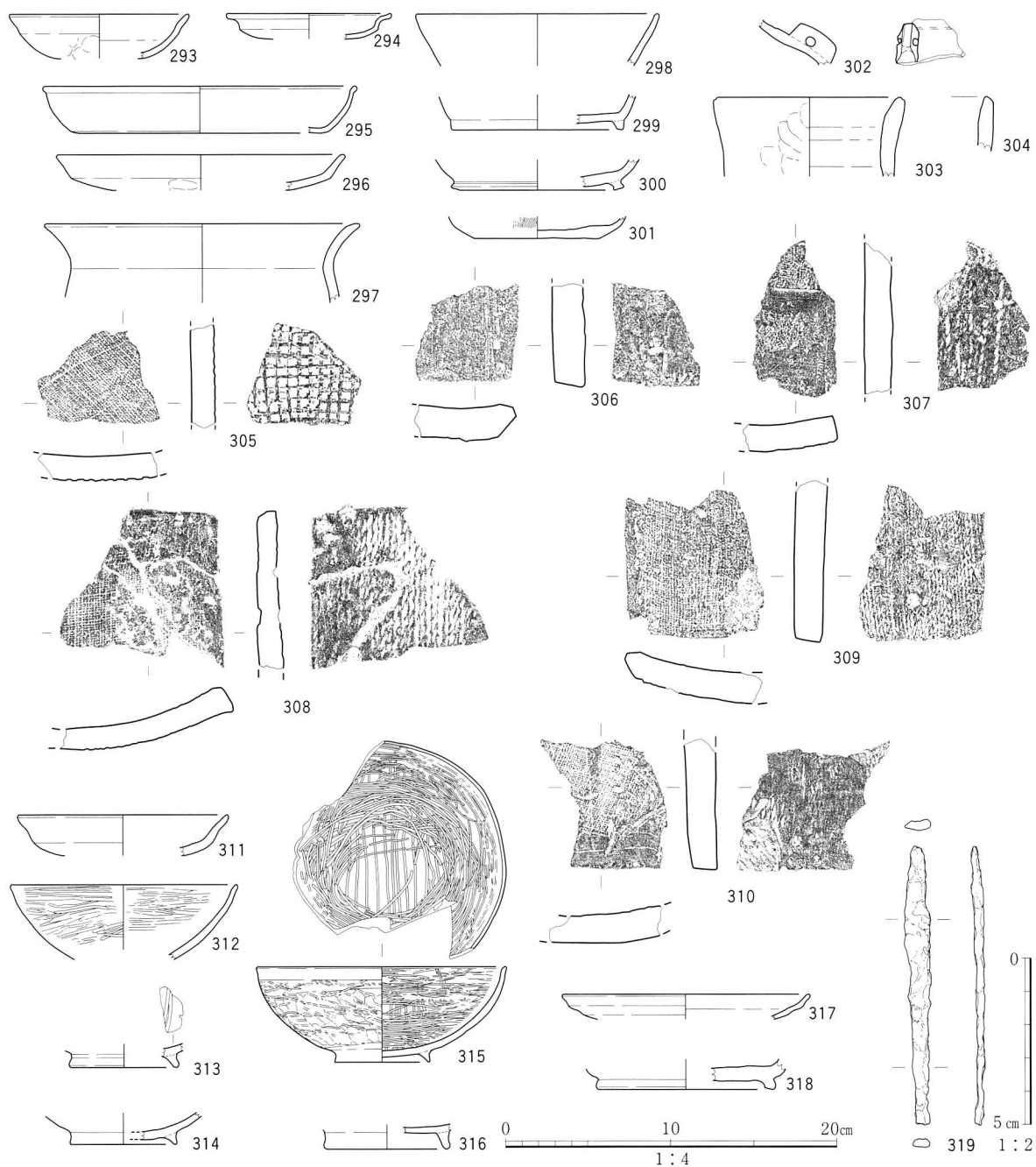


図37 各層・遺構出土遺物

7ai層(307・319)、5層(297～300・305・306)、SD501(310)、4ciii層(309)、4cii層(295)、
4cii～5層(293・294・296・301～304・308)、4bii層(311～314)、4ai層(316)、4a層(315)、2～3層(317・318)

真14)。ただし、この落込みは、下位で検出されたSR4c01の北肩にほぼ一致することから、その名残か、あるいは継続して築かれた畦の可能性も考える必要があるだろう。そのほか、第4b層の上面では踏込みが見られた。

第4bi層を覆う第4a層からは瓦器315が出土した。外面のヘラミガキは粗で、見込みには平行線のヘラミガキが施されている。高台の断面は三角形で、12世紀中頃のものと思われる。第4ai層からは黒色土器碗316が出土した。

7) 室町時代以降の遺構と遺物(図37)

第1～3層の下面で耕作溝のほか、Ⅳ区南壁で南北方向の溝を断面で観察した。第3層下面のものが幅0.4m、第2a層下面のものが幅0.2m、第1層下面のものが幅1.5mと、時期によって溝の規模は異なるが、ほぼ同じ位置を踏襲していることから、区画溝の可能性が高いと思われる。これらの耕土からは土師器皿317・須恵器杯B318が出土した。

註)

(1) 今回報告する盛土遺構については、発掘調査終了後に遺構・遺物の簡単な紹介を行なっている[辻美紀2003]。

その際に公表された盛土図面は本報告書掲載のものとは過去の調査の盛土遺構との位置関係で違いがある。

これは国土平面直角座標(第Ⅵ系)から世界測地系への座標変換時のミスによるものである。ここに訂正を行いたい。

第Ⅲ章 調査成果の分析と検討

第1節 長原遺跡NG00-30次調査で出土した木製品の樹種

パリオ・サーヴェイ株式会社 高橋 敦

1)はじめに

長原遺跡は旧石器時代から江戸時代までの遺構が検出されている。NG00-30次調査地は東北地区の東端部に位置しており、奈良時代・平安時代・鎌倉時代の遺構が検出され、木製品等の遺物が出土している。東部地区ではこれまでに東北地区NG01-14で古墳時代後期～飛鳥時代の木製品(曲物・櫛・斎串・火鑽板等)について樹種同定を行っており、板状の製品にヒノキが多く利用され、櫛にツゲやヤブツバキ、木錘にアカガシ亜属が確認されている。

本報告では、古墳時代中期・平安時代・鎌倉時代の地層・遺構から出土した木製品の樹種同定を行い、木材利用に関する資料を得る。

2)試料

試料は鎌倉時代のNR4c01から出土した木製品3点、平安時代のSX4c01から出土した木製品12点、古墳時代中期の第7bii層から出土した木製品1点の合計16点である。このうち、未実測R554の不明材は、肉眼および実体顕微鏡観察で萱材のように見える。

3)分析方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡および落射蛍光顕微鏡を用いて組織配列等を観察し、その特徴から種類を同定する。

4)結果(表9、図版17～20)

樹種同定結果を表9に示す。杭15(143)は道管を有することから広葉樹材であり、その配列から環孔材と考えられる。放射組織の形状はニレ属等によく似ているが、試料中に年輪界が含まれていないことや保存状態が悪いために種類の同定には至らなかった。また、未実測R554は組織の特徴からイネ科の稈に似ている。放射組織が認められないことから、少なくとも樹木ではないが、ほとんどの組織が潰れているために特徴が把握できず、種類は不明である。その他の試料は針葉樹5種類(マツ属複維管束亜属・モミ属・スギ・ヒノキ・ヒノキ科)と広葉樹5種類(ヤナギ属・エノキ属・ヤマグワ・

クスノキ科・ネムノキ近似種)に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属(*Pinus subgen. Diploxylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管を主とし、晩材部付近に樹脂道が認められる。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。放射組織は、仮道管・柔細胞・樹脂道・エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となり、1分野に1個。放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1－15細胞高。

・モミ属(*Abies*) マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成され、早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅう状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1－4個。放射組織は単列、1－20細胞高。

・スギ(*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。年輪界をまたぐ組織の観察ができなかったが、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2－4個。放射組織は単列、1－15細胞高。

・ヒノキ(*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1－3個。放射組織は単列、1－15細胞高。

表9 樹種同定結果

掲載番号	種類	出土層位・遺構	時期	樹種	掲載図
7	板状木製品	第7bii層	古墳時代中期	モミ属	7
138	杭1	SX4c01	平安時代	ヤマグワ	20
139	杭2	SX4c01	平安時代	ヤナギ属	20
140	杭3	SX4c01	平安時代	ヒノキ科	20
141	杭10	SX4c01	平安時代	ネムノキ近似種	20
142	杭11	SX4c01	平安時代	ヤナギ属	20
143	杭15	SX4c01	平安時代	広葉樹(環孔材)	20
144	杭16	SX4c01	平安時代	エノキ属	20
146	杭18	SX4c01	平安時代	エノキ属	20
147	杭19	SX4c01	平安時代	ヤナギ属	20
145	杭17	SX4c01	平安時代	ヒノキ	20
R554 未実測	不明材	SX4c01	平安時代	不明	18上段
165	建築部材?	SX4c01	平安時代	クスノキ科	21
240	曲物底板	NR4c01	鎌倉時代	ヒノキ	25
241	板状木製品	NR4c01	鎌倉時代	スギ	25
242	棒状木製品	NR4c01	鎌倉時代	マツ属複維管束亜属	25

胞高。

・ヒノキ科(*Cupressaceae*)

上記ヒノキによく似ており、ヒノキの可能性はある。しかし、全体的に保存状態が悪く、分野壁孔の観察ができなかったため、組織がヒノキに類似する同属のサワラやヒノキ科の別属の可能性もあり、ヒノキ科とした。

・ヤナギ属(*Salix*) ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または2-3個が複合して年輪全体にはほぼ一様に散在し、年輪界付近でやや管径を減少させる。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1-15細胞高。

・エノキ属(*Celtis*) ニレ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-8細胞幅、1-30細胞高で鞘細胞が認められる。

・ヤマグワ(*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は1-5列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合して接線・斜方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-40細胞高で、しばしば結晶を含む。

・クスノキ科(*Lauraceae*)

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2-3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が認められる。

クスノキ科のうち、道管が大径となるクスノキを除くいずれかであるが、いずれも類似していることや試料の保存状態が悪いことから、種類の同定には至らなかった。

・ネムノキ近似種(cf. *Albizia julibrissin*) マメ科ネムノキ属

環孔材であるが、早材部がわずかに含まれるのみであり、孔圏部の列数は不明。孔圏外の道管は緩やかに管径を減じ、単独または2-3個が放射方向・塊状に複合して配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1-3細胞幅、1-20細胞高。早材部の組織が観察できないことや、全体的に保存状態が悪く晩材部の組織の観察も十分ではないため近似種とした。

5) 考察

樹種同定を行った木製品は、古墳時代中期の板状木製品・平安時代の杭材・建築部材?・不明木材、鎌倉時代の板状木製品・曲物底板・棒状木製品である。

古墳時代中期の板状木製品は、針葉樹のモミ属であった。モミ属は木理が通直で割裂性が高く、加工は容易である。また、比較的大径木になるため、大材も得やすく、大型の部材にも使用可能である。

本地域では弥生時代から古墳時代にかけての木製品にモミ属が多く利用されており、中には柱材等大型の部材に利用されている例もある[嶋倉巳三郎1983・1984、伊東隆夫・林昭三・島地謙1984、島地・林・上田弥生1987]。当該期には花粉分析結果から気候の冷涼化に伴って後背山地でスギ・ヒノキ・コウヤマキ・モミなどの針葉樹が増加したことが指摘されており[那須孝悌1989]、木材利用の傾向とも調和的である。

平安時代の木製品はすべてSX4c01から出土しており、杭材が10点、建築部材?が1点、不明材が1点である。杭材は針葉樹のヒノキ・ヒノキ科・広葉樹のヤナギ属・エノキ属・ヤマグワ・ネムノキ近似種が確認されている。ヒノキ科については、ヒノキの可能性もあることから、少なくとも5種類の木材が杭材として利用されていたことになる。材質をみると、耐水性に優れたヒノキ、強度の高いヤマグワ、保存性の低いヤナギ属等様々な材質の木材が混在しており、材質や種類を考慮したとは考えにくい。ヤナギ属・エノキ属・ネムノキなど、河畔や自然堤防上等に生育する種類が多いことから、周辺に生育していた樹木を利用したことが推定される。また、ヒノキについては、流木や伐採した木材の枝等を利用した可能性がある。建築部材はクスノキを除くクスノキ科であるが、種類の同定には至らなかった。本地域ではタブノキ等がよく見られることから、周辺に生育していた中から木材を選択したことが推定される。不明材は地震で傾いた杭材の上から出土している。肉眼や低倍率の実体顕微鏡での観察では、萱材(イネ科)に似ている。実際に、横断面の観察では樹木に認められる放射組織が確認できず、少なくとも樹木起源ではないことは明らかである。何らかの繊維製品等に由来する可能性もあるが、詳細は不明である。

鎌倉時代の木製品はすべてNR4c01から出土しており、板状木製品がスギ、曲物底板がヒノキ、棒状木製品が複維管束亜属(ニヨウマツ類)であった。本地域では同時期の木製品の樹種に関する資料が少ないが、曲物底板にヒノキを利用する例は、地域・時代に関わらずよく見られる例であり、現在の民俗事例とも一致する[島地・伊東1988、山田昌久1993、成田壽一郎1996]。木理が通直で割裂性が高く、楔等の利用で容易に薄い板を作製することができること、耐水性や防虫性に優れた材質を有することが利用の背景に考えられる。

第2節 まとめ

今回、報告した3件の発掘調査からは、縄文時代晩期から現代にかけて、これまでの周辺の調査を補う成果を得ることができた。以下、時代毎に成果をまとめることにしたい。

1) 縄文時代晩期

RK10A層に相当する地層が、南北両調査地で暗色帯を形成していることが確認できた。NG00-30次調査では、調査の最後に設定した深掘りのトレンチで断面観察したのみであるが、TP+6.0mの水準にはほぼ平行に堆積し、上面には乾痕が確認できた。しかし、遺物はまったく出土せず、また、遺構も確認できず、人の活動の痕跡は見られなかった。これに対し、南調査地のNG02-5次調査では本層はTP+6.3mと若干、水準が高くなっている。この調査では上面に溝や土壌などが検出されている。周囲の調査でもNG98-20次・00-6次で同層準での遺構が確認されている。RK10B層による自然堤防の形成により、本層段階で人の活動が見られることになったようである。

2) 弥生時代

南調査地V区では、溝や土壌などの遺構を検出した。NG00-6次調査区でも同時期の溝が検出されており、遊離資料ではあるが、畿内第Ⅱ様式以後の土器が出土することを考えると、付近に集落があった可能性がある。

3) 古墳時代

古墳時代の調査では、南調査地Ⅳ・Ⅴ区(NG02-4次)で検出された盛土遺構が注目すべき成果である。周囲の調査ではNG98-19次調査で初めて確認されて以来、NG98-20・00-6次で相次いで同様の遺構が発見され、今回で4度目の検出となった。資料は着実に増加しているが、その構築目的を明らかにするには、なおデータ不足であることは否めない。ここでは、新たに得られた知見を紹介することにした。

98年度に最初に発見された時点では、いずれの調査も盛土の一部を検出したのみで形状や規模が不明であった。ただ、盛土の周囲には作土が分布していたこと、上面が平坦にされていたことから、耕作に関連する遺構である可能性が指摘され、水田の所々に点在する休憩場所もしくは作業場所ではないかという推定がされたのである。その後行われたNG99-19次調査は、盛土が最初に検出されたNG98-19次調査のすぐ西側に位置するにもかかわらず、盛土遺構は検出されず、同一層準での水田が検出されるにとどまった。このことから、盛土遺構は東西の規模が限定されたものであることが考えられるようになった。NG00-6次調査はNG98-20次調査に接した東隣で行われたもので、盛土の続きを確認することができた。この調査でも盛土の東側に水田が検出され、盛土が水田と密接に係ることが改めて確認されたのである。しかし、盛土の形状は平坦な部分だけでなく、かなりの傾斜

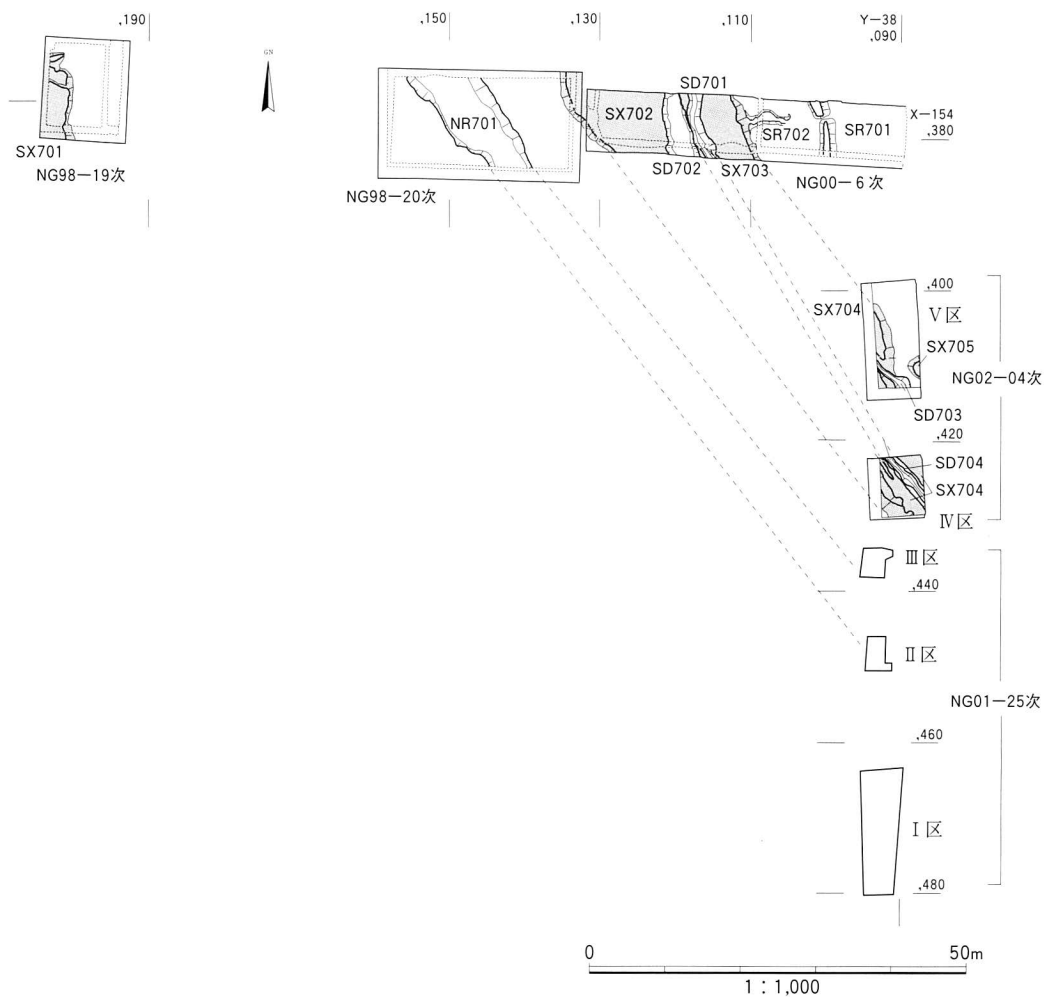


図38 盛土遺構および流路想定図

をもったものがあることや、盛土の上面に盛土と平行する水路が設けられているなどの新たな知見も得られた。これらを総合し、盛土の役割は河川を制御するための堤防であり、上面に築かれた水路は周辺の水田に給水するためのものと考え、盛土内に多量に埋められた土器は、盛土構築に際して行われた祭祀の跡を示すものと考えた。

以上が、NG02-4次調査が行われるまでの盛土に関する知見である。盛土については、ようやく東西の規模はつかめるようになったものの、南北方向の規模や形状が不明のままで、そのために役割を考えるうえでも制約があったのである。

今回検出された盛土遺構は、検出層準や規模・構築手法などこれまでに見つかった盛土と極めてよく似ている。ここで改めて盛土の位置と方位を確認すると、NG98-20・NG00-6次で検出されたSX702・703は南東-北西ラインを軸とし、その延長上にSX704・705が位置することになり、SX702上に作られた溝SD701の延長上にSD704が検出されたことになる(図38)。また、RK10B層段階の河川により形成された自然堤防の高所を利用しているという点も同じである。こうした盛土遺構の配置や、盛土の規模や構築方法を合わせて考えると、これらの盛土遺構は一連のものと考えられる。ただ、出土した土器の年代観は、SX704・705出土のものはSX701~703のものより若干古くなるものと思われる。そのため、盛土の構築は、一気にされたのではなく、かなりの長期

にわたって継続的に行われたと考えられる。

仮に、これらの盛土が一連のもので、堤防状になるとすれば、河川はどこを流れていたのであろうか。NG98-20次調査で検出されたNR701はSX702・703と平行し、南東-北西方向である。盛土が一連であるという仮定にのっとり、それに平行させると、流路の推定位置はNG01-25次調査のⅡ～Ⅲ区にあたることになる。両調査区とも非常に狭小な面積しか調査できず、古墳時代の地層まで到達していない。しかし、Ⅰ区の調査結果では、盛土を覆う層準にあたる水成層がやや粗粒化し、ラミナの傾きが南から北へ下っている状況が確認できた。またⅠ区で確認された盛土と同一層準は、途中わずかに踏込みが確認できる程度古土壌があるのみであり、厚く作土層が形成されていたSX703以東の状況とは異なるものであり、むしろNR701の両岸からSX701・702までの間の堆積に近いものである。以上のことから、Ⅱ～Ⅲ区に流路が流れていた可能性は極めて高いものと考えられる。

盛土の役割については、配置や形状からNG98-20・00-6・02-4(Ⅳ・Ⅴ区)次のものが一連のものとなる可能性が高く(SX702・703・704)、それは盛土上面に同規模の溝が掘られていることも傍証となろう。このように考えるならば、NG00-6次調査時に、この盛土が堤防であることを保留にした理由の一つである「南北方向の形状が不明であること」という点については、ほぼ解決をみたといえるだろう。しかし、NG02-4次調査で、盛土から北西-南東方向へ下降するSD703があることは留意すべきである。このまま盛土を横断すれば、盛土が堤防としての用をなさないからである。検出面からはSD701と同時併存していた可能性があり、あるいは、SD701を主幹線として逆方向に取水する溝と考えられなくもないが、通常の用水路とは角度が異なることが問題として残るだろう。こうした問題は依然として残るものの、状況からこれらの盛土が堤防である可能性はより高まったものといえる。少なくとも、盛土と溝が密接に関係し、水田への給水に用いられた灌漑施設の一端を担っていたことが窺えるのである。

4) 古代

RK5-6層に相当する暗色帯は南東-北西方向に広がる六反自然堤防上に形成された地層である。六反自然堤防は、NG84-4次調査地の北部の低地から北側に向かって徐々に高度を増し、NG00-6次調査地を境として次第に地層の厚みをまし、また、包含する遺物量も増加する傾向にある(図39)。一方、ほぼTP+8.0mのラインを境として、これより高い地点に居住域を設け、やや低まった場所は耕作地として利用され、さらに深い場所は湿地のままであったと考えられる(図40)。NG00-30次調査地以北の太子堂遺跡の調査については、狭小なトレンチ調査が行われたのみであり、地層の対比は困難である。注目すべき事象としては、TS97-7次調査では平安時代以前の流路が検出されており、その廃絶により形成された自然堤防上に平安時代後期の遺構が築かれていることである[八尾市文化財調査研究会2000a]。この流路の年代とその直上に形成された遺構のベースとなる地層の年代が明らかでないが、自然堤防を形成したRK7aiv層を形成した水流の位置との関係でも注目すべき砂層であると思われる。

なお、太子堂遺跡では平安時代後期の土壌や柱穴は検出されるが、奈良時代や平安時代前期の遺構

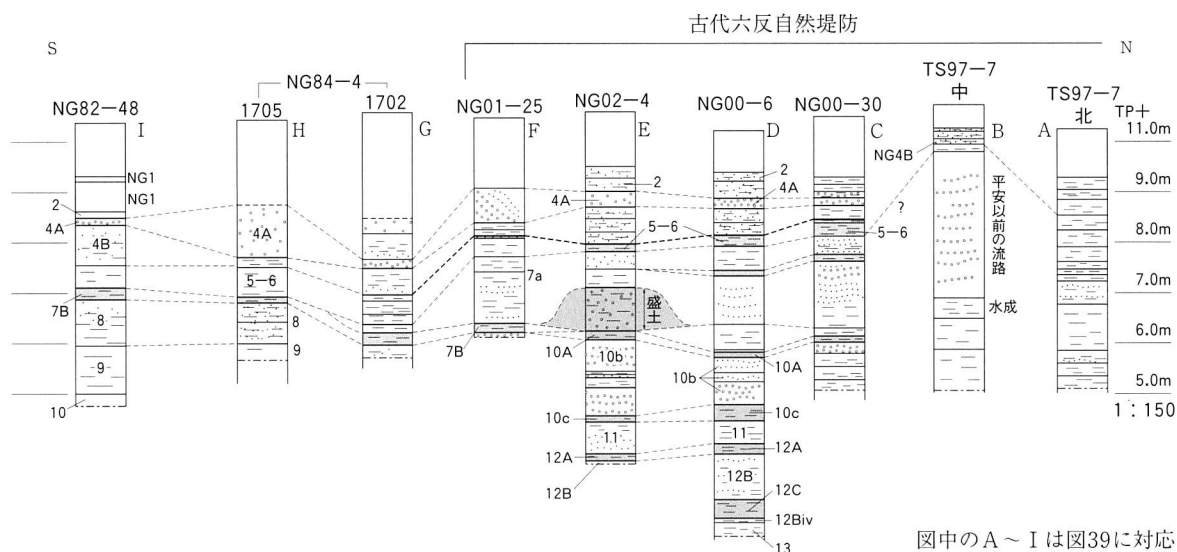


図40 六反自然堤防柱状図

はなく、遺物のみが出土している。このことから、自然堤防上の集落域は南北にかなり限定された範囲のものとなろう。

今回報告した北調査地は堤防上に位置し、南調査地は堤防の南斜面に位置する。南調査地では概して遺構・遺物ともに数量は少ない。こうした状況は南調査地の北西方向に位置するNG00-6次調査の結果と符号するものである。それでも出土した遺物の中に瓦が含まれるなど、注目すべき事象も確認できた。一方、北調査地は奈良時代から平安時代初頭にかけての遺構・遺物を検出することができた。中でもSD601で出土した豊富な遺物は、付近での生活を示すものである。奈良時代に属するこの溝からは瓦が出土せず、平安時代以降瓦が出土し始めることは、RK 5-6層と呼ばれる暗色帯の中では、とりわけ平安時代に大きな建物の造営があったと考えられるのである。

また、北調査地では平安時代中期から後期にかけての東西方向の流路と堤防を検出した。この時期には地割れを起こすような地震があったようで、堤防の構築途中で一度、そして河川が埋没するところに再度地震の発生した痕跡を確認することができた。2度目の地震はNG96-66次調査で地割れを起こしたものと同一であろう。

5) 鎌倉時代以降

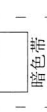
周辺の調査では、平安時代Ⅲ期以降は耕作地となっており、今回の調査でも、南北いずれの調査地でも耕作地となり、耕作と洪水による土砂の堆積を繰返しながら現在にいたっていることが確認できた。注目すべき遺構としては、各層で検出される大畦畔があり、南調査地Ⅰ区では東西方向の大畦畔がRK4A層で覆われた作土層の上面で検出されている。また、北調査地でもRK 3層相当層準で東西方向の大畦畔が検出されており、付近の平坦化にしたがい、条里に則った区画が行われるようになったことが分かる。

その一方で、南調査地Ⅴ区ではRK4C層準で南東-北西方向の畦畔が検出されている。南調査地Ⅴ区では、この方位に規制された地形がRK4A層で埋没するまで続いており、条里とは合致しない。こ

の地形はNG98-20・00-6次調査で検出された南東-北西方向の流路SD401に影響されたものと思われる。流路は11世紀前半には埋没するが、廃絶後もその地形の影響がしばらくは継続したものと考えられるのである。

別 表

別表 長原遺跡東北地区の基本層序

層序	層序概念図	主たる岩相	層厚 (cm)	自然現象 自然遺物ほか	おもな遺構・遺物	模式地	NG層序 との対比	時代
RK0層		現代客土						近代・現代
RK1層		現代作土	10-20				1	
RK2層		オリープ灰色細～中粒砂混り粘土質シルト	≤15	「  」 暗色帯	↓小溝群			
	i	灰～オリープ灰色細粒砂混りシルト	≤15					
	ii	オリープ灰色細粒砂混りシルト	≤15				2	江戸
	iii	灰色粘土質シルト	≤10		↓小溝群・畝間	NG96-66北部		
RK3層		灰オリープ灰色粗粒砂混りシルト	≤20					
	i	黄褐色粘土質シルト	≤10		↓島畠溝			
	ii	灰オリープ灰色粗粒砂混りシルト質細粒砂	5-15			中国製青磁(96-9次)	3	
	iii	オリープ灰色シルト質極細粒砂	≤20		↓小溝・水田(99-41次)	瓦器(C・Ⅲ～Ⅳ期；96-9次)		
	iv	黄褐色シルト質極細粒砂～礫混り粗粒砂	15-20		↓自然流路	瓦器(C・Ⅲ期；97-52次)		
RK4A層		オリープ褐色粘土質シルト	≤15		↓不整形落込み	瓦器(C・Ⅲ期；96-9次)		
RK4B層		オリープ褐色シルト	≤10		↓土器埋納遺構	瓦器(C・Ⅲ期；96-9次)		
	i	黄褐色～暗灰黄色シルト～中粒砂 ≤55cm	10		▽井戸新 ～平安Ⅳ新	瓦器(C・Ⅱ期)平安Ⅳ期(96-9次)	4B	
	ii	オリープ褐色中粒砂混りシルト	10		瓦器(C・Ⅱ期)平安Ⅳ期(96-9次)			
RK4C層		オリープ褐色中粒砂混りシルト	8		平安Ⅲ期(96-40次)			
	i	黄褐色中粒砂混りシルト	≤8		↓溝			
	ii	灰オリープ灰色中粒砂混りシルト	6-10				4C	平安
	iii	にぶい黄褐色中粒砂混りシルト	8-12		↓溝			
	iv	暗灰黄褐色シルト	≤14		↓溝	平安Ⅳ期(96-40次)		
	v	灰黄褐色細粒砂混りシルト	10		↓土器埋納遺構			
	vi	暗灰黄色中～細粒砂混りシルト	5-20		↓溝	平安Ⅰ・Ⅱ期(96-40次)		
	vii	暗灰黄色シルト質細粒砂	≤15		↓痕跡		5A・B～6A	奈良
RK5層		暗灰黄色～黒褐色シルト～細粒砂 ≤70cm	10		▽溝・掘立柱建物 TK43	飛鳥ⅠorⅡ(96-79次)		
RK6A層		暗灰黄色細粒砂質シルト	10		↓溝・土壇	飛鳥ⅠorⅡ(96-79次)	6B～7A	
RK6B層		灰色シルト	10		↓溝・土壇・井戸			
RK6C層		暗灰色粘土質シルト	10		↓溝	飛鳥Ⅰ・Ⅱ期(96-40次)		
RK7A層		オリープ褐色シルト～細粒砂	≤40	植物遺体多	←溝(97-43次)		7B0	飛鳥
	i	灰色砂礫	≤70			飛鳥Ⅱ(97-43次)		
	ii	黄褐色細～粗粒砂	≤180			TK209(97-43次)		
	iii	暗オリープ灰色粘土質シルト～明黄褐色砂礫	≤250		TK10新相(97-43次)	NG97-43		
	iv	黒色シルト～粘土質シルト	30		▽土手状遺構(95-57次)	TK10(95-57・97-52次など)	7Bi	古墳後期
	v	灰黄色砂礫	≤210		←堤防状盛土(98-20次) ▽溝(00-6次)	NG95-57 NG96-66 NG97-41 NG96-66		
	vi	灰オリープ灰色中粒砂～砂礫	≤110		TK23・47(96-66次など)	NG97-41 NG96-66		
	vii	灰オリープ灰色中粒砂～砂礫	≤110		TK216(98-20次)	NG97-43		
RK7B層		灰オリープ灰色シルト	5-25	植物遺体を 多く含む	←踏込み←盛土(98-19・20、00-6次) 水田(00-6次)	NG96-79 NG97-12 NG97-41	7Bii	古墳前期
	i	オリープ黒色粘土質シルト	7	植物遺体を 多く含む	←水田(99-19・41次)	NG97-12		
RK8A層		暗緑灰色シルト	5-20			NG96-66		
RK8B層		緑灰色粘土質シルト	7		布留式土師器(96-66次)	NG96-66		
RK8C層		暗灰色シルト	≤10		庄内～布留式土師器(96-9・97-41・52次) 弥生Ⅴ様式(96-9次)	NG96-9	7Biii	弥生後期
RK8C層		暗緑灰色シルト	5-20		弥生Ⅴ様式(96-66次)	NG96-66		

沖積層上部層II	RK9A層		暗オリーブ灰色シルト～極細～粗粒砂混り粘土質シルト	≤20	←土礫・溝 (97-43次)	NG97-41	8A	弥生中期
	RK9B層		暗灰色シルト～シルト質粘土	≤18		NG96-66 NG96-79	8B	
	RK9C層		暗オリーブ灰色砂礫～細粒砂混り粘土	≤30	←水田面・溝 (97-52次)	NG97-12	8Ci	
			オリーブ黒色シルト質粘土	20		NG97-52	8Cii	
			緑灰色シルト	≤3	←土礫・溝・路込み (97-41次) ▽水平断層	NG97-52	8Cii	弥生前期
	RK10A層		オリーブ黒色シルト	5		NG96-79	9A	
	RK10B層		灰オリーブ色シルト	40				縄文晩期
			暗オリーブ色粘土質シルト	≤5		NG95-79	9B	
			暗オリーブ色シルト	≤25				
			オリーブ黒色シルト	≤25				
沖積層上部層III			緑灰色シルト～灰色中粒砂	≤5	←土器集積・炬 (99-19次) 路込み (97-41・56、99-41次) ←噴砂 (99-19次)			縄文後期
	RK10C層		黒色シルト	10		北白川上層Ⅱ～Ⅲ (99-19次)	9Ci	
			緑灰色シルト	8		縄文土器 (97-12次)	9Cii	
			黒色シルト	8			9Ciii	
			黒褐色シルト質極細粒砂	15		北白川上層Ⅱ (99-19次)	10・11	縄文中期
	RK11層		灰色砂礫	≤250				
			暗オリーブ灰色粘土	≤70				
			灰 黒 褐色シルト 質粘土・粗砂混り砂質シルト	5	▽里木Ⅱ式 (96-79次)	4740±140SI(Gak-14942)(97-52、98-20次)	12Ai	
	RK12A層		黒色シルト	10			12Aii	
			黒色シルト質細粒砂	12		4910±140SI(Gak-14941)(97-52、98-20次)		
沖積層下部層	RK12B層		オリーブ黒色シルト質細～粗粒砂	15		(97-52、98-20次)	12B	
			暗褐色細粒砂質シルト	30-120		(97-52、98-20次)		
			緑灰色シルト～灰色粗粒砂	30-40	▽周溝・土礫・礎土 船元Ⅱ (99-41次)	(97-52、98-20次)		
	RK12C層		灰黄色粘土質シルト	12		(97-52、98-20次)	12C	
			灰色中～細粒砂質シルト	≤90		(97-52、98-20次)		縄文早期 縄文草創期
			灰色極粗粒砂～黒褐色シルト	30		(97-52、98-20次)		
	RK12D層		黒色中粒砂質シルト	5		(97-52、98-20次)		
			オリーブ黒色シルト質細粒砂	5	橋ノ路火山灰 (K-Ab)	(97-52、98-20次)		
			黄灰色シルト質極細粒砂	10	▽不整形土礫・礎土 (99-41次) 押型・礫糸 (99-41次) 石器製作址 (97-52次)	7230±40BP(Beta-146531)(99-41次)	12D	後期旧石器
	RK13A層		オリーブ黒色極細粒砂質シルト	10-20	▽サスカハ製石器遺物 (96-79次)	(97-52、98-20次)	13Ai	
低位段丘構成層			灰オリーブ色シルト	5-10			13Aii	
	RK13B層		灰オリーブ色火山灰質シルト	10-20	石器製作址 (97-12次)・ナイフ形石器 (97-52・96-79次)		13B	
			灰色砂礫質粘土	5	平安神宮火山灰(AT)		13C	
	RK13C層		オリーブ灰色ガラス質火山灰	10			14	
	RK14層		オリーブ灰色粘土質シルト	20-40				
			緑灰色砂礫混り粘土質シルト	100-150				
	RK15A層		緑灰色シルト～シルト質粘土	≥100	←ゾウ足跡化石		15	
	RK15B層		灰色砂礫	20-30	凡 例 ←は上面検出遺構 ↑は下・基底面検出遺構 ▽は層内検出遺構		16A	
	RK16A層		緑灰色シルト質極細～細粒砂	120				
	RK16B層		暗灰黄色泥炭中粒砂質粘土	10-20			16B	
中位段丘構成層			暗灰黄色泥炭中粒砂質粘土	10				中期旧石器
			灰色火山灰極細粒砂質シルト	40	吾彦火山灰(Aso-4)			

([高橋工・杉本厚典・大庭重信・絹川一徳2000]を一部修正)

引用・参考文献

- 伊東隆夫・林昭三・島地謙1984、「鬼虎川遺跡から出土した建築用材の樹種」：東大阪市文化財協会『鬼虎川遺跡第7次発掘調査報告3 一遺構編一』、pp.55-72
- 尾上実・森島康雄・近江俊秀1998、「瓦器碗」：中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社、pp.315-337
- 大阪市教育委員会・難波宮址顕彰会1978、「Ⅳ 長吉六反(推定・城山古墳跡)試掘調査」：『平野遺跡群試掘調査報告書』、pp.12-16
- 大阪市文化財協会1978、『長原遺跡発掘調査報告』
- 1979a、『大阪市下水道管渠工事に伴う平野区所在遺跡発掘調査(NG12次)報告書』
- 1979b、『大阪市下水道発進口建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG16次)報告書』
- 1979c、『関西電力管路埋設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG17)略報』
- 1980、『大阪市下水管渠築造工事(到達堅穴)に伴う長原遺跡発掘調査計画書』
- 1981a、『大阪市下水管渠築造工事(押込口)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80-1)略報』
- 1981b、『八尾～富田林局間同軸ケーブル方式工事(土木)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80-2)略報』
- 1984a、『下水工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-1)略報』
- 1984b、『大阪市住宅供給公社長原六反用地ボーリング調査(NG83-5)略報』
- 1984c、『大阪市平野区長吉出戸における下水道工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-22)略報』
- 1984d、『大阪市出戸六反地区幹線下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-43)略報』
- 1984e、『仲東産業店舗建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-54)略報』
- 1984f、『吉内邸新築工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-63)略報』
- 1984g、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-65)略報』
- 1985a、『六反下水管渠推進工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-4)略報』
- 1985b、『長吉出戸地区下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-18)略報』
- 1985c、『地中送電線工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-49)略報』
- 1985d、『関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-86)略報』
- 1986、『大阪市土木局カルバート建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG85-17)略報』
- 1989、『(株) ビーバーハウスによる建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG88-6)略報』
- 1996、『大阪市教育委員会によるクラフトパーク建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG95-77)略報』
- 1997、『平成8年度大阪市都市整備局による長吉六反第1住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG96-79)略報』
- 1998a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅰ
- 1998b、『平成9年度大阪市都市整備局による長吉六反第1住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG97-41)完了報告書』
- 1999、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ
- 2000、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅲ
- 2001、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅳ

- 2002a、『平成13年度長吉東部地区土地区画整理事業施工に伴う長原遺跡発掘調査(NG01-14)完了報告書』
- 2002b、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』V
- 2002c、『長原遺跡発掘調査報告書』Ⅷ
- 2003a、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅵ
- 2003b、『平成14年度長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡発掘調査(その1)(NG02-1)完了報告書』
- 2003c、『平成14年度長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡発掘調査(その2)(NG02-5)完了報告書』
- 2003d、『平成14年大阪市住宅局による長吉六反住宅建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG02-9)完了報告書』
- 大阪府教育委員会・大阪府文化財調査研究センター2000、『河内平野遺跡群の動態』Ⅷ
- 大阪文化財センター1980、『亀井・城山』
- 1986a、『城山』その1
- 1986b、『城山』その2
- 1986c、『城山』その3
- 川西宏幸1978、『円筒埴輪総論』：『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会、pp.95-164(川西1988『古墳時代政治史序説』に再録)
- 建設省国土地理院1983、『土地条件調査報告書(大阪平野)』
- 古代の土器研究会1992、『古代の土器1 都城の土器集成』
- 小山正忠・竹原秀雄1996、『新版 標準土色帳』17版 日本色研事業株式会社
- 佐原真1968、『近畿地方』：『弥生土器集成』本編2 東京堂出版、pp.53-72
- 島地謙・伊東隆夫(編)1988、『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣、p.296
- 島地謙・林昭三・植田弥生1987、『鬼虎川遺跡出土木製品の樹種』：東大阪市文化財協会編『鬼虎川の木質遺物 ー第7次発掘調査報告書 第4冊ー』、pp.39-67
- 嶋倉巳三郎1983、『友井東(その2)から出土した木製品の樹種』：大阪府教育委員会・大阪文化財センター編『友井東(その2) 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』、pp.46-48
- 1984、『山賀遺跡(その3)の出土木製品の樹種について』：大阪府教育委員会・大阪文化財センター編『山賀(その3) 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 ー本文編ー』、pp.413-428
- 積山洋1993、『律令制期の製塩土器と塩の流通ー摂河泉出土資料を中心にー』：『ヒストリア』大阪歴史学会、pp.69-92
- 高橋工1999、『長原遺跡東北地区の基本層序』：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告書』Ⅱ、pp.7-19
- 高橋工・杉本厚典・大庭重信・絹川一徳2000、『長原遺跡東北地区の基本層序』：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告書』Ⅲ、pp.9-17
- 田辺昭三1981、『須恵器大成』角川書店
- 趙哲済1995、『本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.41-44
- 2001、『長原遺跡の地層』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅥ、pp.7-28

- 辻美紀1999、「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」：大阪大学考古学研究室編『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』、pp.351－365
- 2003、「盛土遺構あれこれ」：大阪市文化財協会『葦火』104号、pp.4－5
- 那須孝悌1989、「活動の舞台：概論」：永井昌文・那須孝悌・金関恕・佐原眞編『弥生文化の研究1 弥生人とその環境』雄山閣、pp.119－130
- 成田壽一郎1996、『曲物・箆物』理工学社、p.205
- 橋本和久1992、「中世土器の製作技法」：『中世土器研究序論』真陽社、pp.111－131
- 八尾市文化財調査研究会2000a、「V 太子堂遺跡第7次調査(TS97－7)」：『(財)八尾市文化財調査研究会報告』66、pp.59－73
- 2000b、「VI 太子堂遺跡第8次調査(TS98－8)」：『(財)八尾市文化財調査研究会報告』66、pp.75－93
- 山田昌久1993、「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成 一用材から見た人間・植物関係史」：植生史研究会『植生史研究』特別第1号、p.242

あ　と　が　き

3 個年にわたる八尾市久宝寺太田線建設に伴う発掘調査は、長原遺跡東北地区の東辺とほぼ重なり、調査件数が比較的少ない地域であったため、これまでの空白を埋めることができた。調査区の配置はちょうど、古墳時代の終わり頃から古代に集落が形成された六反自然堤防に南北のトレンチを設定する形になったのである。

今回で三度検出された古墳時代の盛土遺構は、平面の形状がより明らかになるとともに、築造過程を明らかにするうえで重要な資料を得ることができた。また、六反自然堤防上の古代の集落に係る遺構の検出は当地での継続的な集落の変遷を明らかにする貴重なデータとなるだろう。今後も資料の蓄積、統合に努めていきたい。

最後に、発掘調査から報告書刊行にいたるまで八尾市都市整備部をはじめとする諸機関の多大なる支援を賜った。改めて感謝の意を表したい。

(松尾信裕)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- あ 飛鳥Ⅰ …… 15, 34
飛鳥Ⅱ …… 12, 15, 16, 25, 34
飛鳥Ⅲ …… 15～17, 19, 26
飛鳥Ⅳ …… 15, 16
飛鳥Ⅴ …… 16
- え 円面硯 …… 26
- か 瓦器 …… 26, 29, 33, 36, 50, 51
- き 畿内第Ⅴ様式 …… 45, 47, 48
- く 杭 …… 21, 22, 53, 55, 56
- け 畦畔 …… 4, 9, 32, 33, 36, 39,
49, 61
乾元大宝 …… 28, 29
- こ 皇朝十二銭 …… 22
小型丸底壺 …… 6, 48
黒色土器 …… 29, 51
- し 地震 …… 11, 19, 21, 26, 56, 61
巡方 …… 22, 25
承和昌宝 …… 22, 26
地割れ …… 11, 19, 21, 26, 61
神功開宝 …… 22, 26
人面墨画土器 …… 29
- せ 製塩土器 …… 17, 45, 49
青磁 …… 12
- ち 長年大宝 …… 22, 26
- と 動物骨（馬骨） …… 18, 22, 31, 36
土壙 …… 6, 11, 19, 21, 25, 32,
36, 38, 41, 48, 49, 57,
59
土錘 …… 16, 26, 29
- に 二重口縁壺 …… 45
- ふ 布留式土器 …… 39, 42, 45, 48
噴砂 …… 11, 22, 26
- へ 平安時代Ⅰ …… 34, 36
平安時代Ⅱ …… 19, 21, 29
平安時代Ⅱ古 …… 26
平安時代Ⅲ …… 28, 29, 61
平安時代Ⅲ古 …… 25, 33, 36, 49
平安時代Ⅲ新 …… 22, 26, 29
平安時代Ⅳ古 …… 26, 29
平安時代Ⅳ新 …… 29
平城宮土器Ⅱ …… 16, 28
平城宮土器Ⅲ …… 15, 16, 19, 26, 28, 49
平城宮土器Ⅳ …… 15, 16
平城宮土器Ⅴ …… 15～17, 26, 28
平城宮土器Ⅵ …… 12, 15～17, 26
- み 溝 …… 6, 9, 11, 12, 19, 29,
33, 34, 36, 38, 39, 41,
42, 47～49, 52, 57～59,
61
ミニチュア土器 …… 15～17, 26
- も 盛土 …… 4, 6, 8, 9, 21, 22, 33,
39, 42, 45, 48, 49, 52,
57～59
- や 弥生土器 …… 39, 45, 47, 48
- り 流路 …… 4, 11, 12, 21, 22, 26,
28, 29, 33, 36, 42, 59,
61
- ろ 六反自然堤防 …… 6, 49, 59, 61

〈地名・遺跡名など〉

- た 太子堂遺跡 …… 1, 59

**Archaeological Report
of the
Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume XI

A Report of Excavations
Prior to the Construction of the Kyuhoji - Ota Route
between 2000 and 2002

March 2004

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SB : Building

SD : Ditch

SK : Pit

SP : Posthole

SR : Paddy field balk

SX : Other features

NR : Natural Stream

CONTENTS

Foreword

Explanatory Notes

Chapter I Excavation of the Nagahara site	1
S.1 Background and Location	1
1) Background of excavation	1
2) Geographical setting and historical background	5
S.2 Progress and outline of research	7
1) Northern sector (NG00-30)	7
2) Southern sector (NG01-25, 02-4)	7
Chapter II Results of the investigation	9
S.1 Northern sector (NG00-06)	9
1) Stratigraphy and Finds	9
2) Features and finds of the Nara Period	12
3) Features and finds of the early Heian Period	19
4) Features and finds of the late Heian Period	21
5) Features and finds of the Kamakura Period and later	32
S.2 Southern investigation area, I-III (NG01-25)	33
1) Stratigraphy	33
2) Features of the Heian Period	36
3) Features of the Kamakura to Muromachi Period	36
S.3 Southern investigation area, IV-V (NG02-4)	39
1) Stratigraphy	39
2) Features of the Yayoi to early Kohun Period	41
3) Features and finds of the middle Kohun Period	42
4) Features and finds of the Nara to early Heian Period	49
5) Features and finds of the middle Heian Period	49
6) Features and finds of the Kamakura Period	50
7) Features and finds of the Muromachi Period and later	52
Chapter III Examination of the features and finds	53
S.1 Analysis of tree species on wooden finds	53
1) Introduction	53
2) Sampling	53
3) Methodology	53
4) Results	53
5) Examination	55
S.2 Conclusion	57
1) Late Jomon Period	57
2) Yayoi Periods	57
3) Kohun Period	57

4) Ancient	59
5) Kamakura Period and Later	61
References and Bibliography	67
Postscript and Index	
English Contents and Summary	
Reference Card	

ENGLISH SUMMARY

Outline of the investigation

This volume describes the investigations carried out prior to the construction of the public road, Kyuhoji-Ota Route in Yao City, in Osaka Prefecture situated in central Japan. The area was investigated through 3 excavations from 2000 to 2003. The first excavation (NG00-30) was carried out from September 25th 2000 to February 28th 2001, covering 400 square metres. The second excavation (NG01-25) lasted from January 23rd to March 20th in 2002, covering 110 square metres. The last excavation (NG02-4), covering 170 square metres, was carried out between December 24th 2002 and March 20th 2003.

Each excavation investigated the layers until 4 metres below the present ground surface.

Results of the investigation

1. The Kofun Period

The layers dated between the Kofun Period and the Yayoi Period are situated at 4 metres below the present ground surface around the investigated area. The NG02-4 excavation discovered the Kofun Period mounds. The similar type of mounds were also found from excavations of the surrounding area (NG98-19, 98-20, 00-6). All of those mounds seem to be correlated. The mounds hold a ditch on their top, which supplied water to the surrounding paddy fields. According to the investigation results, the mounds formed a long bank extending from north to south, which was probably an embankment for the river along the mounds.

A large number of ceramics were unearthed from the mounds, but talc objects and traces of fire use were not seen, unlike the preceding excavations.

2. From the Asuka to the Heian Period

The Rokutan natural bank was formed during this period. The NG00-30 excavation unearthed a large amount of objects because the excavated area was situated high at the bank. Although the excavated structures consisted of pits and ditches only, the state of the excavated artefacts implied the existence of settlements nearby.

There was also a river dated to the Heian Period running from east to west in this area, as well as the embankment supported by the piles at the north of the river. A copper belt buckle and ancient coins, such as *Jingu-Kaiho* and *Eiwa-Shoho*) were discovered from the hollows which were probably made by fetching earth for the embankment.

There were not many archaeological structures discovered from NG01-25 and NG02-4 due to their location at the lower part of the bank.

3. After the Heian Period

The whole area became agricultural field after the Heian Period. The bank was gradually flattened as a result of repeated flooding and cultivation. It is proved that the flooding occurred several times up until the Early Modern Period.

Summary

The results described in this volume did not contradict the preceding excavation results from the surrounding areas. It was especially significant that the excavated mounds were parts of a long mound in a larger scale, which enhanced the possible existence of the river embankment.

Moreover, a trench was dug on the south side of the Rokutan natural bank formed during the ancient times, which made it possible to observe the strata of the bank to large extent. The observation would be useful resources for the further study of ancient land use.

報告書抄録

ふりがな		ながはらいせきはつくつちょうさほうこく11						
書名		長原遺跡発掘調査報告 XI						
編著者名		村元健一・寺井誠・安部みき子・高橋敦						
編集機関		財団法人 大阪市文化財協会						
所在地		〒540-0006 大阪府中央区法円坂1－1－35 TEL 06－6943－6833						
発行年月日		西暦 2004年 3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながはら 長原遺跡	おおさかしひらのく 大阪市平野区 ながよしちくたん 長吉六反	27126	－	34° 36′ 15″	135° 34′ 25″	20000925 ～ 20030320	680m ²	八尾市都市計画道路久宝寺太田線建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
長原遺跡	集落	弥生時代		土壇・溝		弥生土器		
	水田	古墳時代		盛土遺構・溝		土師器		
		奈良・平安時代		土壇・溝・流路		土師器・須恵器・円面硯・瓦・神功開宝・承和昌宝・長年大宝・帯金具		
		鎌倉時代		流路・水田		瓦器		

圖 版

東壁地層断面
(第1～4b層)
(北西から)

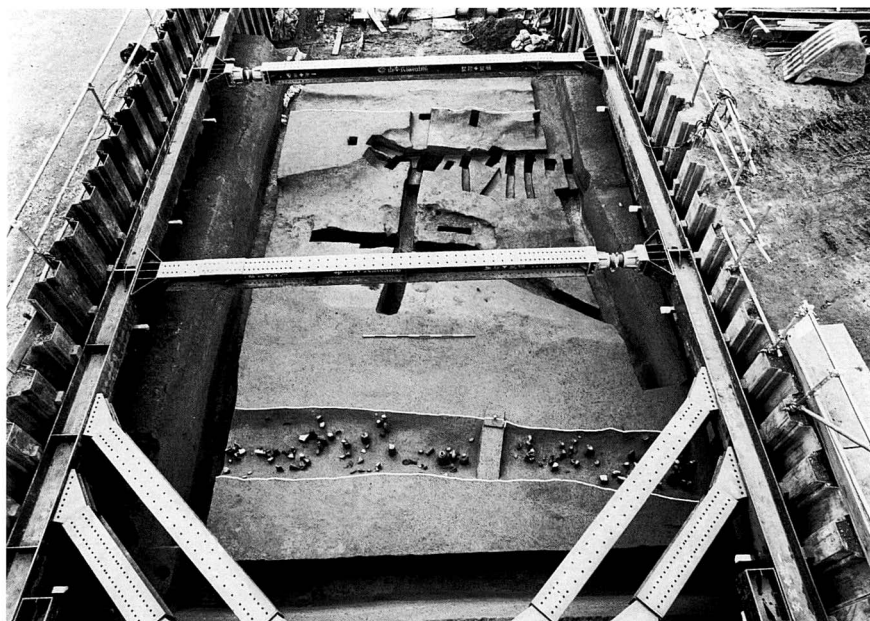


北壁地層断面
(第7a～7b層)
(南から)



深掘りトレンチ地層断面
(第7b～10bi層)
(西から)

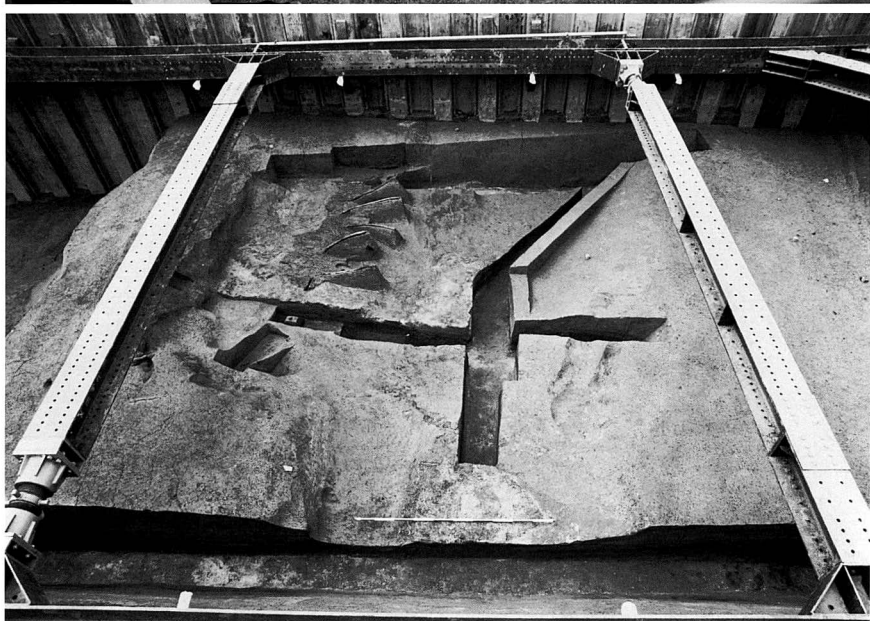




SD601(北から)



第5a層上面検出遺構
(東から)



SX4c01(東から)

杭倒壊状況
(南東から)



NR4c01断面
(南西から)



第3b層上面検出遺構
(北から)





I区西壁地層断面
(北東から)



第5c層上面検出遺構
(南から)

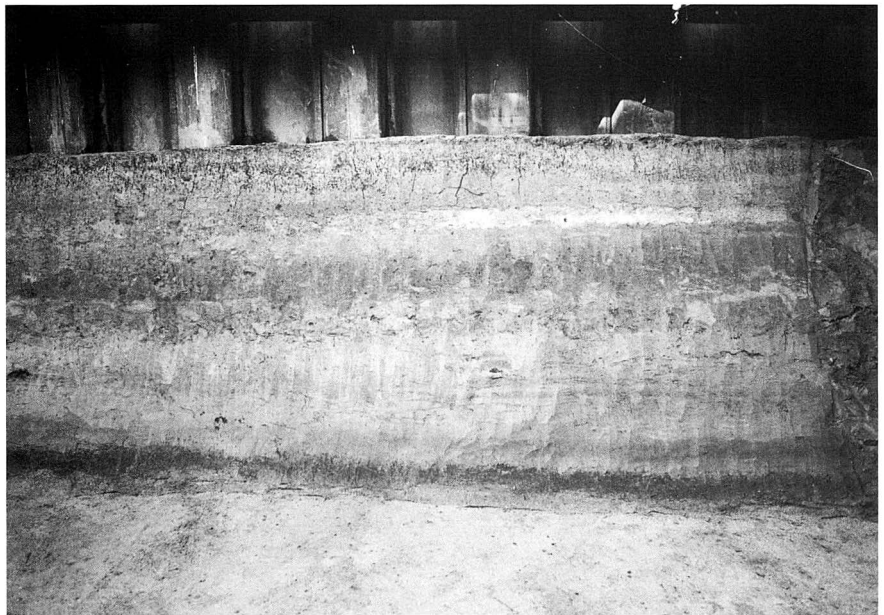


SR401検出状況
(北から)

Ⅴ区南壁地層断面
(北から)

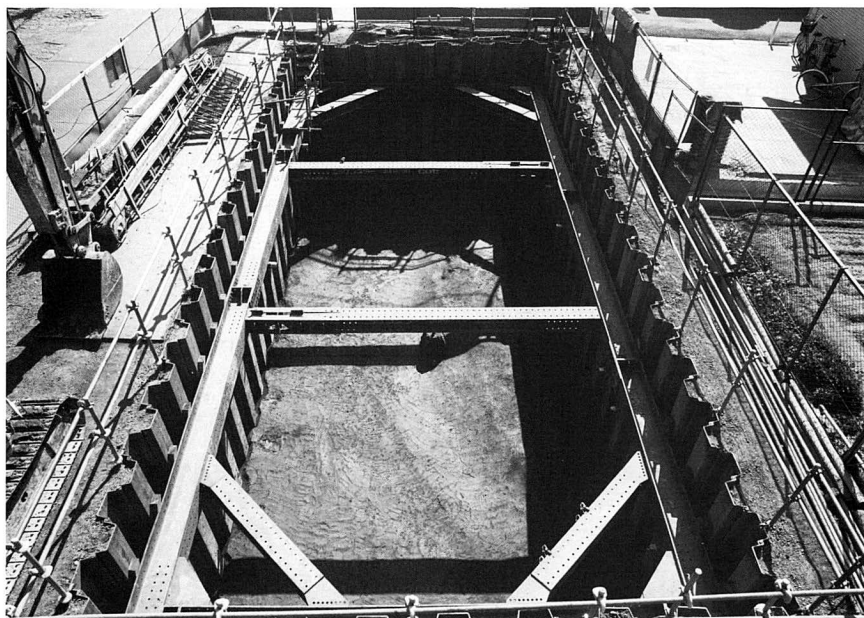


Ⅴ区西壁地層断面
(東から)

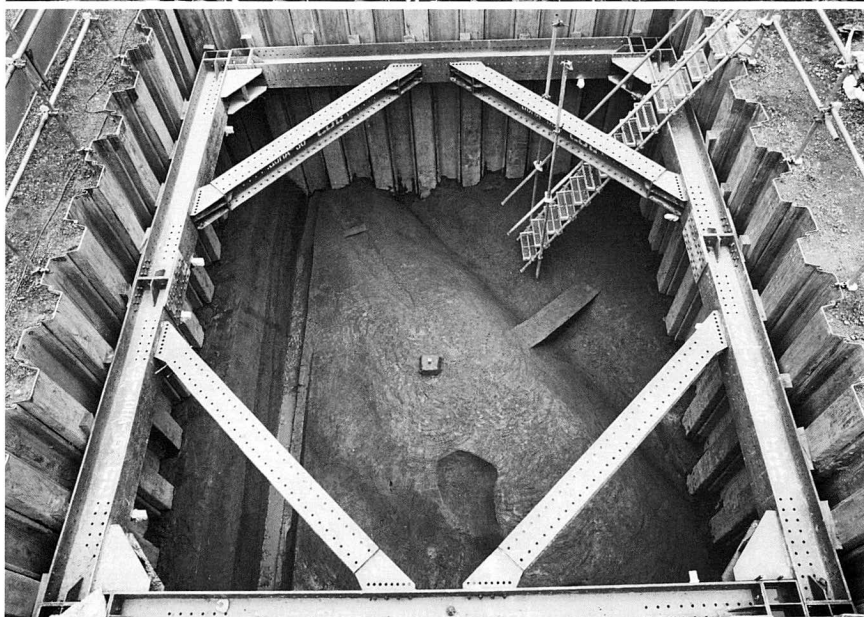


第9層上面検出遺構
(南から)





V区SX704検出状況
(北から)

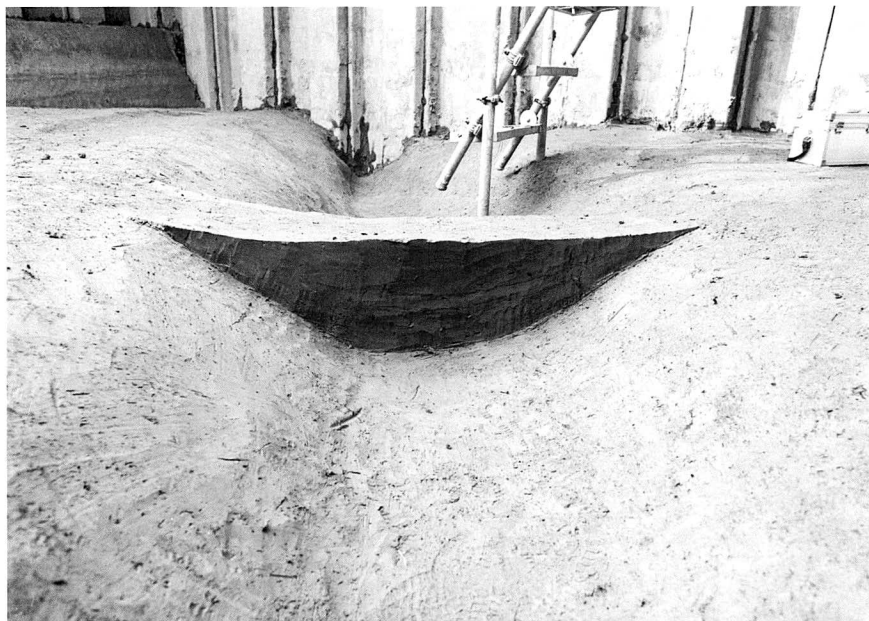


IV区SX704検出状況
(南から)

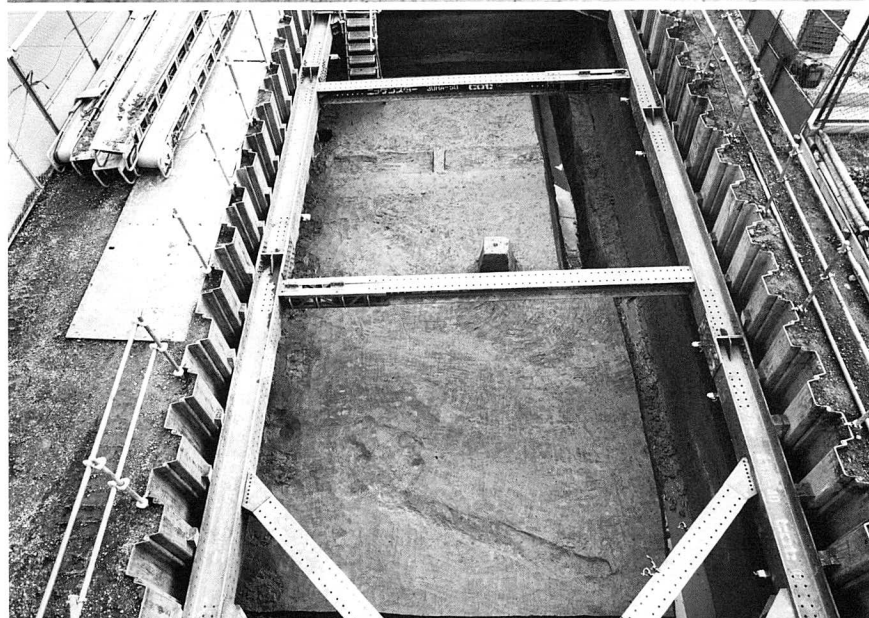


盛土内土器出土状況
(北から)

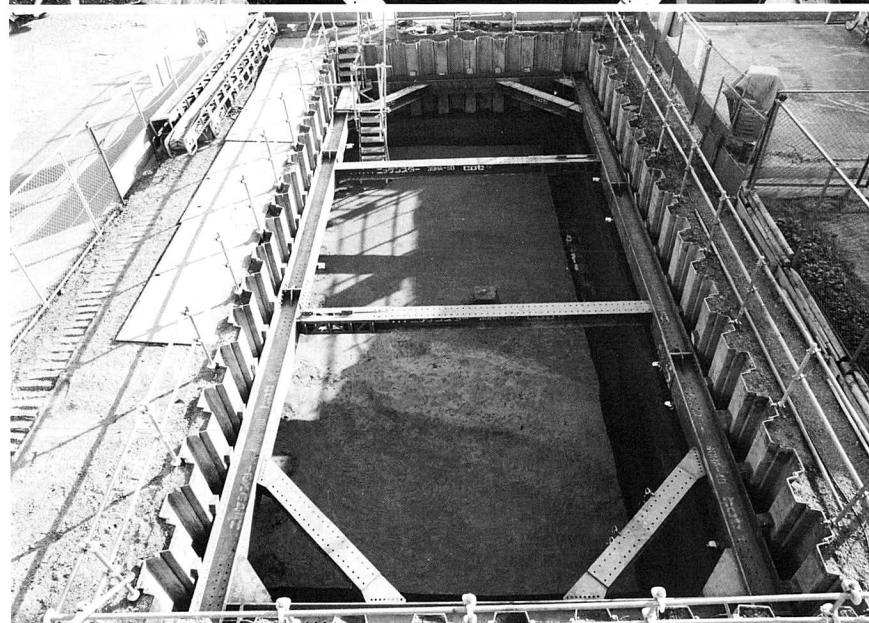
SD704断面
(南から)



第5層上面検出遺構
(北から)



第4ci層上面検出遺構
検出状況
(北から)





5



36



37



38



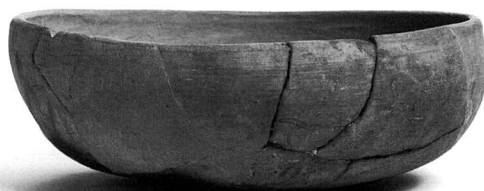
39



40



6



8



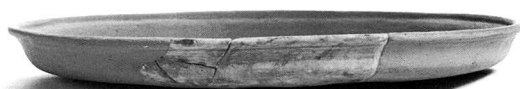
21



9



20



19



12



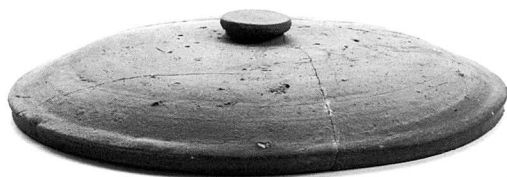
14



41



27



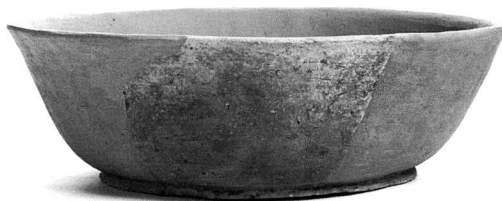
49



50



48



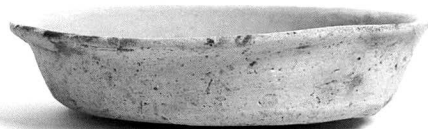
55



43



28



44



45



60



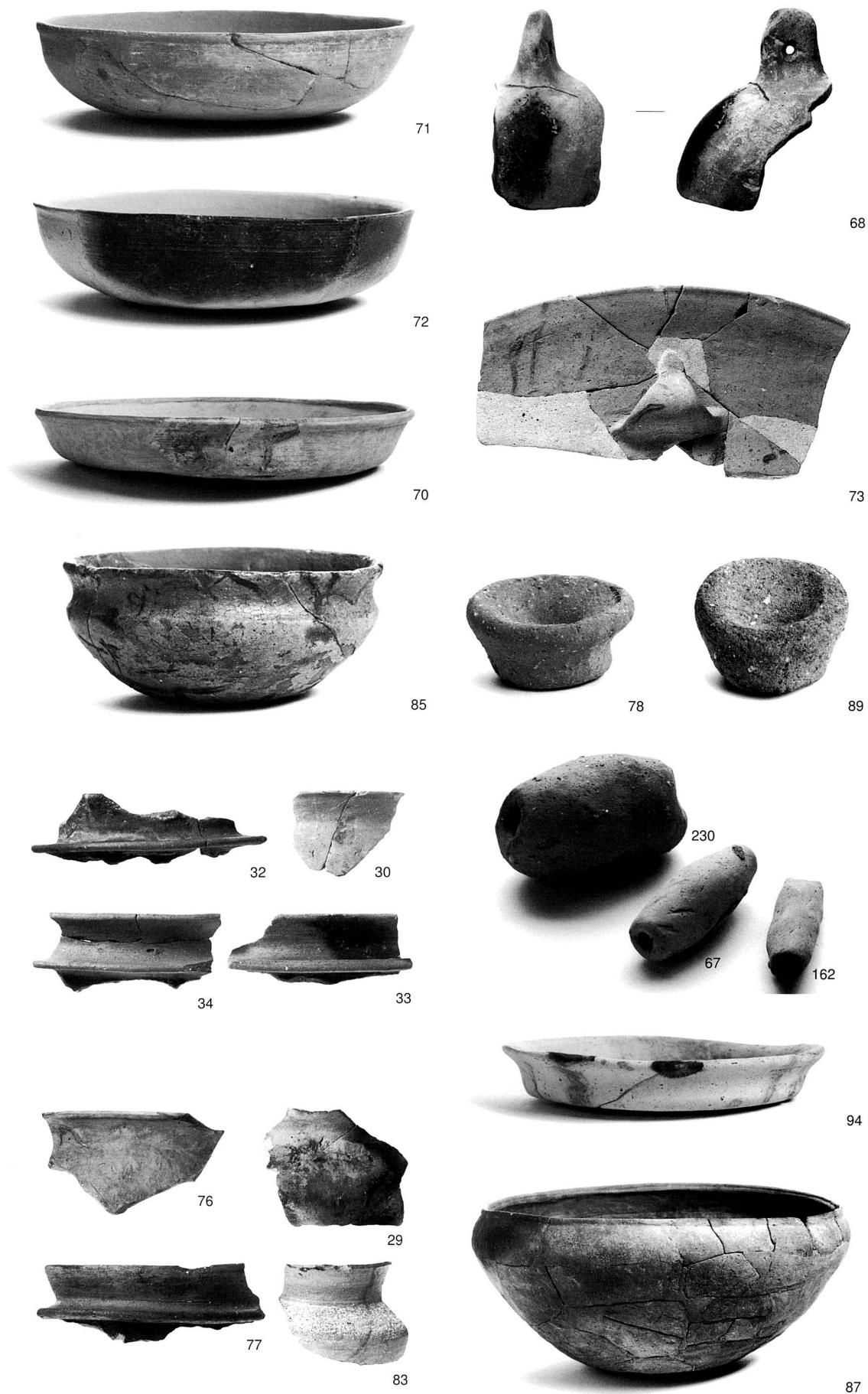
46



61



47



SD601(29・30・32～34・67・68)、SD602(70～73・76～78・83)、第5b層(85・87・89・94)、地割れ(162)、NR4c01(230)



184



195



183



151



185



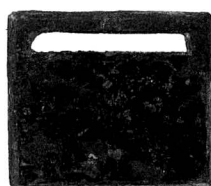
172



149



173



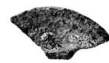
169



232



168



232



168



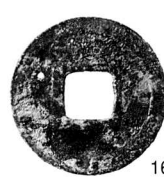
166



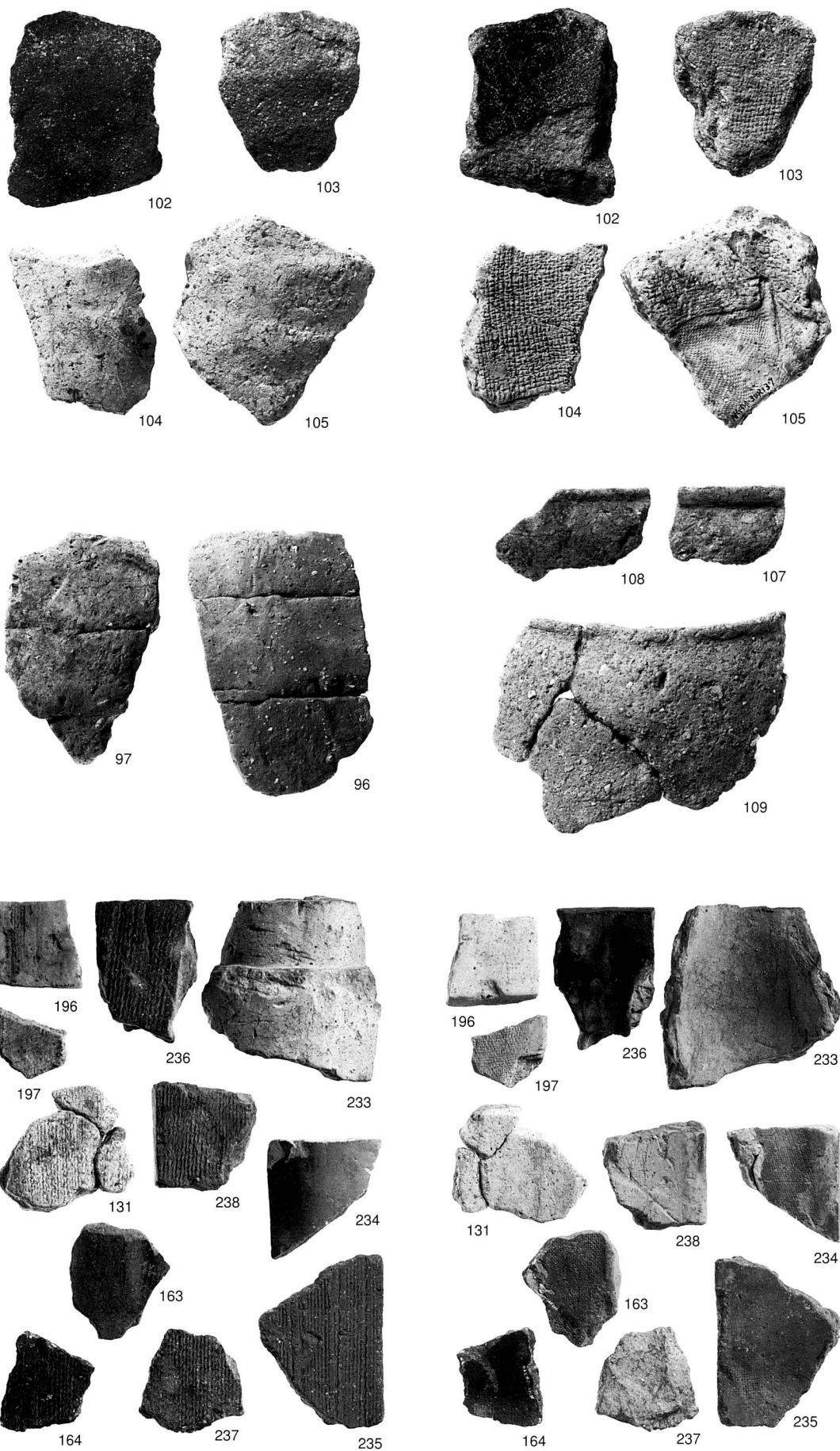
167



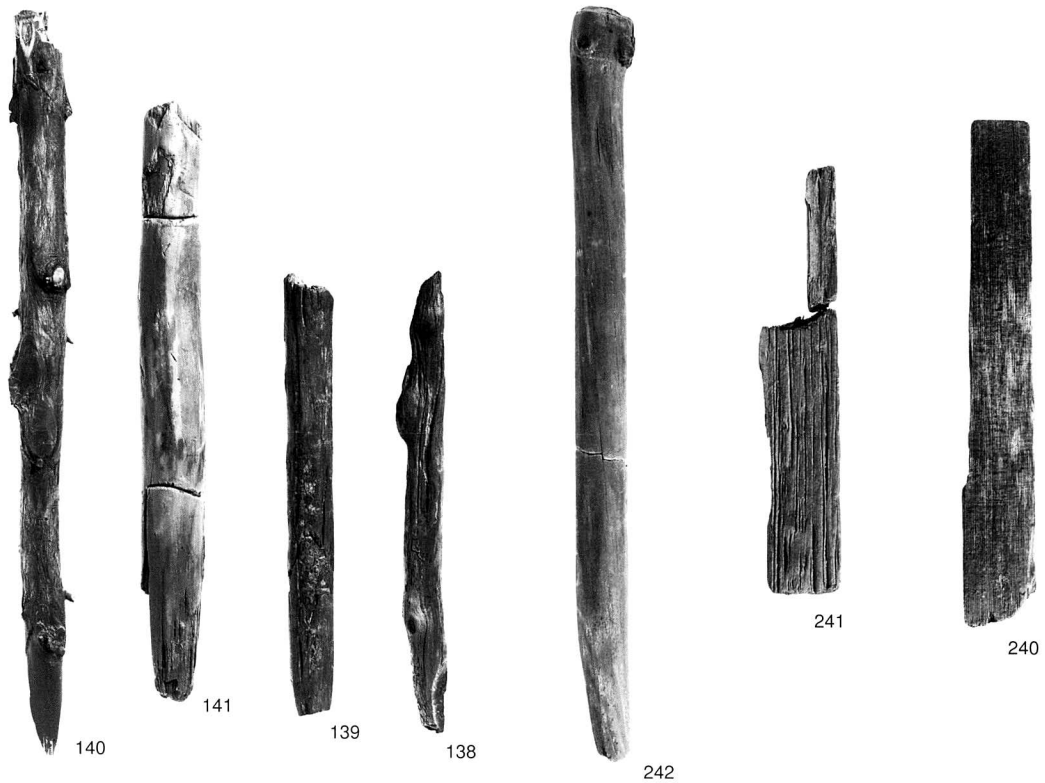
166



167



SD601(96・97・103)、第5b層(107)、SD503(131)、NR4c01(102・233～238)、
地割れ(163、164)、第4cii層(104・108・196・197)、第4ci層(105)、第4ci～第5b層(109)



第7bii層(7)、第5b層(R551・R552)、SX4c01(138~141)、噴砂(165)、NR4c01(240~242)



231



214



213



243



216



202



217



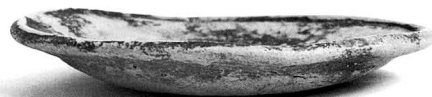
208



207



227



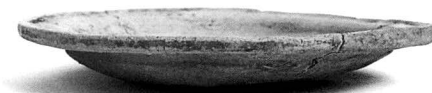
198



226



201



199



248



282



247



281



289



284



292



272

SX704上層(247・272・281・282・292)、SX704下層(248)、SX705下層(284)、SD703(289)



267



315



264



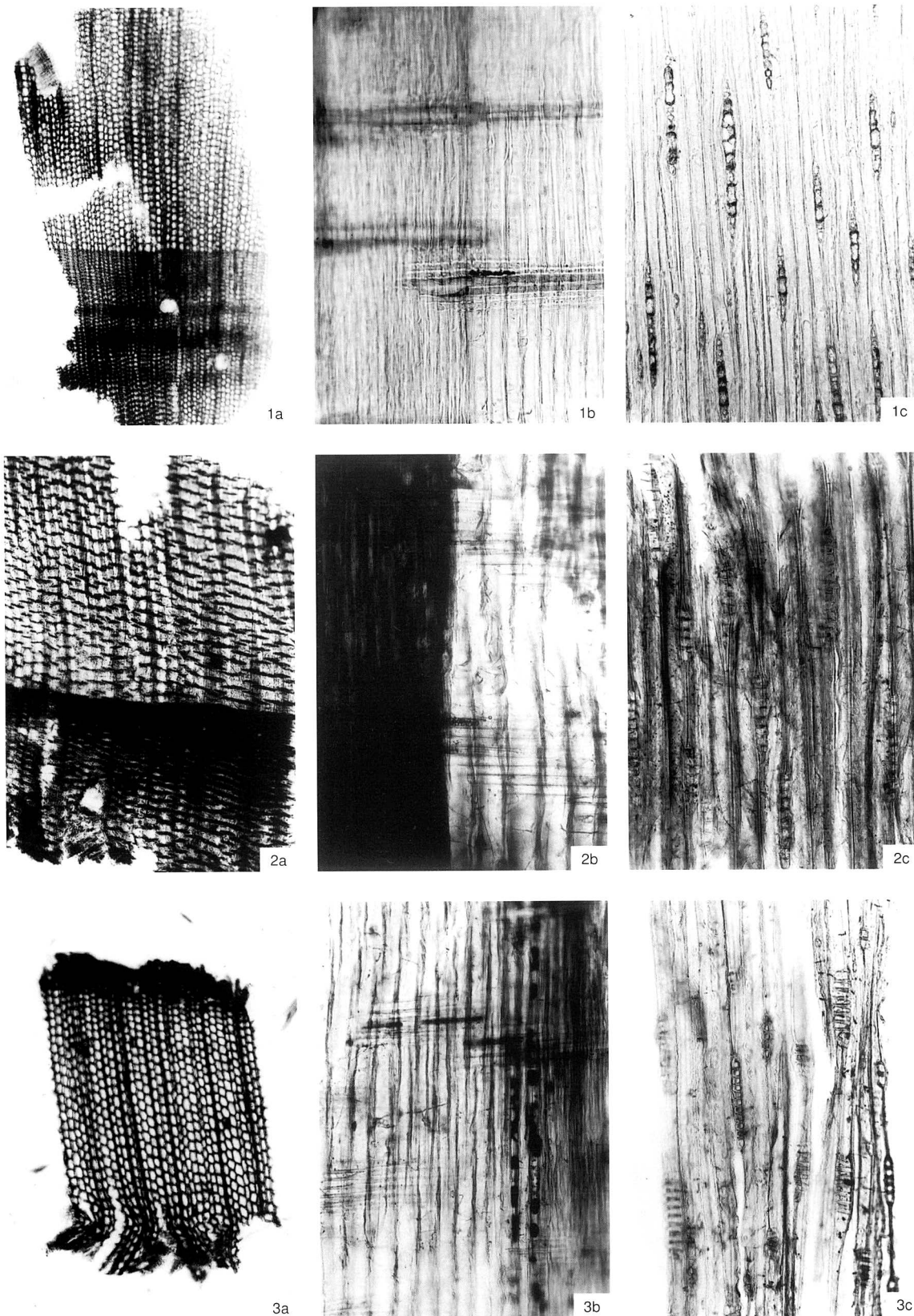
266



286



268



1. マツ属複維管束亜属(242)

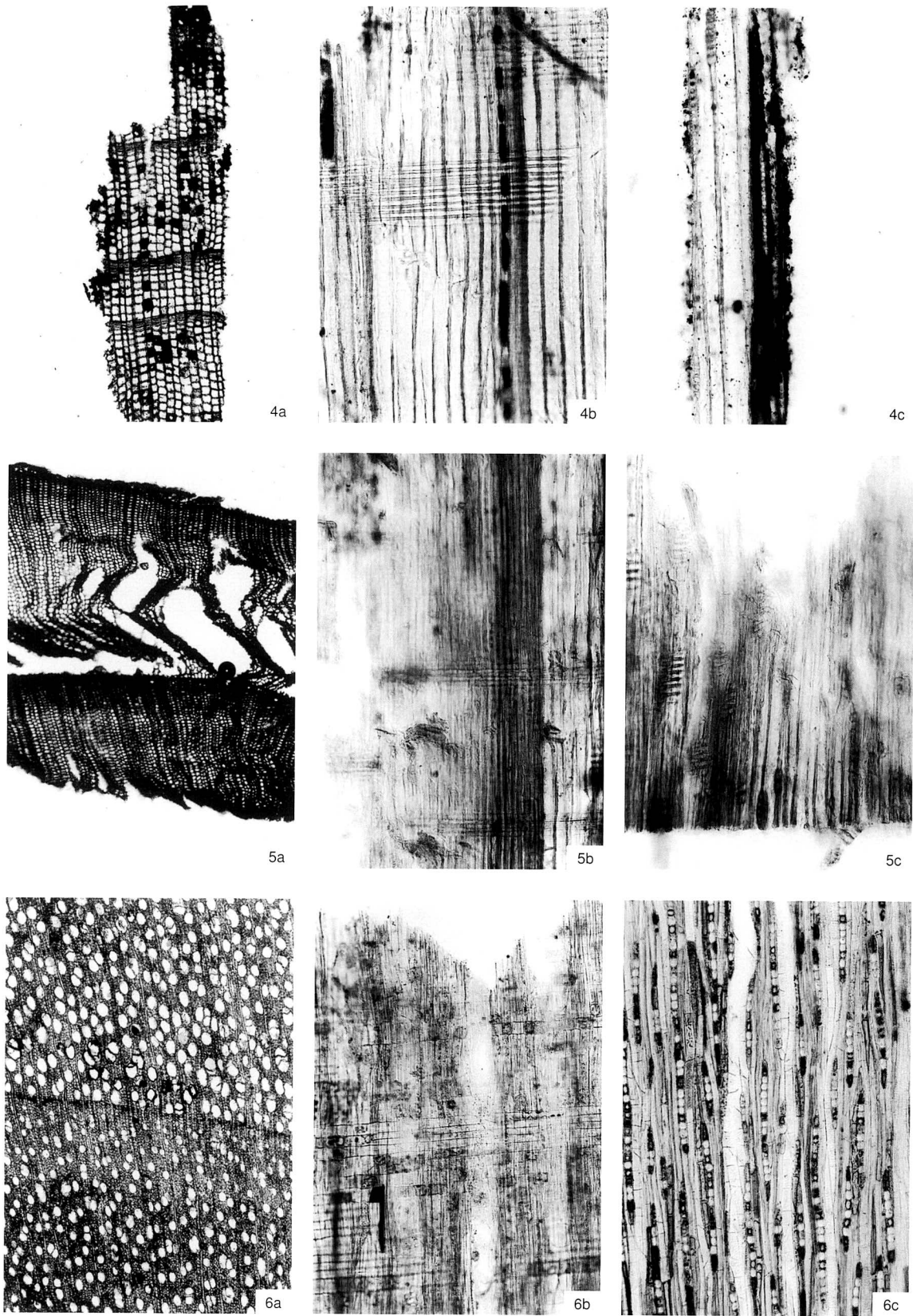
2. モミ属(8)

3. スギ(241)

a : 木口、b : 柁目、c : 板目

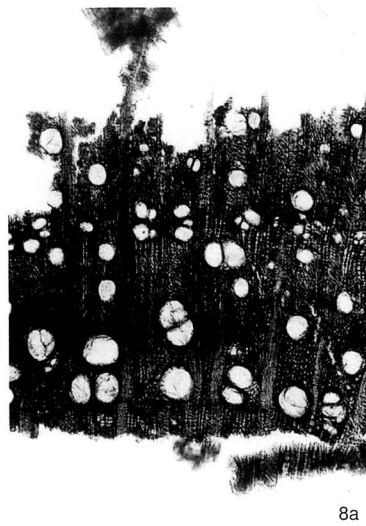
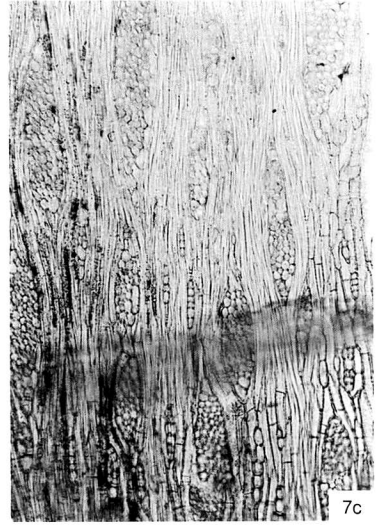
200 μ m : a

200 μ m : b、c



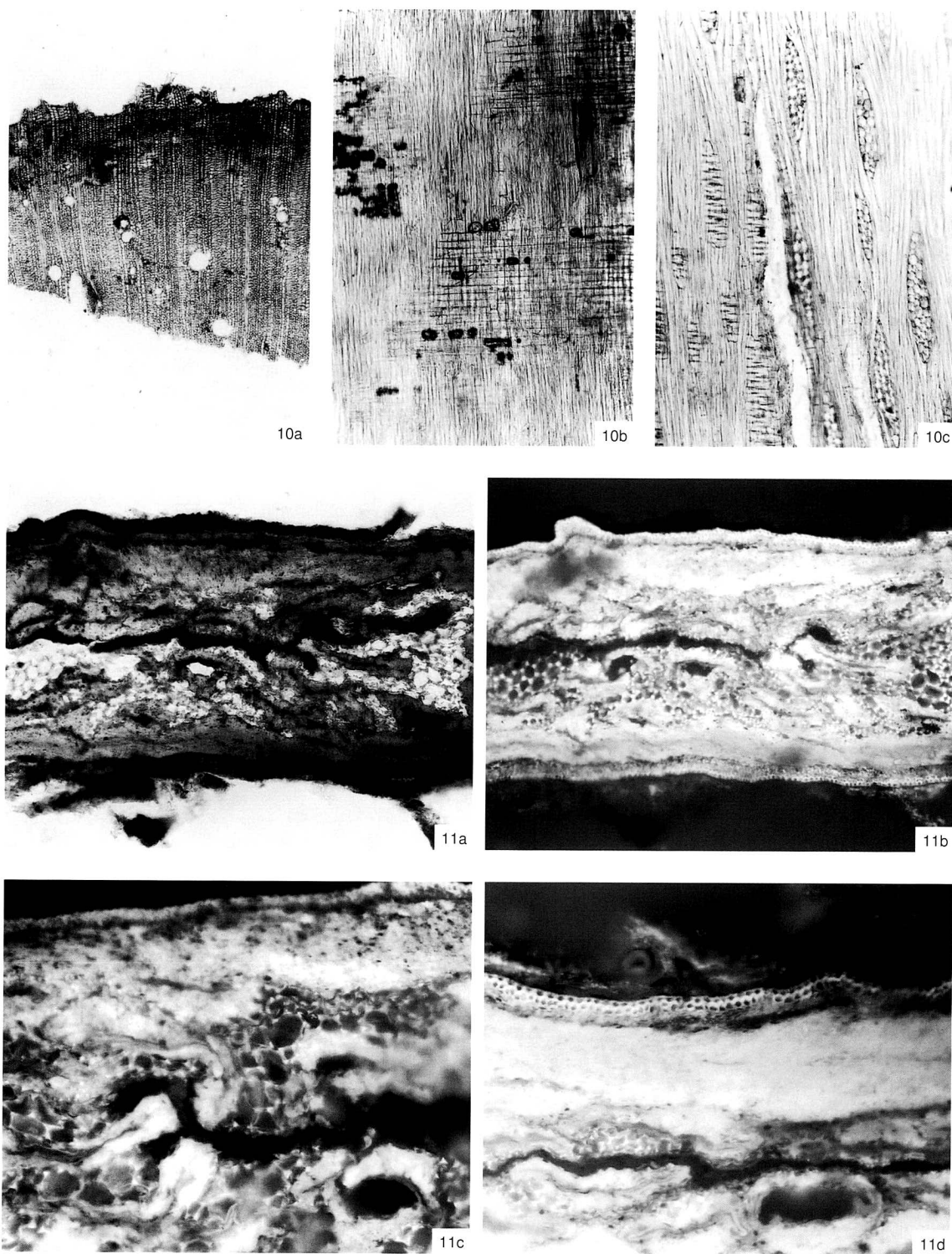
4. ヒノキ(240)
5. ヒノキ科(140)
6. ヤナギ属(139)
a : 木口、b : 柁目、c : 板目

200 μ m : a
200 μ m : b、c



7. エノキ属(145)
 8. ヤマグワ(138)
 9. クスノキ科(165)
 a : 木口、b : 柁目、c : 板目

200 μ m : a
 200 μ m : b、c



10. ネムノキ近似種(142) a : 木口、b : 柃目、c : 板目

11. 不明(R554) a : 透過光、b ~ d : 落射蛍光

200 μ m : 10a
 200 μ m : 10b、c
 100 μ m : 11a、b、c、d

大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告 XI

ISBN 4-900687-79-0

2004年3月25日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂 1-1-35

<http://www.occpa.or.jp/>

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南2-6-8

**Archaeological Report
of the
Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume XI

A Report of Excavations
Prior to the Construction of the Kyuhoji - Ota Route
between 2000 and 2002

March 2004

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Report
of the
Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume XI

A Report of Excavations
Prior to the Construction of the Kyuhoji - Ota Route
between 2000 and 2002

March 2004

Osaka City Cultural Properties Association

『長原遺跡発掘調査報告 XI』正誤表

頁	行・位置	誤	正
7	24	南調査 <u>区</u> は平成13年度	南調査 <u>地</u> は平成13年度
11	33	沼沢湿地 <u>成</u>	沼沢湿地 <u>性</u>
28	9	<u>平安</u> Ⅲ期	<u>平安時代</u> Ⅲ期
43	表 8	SD704 <u>0.5×0.05</u>	SD704 <u>2.0×0.4</u>
43	表 8	SD705 <u>2.0×0.4</u>	SD705 <u>0.5×0.05</u>
図版13		<u>R551</u>	R552
図版13		<u>R552</u>	R551

